FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO
謎とエッチの令嬢誘拐事件
その夢はミステリー
紅くりす
画 美衣 暁
フランス書院
ナポレオン文庫

Nazo to H r o Reijohyuuukaijiken

Sono Yume wa Mystery

謎とエッチの令嬢誘拐事件

その夢はミステリー

紅くりす

画 美衣 暁

謎とエッチの令嬢誘拐事件

その夢はミステリー

●もくじ

挿画=美衣　暁

登場人物
MAIN CAST
●ディー
マサルと行動をともにするブロンドの女刑事。
●マサル
医療器具会社に勤める27歳。ストレスがたまると!?…
●有紀
幼さと色気を併せ持つ21歳。マサルに憧れている。
●ジェニー
アメリカ行きの飛行機内で出会ったグラマー美人。
●理乃
西音寺家の令嬢。小生意気な美少女。
●弥生
秘書課に勤める23歳。マサルの理想の女性。

謎とエッチの令嬢誘拐事件

その夢はミステリー

まえがき　あなたとイキたいな♡

いや～ん。なにこれ？

Tバックって、お尻の割れ目に食いこんじゃってほとんどフンドシみたい。鏡に映してみたら、フンドシっていうより細い縄をT字形に巻いてるみたいだわ。これじゃあ、パンティを指でつまんで引っぱっただけで、大事なトコロが剝きだしになっちゃう。

あーん。こんなことならTバックとガーターなんか用意するんじゃなかった……とか言ってる場合じゃないわ。もぉ時間がないの。早くしないと待ち合わせに遅れちゃいそう。

ああん、あせっちゃう！　Tバックとお揃いのブラはどこ？　このワンピース、ノーブラだと乳首の部分が尖っちゃうの。そんなのエッチで恥ずかしいよぉ。

ブラをさがしているうちに、玄関で「ピンポーン」ってチャイムが鳴った。

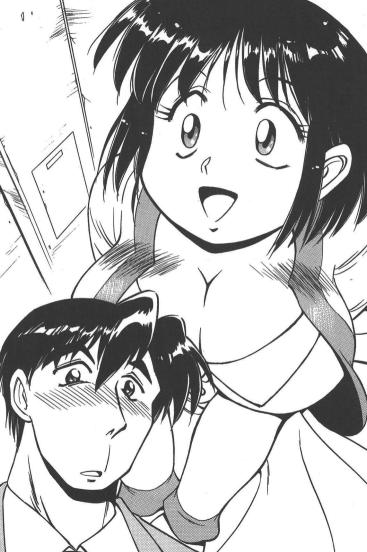
「用意できた？」
「きゃー！　どうしてあなたがそこにいるの？　空港で会おうって約束してたのに」
「早く目が覚めたから、ついでに迎えにきたんだ。用意がまだなら手伝おうか？」
とりあえずバスタオルで上半身を隠してドアを開けると、あなたったら、「お？」なんて言いながら、わたしの身体をうれしそうに見まわしている。もぉ、エッチね！
「スーツケースはお化粧道具を入れて鍵をかけるだけなの」
「オレのほうは、くりすのアソコにこいつを入れてかきまぜるだけさ」
ギクッとして振りかえると……ああっ、やっぱり！　あなたってば、どーしてこんな時にズボンを脱いじゃうのよ？　ズボンだけじゃなくて、トランクスも一緒に！
「ダメダメ。もう時間ないんだから、そんなことしてられないわ」
あなたはタンスの引きだしを開けていたわたしのウエストを後ろからつかんで、お尻の割れ目に指を這わせてくる。ひゃあ！　太腿の後ろに硬くなったモノがぶつかってる！
「時間ならなんとかなるって。くりすのオマ×コにペニスを突っこんでたっぷりかきまぜないと、オレの準備は終わらないいんだよなぁ」
「ダメよぉ、そんな時間ないんだったら。あっ……いやーん、そこに触らないでぇ」
あなたはくりすの首筋を舐めあげて、後ろから乳房を揉みたてる。もう片方の手で白い

ヒモ状のTバックをぐいぐい引っぱってアソコに食いこませる。
「おおっ。これはこれは、ずいぶん食いこんでますねぇ」
「ふぁ～ん。そんなことされたら、パンティでお豆がこすれてゾクゾクしちゃう～」
「気のせいかなぁ？　なーんかここが濡れてきたみたいなんだけど」
あなたの指とピンクの花びらがこすれ合って、チュクチュクって音が！
「もうやめてぇ。そんなにいじったら、腰が抜けて旅行にイケなくなっちゃうよぉ」
「だいじょうぶだって。これだけ濡らせば準備ＯＫ、簡単にイッちゃえるからな」
「そうじゃないの。推理小説っぽいお話を思いついたから海外へ取材旅行にいくのよ」
「まぁまぁ、旅行にいくのはオレのペニスでイキまくってからにしろよ」
「ダメだったらぁ！　ああ～ん、そんなに硬くて大きいのを入れないでぇ！」
「フッフッフ……。飛行機の中や旅行先でさんざん嬲って気絶するまでイカせてやるから覚悟しろよ。向こうのホテルや観光地で何度もなんどもエッチして、それをそのまま書けば、すげぇそそられる作品になるはずだ。頑張れよ」
「あふっ。それじゃ、くりす、がんばるっ！　ああんっ。お願い、そんなに激しく突きあげないでぇ。はあぁん。お願い、もぉ時間がないの。空港で飛行機が待ってるのよぉ。それにそれに……や～ん。イッちゃう前に、お話がはじまっちゃうーっ！」

第1章　花嫁凌辱の白日夢

あっと思った時にはもう遅く、**マサル**は歩道に倒れていた。
「いってー。誰だよ、ったくぅ」
素早く起きあがって足もとを見ると、ひとりの老人がうつ伏せに倒れている。老人はマサルをいきなり後ろから突き飛ばすようにして転んでしまったらしい。
「おい、だいじょうぶか？」
しわだらけの顔をあげた老人は、片手をブルブル震わせながら差しだした。
「誰にも渡すな。た……頼んだぞ」
マサルはなにも考えずに差しだされたものを受け取った。それがなんなのか確認する暇などない。ともかく、渡されたものを背広のポケットに突っこみ、虫の息になっている老

人を胸に抱きあげて励ましの声をかける。老人の顔はもはや土気色に変色していた。
「しっかりしろよ、ジイサン。誰か救急車を呼んでくれ！」
結局、すぐに救急車が到着して老人は病院へと搬送された。
その場で、マサルは駆けつけた婦人警察官に質問を受けた。
「あなたは？」
「いえ、ぼくは平気です。会社がありますからこれで」
「念のために連絡先を教えてください」
マサルは婦人警察官に名刺を渡してその場を立ち去った。
彼の勤めているニコマル・ケミカルはオフィス街の少しはずれに本社ビルがある。
全力疾走でロビーに駆けこんだ時、エレベーターの扉がちょうど目の前で閉まった。
「ちぇっ。階段にするか」
「**梨田**(なしだ)さん」
非常階段のドアに手をかけたマサルは、自分を呼ぶ声に振りかえった。エレベーターが開いて社長秘書の**朝野弥生**(あさのやよい)がこちらを見ている。どうやら、彼女がエレベーターをとめてくれたらしい。
「ラッキー！　ありがとう」

弥生は駆けこんできたマサルを見て、微笑(ほほえ)みをかえした。
「おはようございます。朝から8階まで階段を登るのはうんざりですよね」
マサルはなにか返事をしたかったが、そのまま黙って頭上の階数表示盤を見あげる。見ていないふりをしつつも、視野の端(はし)で弥生の姿をじっくりと観察していた。
弥生は短大の秘書課を卒業した23歳で身長156センチ。満月のような丸顔をしていて、黒い瞳はいつも涙ぐんでいるようにしっとり潤んでいる。紺色の制服は清楚(せいそ)な弥生にピッタリだったが、こうして時々見かける私服姿……特にお嬢さまっぽいスーツやワンピースを着ている時のほうがもっと魅力的だ。
今朝の弥生はクリーム色のボレロとミニ丈のフレアースカートをつけている。
「梨田さんは明日のパーティに出席するの？」
マサルはドキッとしながら振りかえった。ブラウスの胸もとからのぞく白い乳房の谷間がいきなり目に飛びこんできて、顔が熱くなってくる。
「え？　あ、うん。酒はあまり好きじゃないけど、創立記念パーティだから出席しないわけにはいかないだろ」
「そうねぇ。わたしもお酒は強くないんだけど……」
弥生は困ったような顔で考えこむ。

（パーティなんか、顔だけ出したらふたりでこっそり抜けだそうよ。なんて言えたらいいのに。……あーあ、弥生はオレの気持ちなんかぜんぜん気づいていないんだろうな）

ふたりが勤めるニコマル・ケミカルは国内でも有名な医療器具の卸問屋で、彼は8階の営業1課、そして弥生は9階の秘書課に勤めている。しかし、同じ社員でも所属部署がちがうと、年に数回ある飲み会や忘年会ぐらいでしか話をするチャンスがない。もっとも、チャンスがあっても、相手が弥生だとなぜかうまくきっかけがつかめなかった。

（どうしてかなぁ？　他の女子社員やバイトの娘なら平気で話せるのに）

マサルは内心ため息をつき、それとなく1歩後ろへさがって彼女の美しい脚に視線を落とした。弥生の脚もとに小さな金色の香水入れが落ちている。

「朝野くん、これ、きみのじゃないか？」

マサルは上体をかがめてアトマイザーを拾った。金色に輝くアトマイザーはハンドメイドらしく表面に百合の模様がびっしりと彫りこんであり、かなり高価そうに見えた。

「わたしのだわ。とても大切なものなの。拾ってくださってありがとう」

弥生はアトマイザーを受け取ると腕にさげていた紙袋を覗きこんで眉をしかめた。

「あら、底に穴が開いてるわ。ぜんぜん気がつかなかった。梨田さん、本当にありがとう」

「いや、どういたしまして」
マサルが弥生の笑顔に見とれているうちに、エレベーターは8階に着いてしまった。彼女は礼儀正しく『開』のボタンを押して彼が降りるのを待った。
「今日もお仕事頑張ってくださいね」
「うん。ありがとう」
来月27歳になるマサルにとって、弥生は彼の理想の女だった。
いつか弥生をデートに誘い、食事をしたり、映画を見たりしてもっと親しくなりたい。職場ではバリバリ仕事をこなし、私生活ではいいところをさりげなくアピールして、そのうち自然と弥生への好意を伝える。
そうすれば、いつか彼女のほうから、
「わたし、梨田さんのことが好きだったの」
と言いだすかもしれない。
「気が合うね。オレもきみが好きだったんだ」
なんてことを言って、タイミングよく四角い小箱を彼女の手のひらに乗せる。もちろんその中には指輪が入っているのだ。
婚約が整ったら上司に媒酌人を頼んで結婚式を開く。弥生には雪のように白いウエディ

ングドレスを着せてあげよう。
マサルは式がはじまる前に、彼女がひとりきりのところを狙って花嫁控え室へ侵入する。
「マサルさん、どうしたの？」
マサルは驚く弥生のドレスをまくって、その中に体を潜りこませる。
弥生は彼がこの日のためにプレゼントした白いガーターベルトをつけて、その上に小さな純白のパンティをはいている。抵抗する隙を与えず、柔らかな太腿を抱えこんでパンティの上から秘部を指でなぞりあげる。
「いや。マサルさん、やめて」
弥生は小さな声で叫ぶが、マサルはかまわず肉づきのいい太腿の内側を舌で舐めあげ、薄い布地の上から彼女のオマ×コを執拗にいじりまわす。
「ダメよ。お願い」
弥生はなんとかしてイタズラをやめさせようとするのだが、へたに動くときれいに結いあげた髪やドレスが乱れてしまいそうで、身じろぎひとつできない。
「これから結婚式なのよ。お願いだからそんなことしないで」
「結婚するんだから、いいじゃないか」
マサルはいよいよ調子に乗って、パンティのクロッチを横にずらして彼女の大事なとこ

ろを指ですっかり割りひろげる。太腿をつかんで強引に股間を割り開かせ、そこに頭を突っこむようにして弥生の秘部を舌先で舐めあげる。
「ああん」
弥生は可愛い声をあげて身体をブルッと震わせた。
「お、お願い」
「ああ。もっと気持ちよくしてやるからな」
「そうじゃないの。さっきおトイレにいったばかりなの。汚いからそんなところは舐めないでぇ」
「弥生の身体で汚いところなんかないさ」
マサルは秘唇を指で割りひろげたまま、包皮を剝いてクリ×リスを剝きだしにする。どこよりも感じやすい突起に指腹を押し当てて、クリームをすりこむようにじわじわと責めあげる。
「あくぅっ……。そ、そこはダメぇ」
弥生は股間からざわめくような快感がこみあげてくるのを感じ、鮮やかな紅を塗った唇を半開きにして切なげに息を弾ませる。白いストッキングに包まれた両脚がブルブル震えた。マサルの両肩をドレスの上から両手でつかんでいないとその場にペタンと尻モチをつ

いてしまいそうだ。
「ダメよ。人がきちゃ……ああ」
そこへノックとともに控え室のドアが開かれて、弥生の友達が数人飛びこんできた。
「弥生、おめでとう！」
「わあ！　すごくきれいじゃない」
「あ、ありがとう」
弥生は頬を赤らめて返事をかえした。マサルの舌は完全に彼女の欲情に火をつけていて、秘部を舐めあげられるたびに痺れるような快感が全身へとひろがっていく。
「どうしたの？　顔が赤いんじゃない」
弥生は平静を装い手袋をはめた手で乱れてもいない髪をそっと撫であげる。
「別になんでもないわ。この部屋、ちょっと暑くて」
「あたしたちはなんでもないけど……。ウェディングドレスって布地がしっかりしててけっこう重いから、そのせいで暑いんじゃないの？」
マサルは女たちがいることを承知の上で、弥生の花芯に唇を押しつけて舌の先でチロチロと嬲りながら吸いあげた。ぬらぬらした液で潤んできたヴァギナに人差し指を挿入すると、彼女はビクッと内腿を震わせる。

「ねぇねぇ、せっかくだから写真撮ろうよ。式がはじまっちゃったら、みんなでゆっくり記念撮影なんかしてられないし」
「それもそうね。じゃあ、あたしのカメラで撮るわ。みんな並んで」
マサルはドレスの外で女たちが動きまわる音がするのを聞きながら、花嫁の膣孔に指を出し入れしつづける。
「はいチーズ。……わあ、弥生ったら目がウルウルしちゃって、今日はすごく色っぽいじゃない」
「梨田さん、こんなにきれいな弥生を式場で見たら、感激しちゃうかもね」
弥生はクリ×リスを嚙まれてみだらな声が出そうになるのを必死にこらえた。
「悪いけど、もうすぐ係の人が式の最終打ち合わせにくるの。ひとりにしてくれる?」
「あらもうそんな時間? それじゃ、式場でね」
「弥生、本当にきれいよ。おめでとう!」
女たちの足音が部屋の外に出ていくと、マサルは弥生のドレスをまくりあげてその下から顔を出した。
弥生は黒い瞳を涙で潤ませていた。目尻から頬にかけてをほんのり赤く染めあげて、なじるような目つきでマサルを見降ろす。

「ひどいわ。友達のいる前でこんなことをなさるなんて」
「気づかれなかっただろ？」
「でも、変だと思われたかもしれないわ」
「いいじゃないか。気にするなよ」
弥生の秘部は淫蜜をたたえてひくひくうごめいている。今すぐ床に押し倒して犯したいところだが、結婚式までもう時間がない。
「このつづきはあとでしてやる。いいな」
「そんな……」
弥生は中途半端でやめてしまったマサルを非難めいた目でにらみつける。
「自分だけ満足なさるなんて、ひどい方……」
「満足なんかするもんか。おまえの身体を思うぞんぶん味わうまでは、欲求不満で死にそうだよ」
（マジで弥生が欲しくて死にそうだぜ）
マサルはデスクの前に座って回覧文書をぼんやり眺めながら、現実にはありえない弥生と自分との関係を夢想していた。いつも、彼女とデートする時のことや、新婚生活なんぞを想像するたびに、片思いの切なさで胸が苦しくなってくる。

(早いとこ手を打たないとな)
今度こそ弥生をデートに誘おうと決意していると、
「ラジオ体操だいいち〜！」
という男のだみ声がフロアに響き渡った。毎朝恒例のラジオ体操がはじまったのだ。
マサルは音楽に合わせて手足を動かしながら8階のフロアを見渡した。
自動販売機の前に**吉田有紀**(よしだゆき)がいた。制服のタイトミニの裾がめくれそうになるのを気にして控えめに体操している。
有紀はマサルの後輩で、まだ21歳になったばかりだ。彼女は社内でも評判の美人で、肩にかかる髪は明るい茶色に染めて整った顔をふちどるようにシャギーを入れている。黒目がちの大きな瞳はいつもいたずらっ子のようにクルクル動き、どことなく子供っぽいのに長いまつ毛を伏せて肉厚の美唇を尖らせるとすごく色っぽかった。
(有紀ちゃんって、いつ見ても可愛いよな)
ところが、有紀はマサルが自分を見つめていると知ると、急に頬を赤く染めてプイッとそっぽを向いてしまった。唇をへの字に曲げ、マサルの視線をことさら無視して体操をつづけている。
マサルはいぶかしげに思いながら、テープの音声に合わせて深呼吸をした。

（なんだ、今の？　オレ、有紀ちゃんを怒らせるようなこと、なんかしたかなぁ？）
ここ数日間の記憶をたどって彼女と接触したかどうかを確認してみるが、もう1週間以上有紀とはあいさつ以外の言葉を交わしていない。
（きっと、さっきのオレの目つきがいやらしかった、てなバカっぽい理由かもな）
マサルは勝手に納得して朝礼の列に加わった。
課長が、部長や各社員の今日の予定をざっと説明して朝礼が終わる。
お得意先をまわる段取りをつけるために未処理のままになっている書類をひろげていると、マサルの電話に内線呼出しを示すランプがともった。
「はい、梨田です」
『梨田さん？』
受話器から聞こえてきたのは弥生の声で、そうとわかるとマサルの胸は高鳴った。
（デートの誘いか？　それともいきなり社長室で真昼の情事？　まいったな、コンドームなんか用意してないぞ）
ほんの一瞬のうちにマサルの頭の中は妄想と願望で巨大化する。
『社長がお呼びですわ。お手数ですけれど、社長室までいらしていただけますかしら』
「あ、はい、もちろん今すぐうかがいます」

マサルは受話器を戻して席を立った。
「秘書課にいってきます」
周囲にひとこと断わってからフロアを出る。
デートのことはともかく、月曜の午前中から弥生と二度も話せたのはラッキーだった。
その上、彼女の顔を見にいけるわけで、階段を登る足も軽くなってくる。
「おはようございます、梨田でーす」
元気よく秘書課に飛びこんだものの室内は静まりかえっていた。マサルはその場に棒立ちになった。課長の射抜くような視線にさらされて元気が急に萎えていく。
「あの、社長室に呼ばれているんですが」
と言うと、部屋の隅にある給湯スペースから顔を出した弥生が、マサルに微笑みかけた。
「お待ちしていましたわ。こちらへどうぞ」
弥生は先に立って奥の社長室へと案内していく。
「失礼します。梨田さんが参りました」
マサルが社長室へ入るのはこれが二度目だった。といっても最初は去年の大掃除の時に家具を動かすのに人手が足りないからと借りだされただけで、社長とは面識はない。
社長室には窓を背にして重厚なデスクがあり、その前に革張りの応接セットが置かれて

いた。
赤ら顔で頭のはげあがったバーコード社長が正面を向いて座っていた。
「おはようございます。営業1課の梨田です」
マサルは元気よくあいさつをして頭をさげた。
「きみが梨田くんか。こちらへ座りたまえ」
バーコード社長はマサルに応接セットの右側のイスを示した。
背もたれをまわりこむようにして腰を降ろすと、斜め前に思わずハッと息がとまるほどの美少女が座っている。
青白く透明感のある肌と猫のように目尻が切れあがった大きな黒い瞳が印象的だ。つやつやした黒髪は背中の中ほどまであり、前髪は眉のあたりでおかっぱに切り揃えられている。鼻筋がすっと通った貴族的な面立ちをしていて、小さく可憐な唇がベビーピンクに輝いていた。その美少女は、都内でも有名なお嬢さま学校『星美林学園』のセーラー服を身につけていた。
(まるで等身大のフランス人形みたいだ)
呆然と見つめているマサルに向かって、フランス人形が美しい唇を開いた。
「あなたが梨田マサルさんね。さあ、ぼんやりしていないで、おじいさまから預かったも

のをお出しなさい」
　まるで銀の鈴を転がしたような美しい声だった。
「おい、梨田くん！」
　美少女に見とれていたマサルは、バーコードのキンキン声でようやく我にかえった。
「え？　あ？　おじいさまって？」
「こちらのお嬢さまは**西音寺理乃**さまだ。きみは今朝出社前に理乃さんのおじいさまである西音寺宗一郎さまからなにか預かったはずだ」
「サイオンジ？……あ、そうか」
　マサルはようやく交差点で後ろからぶつかってきた老人を思いだした。背広のポケットをさぐって、あの時とっさに受け取ったものをつかみだす。
「これですか？」
　マサルが大理石のテーブルに置いたのは、長さ4センチほどのスチール製の鍵だった。それはかなり使いこまれていて傷だらけになっている。小さなリングホルダーには鍵の他に『QC』と彫りこんだ楕円形のプレートがついていた。
　フランス人形は表情ひとつ変えずに細い指をのばしてそれをつまみあげようとした。が、数秒早くマサルが鍵を取りあげる。

「なにをするの？」
理乃は眉を逆立てて怒りの表情を浮かべた。
「待てよ。オレはあのジイサンから『誰にも渡すな』と言われてこの鍵を預かったんだ。つまり、たとえ孫でもジイサン以外の人間には渡すわけにはいかないな」
「なんですって⁉」
「梨田くん、なんてことを言うんだ。おとなしく鍵をお嬢さまにお渡ししなさい」
理乃とバーコードは激昂して口々に叫んだが、マサルは平気な顔で鍵を背広の内ポケットに滑りこませた。
「あいにくと、オレは約束を簡単に破るような人間じゃないんでね。それじゃあ、社長、他に用がなければ、これで失礼します」
「梨田くん、待ちたまえ！」
「お待ちなさい！」
美少女の高圧的な言葉を背に浴びて、マサルは険しい表情になる。ゆっくり振り向くと令嬢はソファから立ちあがって彼を真っ直ぐ見あげていた。
「おじいさまは亡くなったわ。救急車が病院に着く前に……」
「なんだって？」

大きな黒い瞳に涙が盛りあがった。理乃はまばたきもせずにマサルを凝視し、
「亡くなったわ。亡くなったのよ……」
まるで自分自身に言い聞かせるように繰りかえして下唇を嚙みしめる。そして吐息をひとつついた。
「わたしは、おじいさまがわたしのために遺してくださったものを早急に受け取らなければならないの。そのためにはあなたがおじいさまから預かった鍵が必要なのです」
「死んだのか」
とマサルはつぶやき、内ポケットから鍵を引っぱりだしてじっと見つめた。
「おじいさまはもとから心臓が悪かったの。お年のせいでもう手術には耐えられなくて、今度大きな発作が起きたらその時は危ないと言われていたのよ。今朝は病院へいく途中で車が故障して、やむをえずタクシーに乗り継ごうとしていたところで発作が起きて……」
「梨田くん。きみも知っているとおり、西音寺コンツェルンはうちの親会社で株の3分の2を所有しておられる。西音寺宗一郎さまが亡くなられたからには、うちにもなんらかの影響があるだろう。それがいい影響を与えるか、それとも悪い影響をもたらすかはまだわからないが、きみが協力してくれさえすれば……」
社長は耳障りな高い声で説明をしたが、宗一郎の孫娘である理乃がいる手前、最後まで

言えずに言葉尻を濁した。けれども、その目はマサルに「西音寺ファミリーに隷従しろ」と命令している。
「わかりました。約束を破るのは不本意だが、鍵をお渡ししましょう」
ところが、マサルが古びた鍵を差しだしても、理乃は受け取ろうとしなかった。そのかわり社長を振りかえって、
「この人、パスポートは持っているのかしら？」
と問いかけた。
「梨田くんが？　おいきみ、パスポートはあるのかね？」
「数年前につくったのが……確かまだ期限は切れてないと思いますが」
「それでは、その鍵を持ってわたしと一緒にきていただくわ」
マサルは理乃の言っていることの意味がわからず、首をかしげて彼女を見た。
「この鍵をおじいさま以外の人に渡せば、あなたは約束を破ったことになる。だから、鍵は誰にも渡さずにその秘密を解きさえすればいいのよ。それでは、しばらくの間、この人を西音寺コンツェルンのためにお借りするわ」
理乃は形のいい顎をツンとそびやかしてひと息にまくしたてた。「わたしに歯向かうものは情け容赦なく処罰する」とでも言いたげな傲慢な表情を浮かべて、バーコードとマサ

ルをかわるがわる見つめる。
「それじゃあ、いきましょう」
マサルの前を横切った理乃は、社長室のドアの前で足をとめて振りかえった。
「時間がないのよ。早くなさい」
「待てよ。今の、どういうことだよ？」
マサルは事情を呑みこめずにバーコードへ目を向けた。すると社長はまるでなにもかもあきらめきったようにかぶりを振ってみせる。
「これからはこちらの理乃お嬢さまがきみの雇い主だ。ワシの会社に戻っていいと言われるまでは、お嬢さまの側にお仕えするのだ」
「なんだって？　オレはあんたの会社に入社したんだぞ。こんな生意気でションベン臭いガキの召し使いなんかになるくらいなら、いっそクビになったほうがマシだぜ」
「なんですって？　今の言葉は聞き捨てならないわ。わたしの足もとにひざまずいて、すべて取り消しなさい！」
「うるせぇ！」
「梨田くん、頼む。きみの言動ひとつがニコマル・ケミカルの将来を左右するのだ。頼むから軽率(けいそつ)なマネだけはしないでくれ」

バーコード社長はマサルの両脚にすがりつかんばかりの表情で頼みこんだ。青ざめたその顔には、「おまえが勝手なことをすれば、わしの会社はこの子供に潰されてしまう」と書いてある。
マサルは自分をにらみつけている美少女へ視線を戻した。脳裏には、社長室へ案内してくれた弥生の笑顔が浮かんでいる。
(オレがここでお嬢さまの機嫌を損ねれば、オレだけじゃなく、弥生もこの会社を辞めさせられるのか？　いや、この会社そのものが潰されてしまうのか？)
マサルは大きく息を吸いこみ、吐きだす勢いにまかせて言葉を発した。
「言っておくが、オレは自分が本気で思っていることしか言わない主義だ。それに自分が心から尊敬できると思えるような相手でなければ命令に従うつもりはない。だが、今回は別だ。ニコマル・ケミカルの社員を救うためなら、どんな命令でも従おう。ただし、悪事に関する命令やオレの人格を無視した命令には絶対に従わない。わかったな？」
理乃は怒りのあまり若々しい美貌を青く染めたままで彼をにらみあげた。
「許しを求めなさい。そこにひざまずいて『下品きわまりない言葉を使って申しわけありませんでした』と言うのよ」
「絶対にイヤだね。あんたはサル山のメス猿より生意気で、まだおしめが取れない赤ん坊

みたいにションベン臭いガキだ。その事実だけは変えられない。いいか、自分は生意気なんかじゃないしションベン臭くないというなら、それを証明してみせろよ。証明できたらさっきの言葉はきれいさっぱり撤回してやる。わかったな?」
「な、な、梨田くん……」
バーコードはにらみ合うふたりの間に挟まれて、泣きそうな顔をして言葉を震わせた。おどおどしながらマサルと理乃の顔を見くらべたと思うと、必死になってマサルのかわりにジュウタンにひざまずく。
「すみません、こいつのかわりにワシが謝りますから」
バーコードが土下座する姿を見て、ようやく理乃が唇を開いた。
「よくわかりました。社長さん、わたしは車で待っています。この野蛮人にさっさと身じたくを整えてくるように言っておきなさい」
怒りのせいで語尾が震えそうになるのを必死にこらえてそれだけ言うと、自分の手でドアを開けて社長室を出ていった。
「な、な、梨田くん」
バーコードはとうとう腰が抜けたらしく、その場に座りこんだまま汗びっしょりの顔でマサルを見あげる。

「頼むよ。頼むから彼女にだけは逆らわないでくれ」
「わかってます。でも、あの年であんな物の言いかたをしてたんじゃあ、彼女のためにはならないでしょう？　誰かがきつく言ってやらないと……」
「そんなことはどうでもいい。いいか、あの子の父親は数年前に事故で亡くなり、親権者は義理の母親である**美和子**（みわこ）という女性になっている。しかし、もし宗一郎が死ねば、彼は美和子にではなく理乃お嬢さまにすべてを相続するという噂が流れている。無論うちの株券もすべてだ。とにかくあの子の機嫌を損ねないようにして、うまく役目を果たしてこい。いいな？」
「わかりました。それじゃ、ぼくはこれで」
マサルは怒りを胸に秘めたまま、社長室を飛びだした。
「お疲れさまでした」
弥生が気づいて声をかけてくれたが、返事をする余裕もない。頭の中では、
(なんでオレがあんな小娘の言いなりにならなきゃいけないんだよ？)
という思いでいっぱいになっている。
他人の……それも自分より10歳も年下の女子高生のご機嫌取りをするなんて、まっぴらごめんだ。他人の顔色をうかがい、先手を打って動いたりおべんちゃらを使うなんてこと

は苦手だったし、そういうことが上手な人間なら社内に掃いて捨てるほどいるのをよく知っている。

「どうしてよりによってオレなんだよ？　鍵を渡そうってんだから、素直に受け取ればよかったじゃないか」

と言ってみても、もう遅い。

マサルは足音も荒く階段を降りていった。8階へとつづく防火扉を開けようとすると、扉がひとりでに開いて有紀が顔をのぞかせた。

有紀は「あっ！」と叫んで扉を閉めかける。しかし、マサルはとっさに彼女の腕をつかんで階段の踊り場へ強引に引きずりだした。

「おい、どうして逃げようとするんだよ？」

壁に押しつけるようにして問いかけると、有紀は唇を震わせて横を向いた。

「お願いだから、もう放っておいて」

「なんでオレを見てそんなに怯えるんだ？」

有紀は涙を浮かべてマサルをにらみつけた。

「あんなひどいことをしておいて、よくもそんなふうに平然と振る舞えるわね。梨田先輩って二重人格なんだわ。でなきゃ病気よ。お願いだからもうあたしには近づかないで。顔

も見たくないし、声も聞きたくないの！」
有紀は呆然となるマサルの手を乱暴に振りほどき、彼の腕の下をかいくぐって階段を駆け降りていく。
「有紀ちゃん！」
マサルは階段の手すりから身を乗りだして叫んだが、有紀は別のフロアへ出ていったらしく、扉の閉まる音だけが返ってきた。
「オレが二重人格？　病気？　どういうことだよ」
マサルは有紀が残した言葉を不思議に思いつつ営業1課へ戻り、1課長の堂島のデスクへ真っ直ぐ歩いていった。
堂島は電話中だったが、ちょうど受話器を戻したところで、
「話は社長から聞いた。仕事のことは心配ない。とにかく気をつけていってこいよ」
とだけ言った。
マサルは「はい」と返事をして席に戻った。机の上はいつもどおり散らかっていたが、
(机をきれいにするのは、会社を辞める時か、もしくは自分が死んだ時だ)
そんな気持ちが働いて、どうしても机をかたづける気にはなれなかった。
(死ぬなんてとんでもないぞ。オレはしばらくの間出張する。そう思っていればいいさ)

自分自身にそう言い聞かせて引きだしを覗きこんだ。

机の中は事務用品や医療器具のカタログ、回覧文書のコピーなどが入っているだけで私物は数点しかない。万札が数枚と海外でも使用可能な銀行系のクレジットカード入りの財布。

そして、一番大きな引きだしから急な出張に備えて常備している真新しいワイシャツと下着の包みを取りだした。

「おい梨田、5分くらい前に仏蘭西(ふらんす)商事から新商品の在庫の件で電話が入ってたぞ。……なんだよ、出張か？」

同期入社の藤本が声をかけてきた。

「ああ。業務命令でしばらく出張だ。悪いがあとは頼んだぞ」

「しばらく？　ずいぶんとあいまいなんだな」

藤本はニヤニヤしながら声を潜めた。

「おまえがいない間に有紀ちゃんをモノにしちまおうかな。それでもいいか？」

「オレはかまわないぜ」

マサルがクールな口調で答えると、藤本は黒目をクルッと引っくりかえして仰天してみせた。

「へえ、驚きだな。有紀ちゃんはおまえが好きだって噂があるのに」
「そんな噂、誰に聞いたんだよ？」
「おまえは残業だったから誘わなかったけど、きのう会社が引けてから有紀ちゃんたちと飲みにいったんだ。オレが有紀ちゃんを酔わせて口説こうとしたら、『あたし、梨田先輩が好きなのー！』とか言いだして、ひとりで先に帰っちまったんだ。けっこう酔っぱらってて足もとが危なっかしかったから送っていこうとしたんだが、タクシーでも捕まえたらしくて、追っかけてった時にはもういなかったんだよ」
「そうか」
「なんだよ、もっとうれしそうな顔をしろよ」
藤本に軽くどやされても、マサルは素直に喜べなかった。
（きのうの有紀ちゃんはオレを好きだったかもしれないが、今はぜんぜんそんな素振りすらも見せないじゃないか。それどころか、オレを二重人格呼ばわりする始末だし……）
「なぁ、有紀ちゃんって、きのうはおまえんちに押しかけたんじゃないのか？」
「いや、オレは残業のあとで飲み屋に寄ったんだ。たしか、マンションに帰ったのは夜中すぎだったような気がする」
マサルは理乃を待たせているのを思いだして、あわててイスを立った。

「ふーん。じゃあ、気をつけていってこいよ。旅先で変な女に引っかかんな」
「藤本とはちがうからだいじょうぶさ」
マサルは苦笑しながら営業1課を後にした。

第2章　無理やりエッチで処女喪失

有紀はマサルの手を振りほどくと非常階段を駆け降りて2階下のフロアへ飛びだした。女子トイレに飛びこんで、荒く弾む息を整える。

「梨田先輩、きのうのことは覚えてないのかしら?」

そうつぶやくと、大きな瞳に涙が盛りあがってくる。

昨夜有紀は会社の同僚たちと飲みにいった。その帰り道、偶然マサルと出くわし、とっさにへべれけに酔っているふりをしてマサルの部屋へ泊めてもらうことになった。

「そこまではよかったのよ、そこまでは……」

有紀は鏡に映る自分の顔をじっと見つめつつ、それからのことを思いだした。

☆

マサルの部屋へ入ると、有紀はソファにもたれて眠りこんでしまった。
本当はふたりきりになったら告白するつもりだったのだが、どたんばで勇気がくじけてしまい狸寝入りを決めこんでしまったのだ。
「しょうがないなぁ」
マサルは有紀の服を脱がして着古した白いワイシャツを寝巻きがわりに着せつけた。それから、彼女の身体をベッドの上に横たわらせる。だが、有紀はぜんぜん目を覚まそうともしない。
マサルは有紀の白い頬に人差し指を這わせた。有紀のセクシーな身体を見ているうちに口の中につばが湧いてきて、ごちそうを前にしておあずけを食らっている犬のような心境になっていた。今すぐごちそうを食べたいのに、合図をくれる飼い主はいない。
「有紀ちゃん?」
有紀が狸寝入りをしているとは知らずに、マサルは女らしくふっくらと盛りあがった乳房のふくらみに指をのばし、胸もとのボタンをはずしはじめた。3つはずしたところで有紀はようやく目を覚ました。
「先輩、どうしたの?」
「欲しいんだ」

マサルに詰め寄られて、有紀は怯えたような表情になる。
「待って。あたし、そんなつもりじゃ……」
「オレだってそんなつもりじゃなかったんだ。でも、こんなにおいしそうな身体を見せつけられたんじゃ、もう我慢できないよ」
マサルは真剣な表情で彼女の両肩をつかんだ。
「だって、あたし……」
有紀は唇を震わせて視線をそらした。マサルの硬く勃起したものが太腿に押しつけられているのに気づき、ギュッと両目をつぶってしまう。片手で彼の手をそっと払いのけて、乳房を守るように胸の上で両腕をクロスさせる。
「あたし、梨田先輩はこんなことをするような人じゃないと思ってたのに」
「誰にでも『こんなこと』をするわけじゃない」
有紀は下肢をばたつかせて必死に抵抗した。
「先輩、怖い。お願いだから、そんなひどいことはしないで。あたし、梨田先輩のことを信用してたのよ。それなのに裏切られたって感じ」
「裏切ってなんかいないさ。オレは好きな女しか部屋に泊めない主義なんだぜ」
有紀は驚いて身体の力を抜き、マサルの顔をまじまじと見つめた。

「いま言ったこと、本当？」
「ああ。オレが有紀を好きだってこと、ぜんぜん知らなかったのか？」
「知らない。だって、先輩、そんなことはひとことも言わなかったじゃない」
「社内恋愛はいろいろと面倒だからな。有紀に恋人がいるかどうかも知らなかったし、今までずっと様子を見てたんだ」
「本当？」
マサルは「ああ」とうなずき、有紀の胸もとを覆う古びたワイシャツを力任せに引き裂いた。裂けた服の下から、大きな白い乳房が飛びだした。
有紀の乳房は彼の手にあまるほど大きく、まるでつくりたてのプリンよりも柔らかく揺れて挑発する。先端は果実のように尖り、乳首はくすんだピンク色をしていた。
「見ないでぇ」
「じゃあ、見ない。でも、そのかわりにこうしてやる」
有紀は悲鳴をあげて胸もとを隠そうとしたが、マサルは抗う彼女の両手を頭上にねじあげて乳房の頂きに唇を這わせた。小さなピンク色の突起を口に含み、もう片方の手で有紀の乳房を揉みしだく。
「いやあっ、こんなのイヤだったら！」

マサルは息を弾ませながら2本の指で乳首を挟み、巨乳を手のひらですっぽりと包みこんで揉みあげる。もう片方の乳房を底辺から頂きに向かってペロペロと舐めはじめた。
「ふはあっ、お願いだからやめてぇ」
さらに、マサルは乳首を口に含んで舌の先で弾くように転がす。有紀の敏感な突起はみるみるうちに充血して硬くしこる。
有紀は全身をこわばらせてすすり泣くような吐息をもらした。マサルの両肩をつかんで押しかえそうとするのだが、乳房を執拗にしゃぶられると身体の奥が熱くとろけてきてしまい、どうにも抵抗できなくなってくる。
「お願い、今日はダメなの」
「危険日なら、中出ししなきゃだいじょうぶだろ」
露骨な言葉を耳にして、有紀は頬を染めて横を向いた。マサルの腕に手をかけて押し戻そうとしつつ、心の中で葛藤していた。
(前からずっと梨田先輩が好きだったんだもん。エッチくらいしてもいいかも)
そうは思うのだが、こうも簡単に処女を与えてしまうのはちょっと悔しい気もする。
「んっ。先輩……ああん」
マサルは尖らせた舌の先で有紀の脇腹を掃くようになぞっていく。

有紀はくすぐったそうに身をよじり、甘い声を放って輝くばかりの裸身を震わせた。熱い男の手が肌の上をなぞりあげるたびに自然と身体から力が抜けて、徐々に抵抗する意志を失っていく。

マサルは隙を狙って下腹へ片手をのばした。固く閉じられた太腿の間に指を潜りこませて、サラサラしたスキャンティの布地の上から女の秘部をこすりたてる。

サテンに包まれた谷間の上を指で数回なぞっただけなのに、有紀は朱唇を半開きにしてあえいだ。その手はシーツをぎゅっと握りしめている。

「んくうっ。せ、先輩、堪忍(かんにん)してぇ」

有紀は抵抗の声をあげながらも、知らずしらずのうちにムチムチした太腿をゆっくりとひろげていく。これではまるで男を拒否するどころか、逆に挑発しているようだ。

マサルはスキャンティの横から指をこじ入れて、有紀の秘部に直接タッチした。肉厚の花びらをかきわけてしっとりと潤った女の部分に触れる。狭間の中央を指腹でえぐるように刺激すると有紀は半裸の身体をゾクッと震わせた。

「あんっ。……先輩」

「ずいぶん敏感なんだな」

「やだっ、恥ずかしい」

有紀は甘い声をあげて潤んだ瞳で男を見あげた。
「お願い、あたし、初めてなの」
マサルは愛撫の手をとめて、意外そうな表情で有紀を見た。
「本当に？」
黙ってうなずいた有紀は、真っ赤に染まった頬を見られないように両手で顔を覆ってしまった。
「やさしくしてね」
指の間からくぐもった甘い声が聞こえてきて、マサルのペニスはいっそう硬さを増してズボンの股間を内側から突きあげた。抵抗しなくなった有紀の肢体から、スキャンティを脱がせようとしたが、ヒップに邪魔されてうまくいかない。
「腰、浮かせろよ」
有紀がお尻を持ちあげると、マサルは桃の皮を剝くようにスキャンティをペロリと剝ぎ取った。小さな布切れの下からふっくら盛りあがった恥丘と軽くカールした恥毛が現われる。つづけて投げだされた両脚をつかんで左右に割りひろげた。
「ああっ。恥ずかしい」
有紀の秘唇はまるで男根を誘惑するかのように、花びらがパックリと開ききっていた。

「きれいだよ。桜の花びらみたいに淡いピンク色で、中が鮮やかな薔薇(バラ)色をしてる」

クリ×リスから菊門まで大切なトコロをあますところなく視姦されて、有紀はたまらず小さな声で叫んだ。

「いやっ、恥ずかしい。お願いだからそんなこと言わないで」

その拍子に下腹に力が入って、蜜壺の入り口に透明な液が溢れる。

マサルは有紀のむっちりした内腿を左手で愛撫しながら、右手の指でラブジュースをすくいあげて、舌先でペロリと舐めあげた。

「ちょっと塩がきいてるな。有紀も舐めてみるかい？」

有紀は頰を真っ赤に染めて、朱唇へ突きつけられた男の指を拒否するようにイヤイヤをしてみせる。

「できない」

「それじゃあ、下のお口に食べさせてあげるよ」

マサルは指先にまとわりつく淫ら汁をクリ×リスにこすりつけた。包皮に包まれた肉芽の上を円を描くように刺激するたび、有紀の青白い内腿がピクピクッとけいれんする。

「んっ……はあぁっ」

「気持ちいいの？」

うなずいた有紀の黒い瞳は、欲情に駆られて熱く潤んでいる。
「はっきり言ってごらん」
有紀は恥じらいながらも濡れた唇を開いた。
「気持ちいいの。そこが……」
「そこってどこ？　はっきり言わないともうこれ以上してやらないぞ」
マサルは花芯を嬲る舌の動きを中断して、有紀の顔をじっと見つめた。
21歳の美少女はすべすべした頰をいっそう赤く染めあげて、愛らしい唇をわななかせる。
「有紀の……アソコ」
「アソコってなに？　はっきり言えよ」
マサルはわざとじらすように肉芽の周囲を指でなぞりあげる。
「あの……クリ×リスに触るとすごく気持ちがいいの。お願いだからもっといじって」
甘い声でおねだりをされるとマサルの血は熱くたぎり、股間の逸物がカーッと熱くなってくる。
「そうか、有紀はクリ×リスが弱点なのか」
マサルは真珠にも似たみだらなつぼみに指を押し当て、微妙な強弱をつけて執拗に愛撫をつづけた。すると肉芽は充血してプクッとふくらみ、包皮がめくれて完全に露出する。

「んっ……。そこ、気持ちいい」
有紀は形のいい乳房を突きあげるようにして、大きく息をついていた。頭の中がもうろうとしていて、夢見心地になっている。
(これは夢？　それとも現実なの？　とても気持ちがよくて、腰が抜けちゃいそう)
マサルの燃えるように熱い視線が、若く艶やかな肌をじりじり焦がしていく。
「ああんっ。感じちゃう」
「有紀、きれいだよ」
「見ないで。恥ずかしいの」
有紀はかぼそい声をあげて身をよじらせた。羞恥で頬を火照らせて、両手で顔を覆ったままイヤイヤとかぶりを振る。膣口はマサルの執拗な愛撫を受けて、恥ずかしい液でぐっしょりと濡れそぼっていた。乙女の誘い水は会陰部から菊門まで伝い落ちている。
「すっかり濡れたぞ」
「いやん。そんなこと言わないで」
マサルは先走りの液でじっとりと湿ったトランクスをずり降ろす。
マサルのペニスは標準よりひとまわりサイズが大きく、彼女の秘部から漂う体臭を吸収すると、ますます硬くそそり勃ってヘソを打たんばかりに反りかえり、亀頭の先割れから

潤滑液を噴きだしながらゆらゆらと揺れている。もうこれ以上はもちそうもない。
「そろそろいいだろ?」
有紀は上気した表情でマサルを見あげる。
「わかんないけど、いいかも……」
マサルは抵抗する隙を与えずにのしかかっていったが、有紀は無意識のうちに防御本能を働かせて両脚をきつく閉じてしまった。
「ああ、いや……」
「力を抜けよ」
マサルはぴったりと閉じられた太腿の合わせ目に片手を強引にこじ入れ、もう一度充血してぷっくりふくらんだ肉芽をこすりあげる。
「んっ……」
有紀は両手を身体の横に投げだしてシーツを軽くつかんだ。目を閉じていると身体中の神経が研ぎ澄まされて敏感になり、無意識のうちに男の愛撫に反応しはじめる。
「んはぁっ……」
マサルはようやく緊張を解いた有紀の形のいいヒップの下に羽根枕を押しこんで、剛直を挿入しやすいように秘部の位置を高くセットした。おいしそうな太腿を開かせてピンク

色のビラビラをつまむ。それを左右に思いきり開いて、瑞々しい果肉を覗きこむ。
「ああんっ。お願い、やさしく……、やさしくしてね」
「わかってるさ」
マサルはクレヴァスを指で揉みしだくと、暴発寸前になっている太いペニスの先端をほんの5ミリほどしか開いていない小さな秘孔に突きつけた。
「いくぞ」
と言いながらきゅっとくびれたウエストをつかみ、こわばりの先端をねじこんでいく。
有紀の膣口は異物を呑みこもうとゆっくりと口を開いていった。ところが、マサルの男根はあまりにも大きすぎて、なかなか奥まで入っていかない。そうこうしているうちに、亀頭が狭い肉洞をくぐり抜けた。
「ひぃぃーっ！　い、痛いっ。もうやめてぇーっ」
処女を失った瞬間、有紀は狭間を引き裂くような激痛を感じて悲鳴をあげた。両手でマサルの胸を必死に押し戻そうとする。
しかしマサルは有紀の抵抗にはかまわずに、熱く脈打つ太幹を押し進めていく。ペニスは狭あいな肉壺の内側を拡張するようにめりこんでいき、やがて完全に根元まで埋没してしまった。

「うっ。処女だけあって、すごい締めつけだな」
マサルは肉棒全体を締めつけてくる蜜壺の感触を堪能した。有紀のヴァギナは持ち主の意志とは関係なく収縮しはじめ、ペニスをしぼるように圧迫してくる。
「こんなにきつく締めつけられたんじゃ、すぐにイッちゃいそうだ」
マサルは限界まで勃起したペニスを締めつけてくる処女壺の心地よさにうっとりと酔いしれた。秘孔に深く引き抜こうとするが、熱く潤む女の花奥はその入り口のあたりで勃起をきつく締めつけてどうしても離そうとはしない。
「ひいぃっ。やめてっ、動かさないでぇっ」
一方、有紀は目に涙を浮かべていた。マサルが無理やりペニスを抜こうとすると裂けた部分がこすれて焼けるような痛みが走る。
「いやあっ。ああーっ。死んじゃうーっ!」
と叫びながら、白いシーツをつかんで裸身をのけぞらせた。
「しいっ。大きな声を出すなよ」
マサルは片手で有紀の口をふさぎ、木の幹のように硬くなった勃起で彼女の蜜壺を深々と突きあげた。
「有紀、だんだん気持ちよくなってくるからな」

かすれた声で言って剛直を強引にピストンさせていく。処女のヴァギナは少しずつ拡張されて柔軟さを見せ、肉襞がねっとりと剛直にまとわりついていく。
「はっ、ひっ、ひいぃぃ……」
有紀は壊れた人形のように犯されつづけた。ペニスを抽送されればされるほど破瓜の痛みは増していくばかりで、少しも気持ちよくなってこない。
秘唇は膣奥から大量の蜜を溢れさせていたが、それでもマサルの剛直は大きすぎて肉壁に焼けるような圧迫感をもたらした。
「もうっ……ああーっ」
助けを呼ぼうにも、声がかすれて出てこない。必死になって彼の腕に爪を立てる。
ふたりの結合部はみだらな液にまみれ、粘膜と粘膜のこすれ合う卑猥な音が静かな部屋に響いた。
「いいぞ、有紀。いいマ×コだぜ」
マサルはかすれた声で叫ぶと腰の動きをいっそう速めた。股間から這い昇ってくるような悦楽の波は、脳天へと突き抜けていく。
「有紀っ！」
感きわまった声をあげて、秘孔にペニスを根元まで突き入れたまま、ドプドプドプッと

スペルマを放った。

「ふうっ」

マサルは息を弾ませながら、目の前に横たわる有紀の肉体を見降ろした。

有紀の内腿には鮮血が飛び散っていて、シーツの上にも処女血が小さなシミをつくっていた。

マサルは深呼吸をしてグッタリしている有紀の手をつかんだ。古いネクタイを使って手首を縛り、ネクタイの先を片方ずつベッドのヘッドボードに結びつけてから、彼女の頬を軽く叩いた。

「う……ん」

有紀はゆっくりと目を覚まして視線をさまよわせた。マサルの顔を見つけると「先輩」とつぶやいて抱きついていこうとする。しかし、すぐに両手を拘束されていることを知ってハッと表情をこわばらせた。

「先輩、どうしたの？　これ、ほどいて」

「残念だが、まだ全部終わっちゃいないんだよ」

「終わってないってどういうこと？」

「処女はいただいたが、その報酬をこれから与える」

「報酬？」
有紀は問いかえしながら両腕に力を入れてみた。が、ネクタイは固結びにされていてビクともしない。まるで軽石かなにかをこすりつけたような処女喪失の痛みだけが大切な場所に残っている。
「ああ。二度目は必ずイカせてやるからな」
「お願い、こんなことしないで」
マサルはテーブルの上に置いてあった有紀のイヤリングを手に取った。
「オレの調教を受ければどんな女でも身体中が敏感になって、ちょっと嬲られただけで簡単にイケるようになる。これからおまえを男なしじゃいられないようなみだらな女にしてやるからな」
「そんなのいや！」
「おいおい、大声を出すなよ」
マサルは有紀のスキャンティを取って彼女の口に押しこみ、ベッドの脇にひざまずいて大きな乳房に両手をのばした。
有紀は怯えた顔でマサルの行動をじっと見ていた。
マサルは白い乳房をわしづかみに揉みしだいた。乳首が尖ってくるとイヤリングのとめ

金を緩めて、くすんだピンク色の突起をそれぞれ挟みこんだ。
有紀は思わず「痛い」と叫んだが、その声はランジェリーに吸収されてしまった。息がうまくできず、小さな鼻で必死に呼吸する。
マサルは有紀の顎をつまんで茶褐色の瞳を覗きこんだ。
「大声で叫ばないと約束すれば、もっと楽に息ができるようにしてやろう。ただし、約束を破ればただじゃすまないぞ。わかったか？」
有紀が了解の印に頭を縦に振るのを見て、マサルはスキャンティをはずした。
「どうしてこんなことをするの？」
しかしそれには答えずに有紀の身体をすくうように抱きあげて、彼女の背中をヘッドボードにもたせかけた。
「おまえには主人であるオレに質問することも、抵抗することも許されていない。もしもそれを忘れたような素振りを見せたら、その時は誰が主人なのかをおまえの身体にもう一度刻みこんでやるからな」
有紀は唇を震わせてマサルを見た。
職場にいる時のマサルは誰にでも人当たりがよく、仕事もてきぱきとこなす有能な男だった。女性にもやさしくて上司からの人望も厚い。

だからこそ、有紀はマサルが好きだったし、いつか告白してみようとも思っていた。昨夜は偶然街で声をかけられ、とっさに泥酔したふりをしてこの部屋に泊めてもらっただけなのに、どうしてこんなことをするのだろう？

有紀はマサルがバスルームから持ってきたものを見て、思わず息をとめてしまった。

「まさか、そんな……」

マサルは有紀の太腿をつかんで左右に開かせ、その間に電気シェーバーを置いた。

「その顔だと、これからオレがなにをするのか、すっかりお見とおしのようだな」

低い声で笑って有紀の狭間に手をのばす。

「お願い、そんなことしないでください」

「おまえの恥毛は薄いし、いっそないほうが淫靡(いんび)で男をそそるんだよ。いいか、黙って見ていろ。ケガをしたくなかったら動くなよ」

マサルは有紀の太腿をできるだけ大きく開かせて、恥丘にシェーバーを突きつけた。スイッチを入れるとブーンという音が静かな部屋に反響する。

「ああ、そんな……」

シェーバーはジジジジ……と振動しながら茶褐色の恥毛を少しずつ刈り取っていく。

有紀が見ていられなくなって両目をつぶると、マサルはイヤリングのとめ金をつかんで

乳首をひねりあげた。
「痛いっ！」
「痛い目にあいたくなかったら、おまえのマ×コがツルツルになっていくところを自分の目でじっくり見物するんだな」
有紀はすすり泣きをもらしながら、大事なところが剝きだしになっていくのを凝視した。
マサルはピンク色の秘唇をつまんでシェーバーを太腿のつけ根に滑らせていく。
「可愛い顔して尻のほうまで毛が生えてやがる」
「そんなこと言わないでください」
「本当のことを言ってなにが悪い？　ほら見ろ、すっかりツルツルにしたら、まるで小学生のマ×コみたいじゃねぇか」
マサルはパソコン用デスクの上から20センチ四方の鏡を持ってきて、有紀に見えるようにクレヴァスを映した。
「ほら、ちゃんと見ろ。おまえのマ×コはガキみたいな色艶をしてるくせに、スケベなよだれをだらだらこぼしてるだろ？」
有紀は泣きながら鏡に映しだされたアソコを見つめた。生まれて初めて目にする狭間はマサルの指で陰唇を大きく開かれていた。内側の赤みがかったきれいなピンク色の処女膜

が裂けていて、そこに血がにじんでいるのがはっきりと見えた。秘孔は小指の先くらいの大きさに開いている。自分の視線を感じたのか入り口が急にきゅっとすぼまって、膣口から白濁液が溢れだした。
「下の口をすぼめやがって。そんなに自分のマ×コを見るのが好きか、ああん?」
「ちがいます。こんな……ああっ、恥ずかしい」
「いいか、ちゃんと見てろよ。これからおまえのマ×コがどれくらいスケベで貪欲にできてるか、見せてやるからな」
有紀は鏡を通じて、マサルが自分の膣口に指を1本挿入するのをじっと見つめた。痛みはないが、あまりにも羞恥が強すぎて気が遠くなってくる。
「お願いです。もう堪忍してぇ」
マサルは1本だった指を2本に増やして膣壁をこすりたてた。時々有紀の表情をうかがいながら指を引き抜き、秘孔から3、4センチ上のあたりを刺激する。
「くっ……、くううっ。はっ」
その指がGスポットを捕らえると、有紀は急に息を弾ませ、乳房を突きだすようにして腰をひねりはじめた。全身から汗が吹きだし、熱を帯びて柔肉がとろけていく。まるで女体の奥にスイッチが隠されていて、花奥へ挿入した指がそれを押してしまったような感じ

だった。
マサルは有紀の身体が思いどおりに変化していく様をじっと見守った。ほんの小さな指の動きが若い女の意識を奪い、裸身をくねらせる。
「はひいっ、ひっ。ひぃぃ」
有紀は白目を剝いて激しくヒップを振りたてた。男の指はまだなお執拗に蜜壺の内側をかきまわしている。
「どうだ、気持ちいいだろう?」
という問いかけに、有紀は「ううっ」とうめいてガクガクと頭を縦に振った。膣壁をこすられればこすられるほど恐ろしく大きな快感がこみあげてきて、四肢がけいれんを起こしてしまう。もう、理性はほとんど残っていなかった。ただただ、生まれて初めて経験するエクスタシーの潮流に身をまかせ、うっとりと酔いしれている。
マサルはだらしなくよだれをたらしてあえいでいる有紀の美唇をむさぼった。舌に舌を絡めてだ液を吸いあげ、毛づくろいをするように上気した頰を舐めあげる。その間も執拗にGスポットを責めたてると、とうとう彼女は「ひいいっ!」と叫んでひときわ大きく裸身をわななかせた。
柔らかくとろけきった身体は力を失ってぐったりとなる。完全に気をやってしまったら

しく、ピクリとも動かなくなった。
マサルはヴァギナから愛液で濡れそぼった指を抜いて、かわりに勢いを取り戻した剛直を突き立てた。二度目のインサートは処女の時よりもスムーズだった。
有紀のヴァギナは大量の蜜をたたえて潤んでいた。硬く張りつめた肉茎が突き入れられると、待ちかまえていたように肉襞をねっとりと絡みつけて締めつけてくる。
小さな握り拳のような亀頭で膣壁をえぐられて有紀は意識を取り戻した。またもや凌辱されていると知って「ああ」とうめいて顔をそむける。
「お願い、もう堪忍してぇ」
しかしマサルは無言のまま牝壺を嬲りつづける。白くムチムチした太腿を腋の下に抱えこんで引きしまった腰を律動させる。
「はっ、ひいぃっ」
こわばりの先端が子宮口に当たるほど深々と突きあげられて、有紀は悲鳴じみた声をあげた。ラブジュースが結合部から次々と溢れだしてくる。泣きながらイヤイヤとかぶりを振ると柔らかな乳房が重たげに揺れて、乳首を挟んでいたイヤリングが片方弾け飛んだ。
マサルは大きく張りつめた乳房を揉みあげながら剛棒を猛々しくピストンさせた。女の裸身は甘い花のような匂いを部屋中にまき散らし、男の獣欲をあおりたてる。彼は体中が

痺れるような快感をこらえて有紀を犯しつづけた。
「ひぃーっ。身体が弾けるぅっ！」
有紀は両手を拘束されているのがもどかしくなり、髪を振り乱して裸身をくねらせた。いつの間にか両脚を男の腰に絡めて、荒れ狂う巨大なペニスをヴァギナのずっと奥へ引きずりこもうと肉壁をうねらせる。
「有紀、自分でケツを振るほど気持ちがいいのか？」
「いいっ！　もっと犯して。メチャメチャに壊してぇぇっ」
涙をこぼし、美身をのけぞらせて有紀は絶頂へと昇りつめていく。
マサルは真っ赤に充血して剝けあがったクリ×リスに指腹を押し当てて激しくこすりたてた。ひときわ敏感な肉芽を責めながらペニスの抽送を速めていく。
「ひいーっ！」
有紀のけいれんはいっそうひどくなった。極太棒を根元まで咥えこんだ膣もヒクヒク収縮を繰りかえす。
「こ、壊れっ……あああーっ！」
有紀は苦しげな声を放って絶頂に達した。ビクビクッと裸身を震わせたと思うと、次の瞬間には意識を失い、四肢から力が抜けてぐったりとなる。

肉棒はひくつく膣の中に雄汁をたっぷりとぶちまけた。有紀のヴァギナは本能的にスペルマをしぼり取ろうとするのかペニスをいっそう強く締めつけ、彼女の意志とは無関係に濡れそぼった肉壁をうねらせる。
膣の収縮がおさまるまで牝壺の動きを堪能したマサルは、それから萎えた肉茎を抜き取った。雄の欲棒を失った秘部の中央には親指の先ほどの穴がぽっかりと開いている。
「初めてにしては反応がよかったな。これからが楽しみだ」
マサルは片頬に微笑を浮かべて有紀を見降ろす。それから両手の戒めをほどいて有紀の身体をベッドへきちんと寝かせてあげた。ウエストのあたりまで毛布をかぶせて、尖ったままの乳首を指で挟んで揉みあげる。
有紀は「ん……」とうめいてまぶたをひくつかせた。
「また可愛がってやるからな」
とつぶやいて、マサルは乳房を握ったまま有紀の隣に身を横たえて両目を閉じた。
しばらくして有紀はようやく目を覚ました。
「梨田先輩……」
すぐ横で眠っているマサルの寝顔を見ると、涙がこみあげてくる。有紀の大事なところはシェーバーでできた小さなすり傷が数カ所あり、ヴァギナは荒々しい抽送を受けてヒリ

ヒリと痛んだ。
「先輩がこんなことをするなんて……。梨田先輩は、やさしくて素敵な人だと思ってたのに……」
有紀は美唇を嚙みしめてすすり泣きを押し殺した。けだるさの残る身体を無理に起こして服を身につけはじめる。どこかへまぎれこんだか、あるいはマサルがわざと隠してしまったのか、スキャンティだけが見つからず、ストッキングだけをつけてバッグを小脇に抱える。玄関を出ようとしてベッドのほうを振り向いた。
「先輩、あたし、これからも先輩のことを好きでいてもいいの？　先輩と両思いになれたら幸せになれる？」
けれど、マサルは深い眠りに落ちこんでいて返事をしない。
有紀は悲しげな笑みを浮かべてマンションから出ていった。

第3章　金髪淑女の空中レイプ

理乃は漆黒のローレルスーパーサルーンの後部座席にゆったりと座っていた。
窓の外を見ると、ニコマル・ケミカルの正面玄関からマサルが出てくる。理乃は自分に向かって大股に歩いてくる彼をじっと観察した。
梨田マサルはかなりの長身だった。たぶん身長は、180センチを数センチ切るくらいだろう。肩幅が広く、上腕の筋肉がよく発達している。26歳にしては若く見え、その顔は日に灼けていて浅黒かった。
「言葉使いだけじゃなくて容姿も下品だわ。鼻は高すぎるし、目つきも鋭すぎる。顎なんか肉食動物みたいにがっしりしていて、肉でも骨でも嚙み砕いてしまいそうじゃないの。知性はかけらほども持ち合わせてはいないようね」

理乃にとって、マサルという男は西音寺の屋敷に出入りする男たちとはまるで正反対で、粗野で野蛮で野獣のように薄汚く思えた。
「おじいさまは人を見る目が確かな方なのに、どうしてあんな男に鍵を渡したりなさったのかしら？」
マサルは理乃が自分を値踏みしていることなど気づきもせずに後部ドアを開けた。
「お待たせしました」
低い声で言って、理乃の隣へ体を滑りこませる。
理乃は男の体臭を敏感に感じ取って、美しい眉をしかめつつ運転手に命令する。
「野際、出してちょうだい」
車が静かに走りだすとマサルは美少女の横顔に視線を注いだ。理乃はマサルに見つめられていることを気配で悟り、息を殺して全身を緊張させた。
彫りが深く鼻筋の通った貴族的な面立ち。その肌はガラスのように透明感があり、雪のように白い。肩にかかる黒髪はシルクのような艶を帯びていて、思わず手をのばして触れてみたくなる。気の強さを表わすように美しい唇をきりりと結んで前方を凝視している。
（フランス人形みたいに可愛いくせに、口を開いたとたん、憎らしいガキになっちまうんだからな。今は膝の上で手を重ねてお嬢さまっぽく上品にしているが、いきなり唇を奪っ

たら、なんて言うだろう。やっぱりオレをひっぱたいて抵抗するかな？　それともショックでなにも言わずに泣きだすのか？）
マサルには理乃が抵抗する姿しか想像できなかった。気の強い彼女ならきっとそうするにちがいないと思った。
（それにしても、ジイサンが死んだってのに、どうして通夜にいかないんだ？　この鍵の秘密はそんなに大切なものなのか）
頭の中であれこれ考えてみたが、背広の内ポケットに忍ばせた鍵がどんな秘密を隠しているのかは想像もつかない。思いきってお嬢さまに問いかけてみようと口を開きかけたとたん、先手を打たれてしまった。
「パスポートをお見せなさい」
理乃は相変らず前を向いたままでマサルに命令した。
「それならマンションにある」
「マンションですって？　どうしていつも携帯していないの」
「あいにくと、うちの会社は突然海外へ出かけるような仕事は扱っていないんでね」
理乃は小馬鹿にしたように眉をあげている。マサルは彼女のあざけるような目つきが気に食わず、イライラしてくるのを必死に我慢する。

（この仕事にケリがついたら、こいつをどっか人目につかないところへ連れこんで、身も心もぶっ壊れるまで犯してやる。いや、なんならわざと人目につく場所で犯すってのもいいな。深窓のお嬢さまがオマ×コぶち破られてヒィヒィよがるところを想像すると、胸がワクワクしてくるぜ）

「時間がないのよ。早く住所をおっしゃい」

マサルはヒステリックなお嬢さまにではなく、野際という運転手に住所を告げた。野際はカーナビが示す近道を通り、十数分後には彼のマンションの前に車を横づけにした。

「いいこと、早く戻るのよ」

マサルは一応、表面上は隷従（れいじゅう）しているふりを装い、黙ってうなずいて車を降りかけた。その背中に理乃の声が飛んでくる。

「そうそう、身のまわりの品は用意しなくてもいいわ。あなたの衣類や食事にかかる費用などは、すべて西音寺コンツェルンでまかないますからそのつもりで」

マサルはマンションの非常階段を駆けあがり、部屋の鍵を開けて中へ飛びこむ。

「てーことは、夜の女を買う金も西音寺コンツェルンが払ってくれるってことか」

しかし、欲しい女はひとりしかいない。弥生（やよい）だ。弥生の他には誰も要（い）らない。

マサルはタンスの引きだしをかきまわしつつ、今朝エレベーターの中で見かけた私服姿

の彼女を思いだして頬を緩めた。
（弥生がオレの妻になって家庭を守ってくれたなら、どんなに毎日が楽しくなるだろう？彼女はきっと料理が得意にちがいない。洋裁も上手でミシンを使って子供の服をつくれるかもしれない。もちろん、ベッドの中では奔放にふるまい、オレに要求されればどんな体位でもしてみせるだろう。あの白い頬を羞恥で赤く染めながら……）
「パスポートはどこに置いたかな……。そうだ、あそこだ！」
マサルはベッドの横に両膝をついてその下を覗きこんだ。そこには買い置きの下着やめったに聞かなくなったCDなどを入れたキャスターつきの引きだしがある。それを引っぱりだそうとして、ふと手をとめた。
「なんだ、これ？」
引きだしの前に小さな布切れが落ちている。ひろげてみると、それはサテンでできた女物のスキャンティだった。
「なんでこんなものが？」
首をかしげて考えこんだ。
マサルには3歳年上の兄がいるが、女の姉妹はひとりもいない。大学生の時からつき合っていた恋人がいたけれど、去年、彼が25歳の誕生日を迎える前に別れてしまった。去年

までの女は普通の素材だとアレルギーが出るとかで、肌にやさしい特別製の素材を使ったランジェリーでなければ絶対に身につけようとはしなかった。
「あいつのじゃないとなると、誰のだ？」
マサルは会社で机を並べている藤本のように、夜の街で引っかけた女の子を簡単に部屋へ入れるような男ではない。ひとまずそのスキャンティを背広のポケットに押しこみ、引きだしの底からパスポートを取りだして車へと取ってかえす。
理乃はイライラしながら彼が戻るのを待っていた。

☆

マサルと理乃を乗せたボーイング747―400は定刻通りに出発した。
雲海を越えて高度3万フィートで機体が安定するとベルト着用サインが消えて、元はスチュワーデスと呼ばれていたキャビンアテンダントたちがミールを配るために客席を順番にまわりはじめる。
これから乗客たちは北京ダックになるために生まれてきたアヒルのように、狭苦しい座席に縛りつけられたまま次から次へと食べ物を胃袋へ流しこまれるはめになる。
理乃はエコノミーの窓ぎわに座り、美しい眉をしかめて窓の外を見るともなく見ていた。
社長室にいた時はセーラー服を着ていたが、今は空港のショップで買った旅行向きのゆっ

たりしたワンピース……と言ってもブランド物でマサルの給料が数カ月分ふっ飛ぶような高価なものを身につけている。

一方マサルは会社を出た時と同じ背広姿のままで、品行方正を好む理乃のおかげでネクタイを緩めることすらできずにいた。マサルは理乃があまりにも険しい表情をしているので、気になって問いかけた。

「どうかしたのか？」

「別に。こんなに混み合って狭いのなら、1便遅らせてでも、いつものようにファーストクラスにすればよかったかしら、と考えていたのよ？」

（エコノミーとファーストクラスは食事の内容がちがうぐらいだし、どこに座ろうと安全に目的地へ着けばいいじゃないか）

マサルはそう言いたかったが、今の理乃にはなにを言っても無駄だと思ってあきらめた。

「お客さま、お飲み物とお食事はなにになさいますか？」

日本人のアテンダントがまわってきて理乃の横顔に問いかけた。

「赤ワインとチキンをお願い」

「オレはビールとビーフ。それと、彼女はワインじゃなくオレンジジュースを頼む」

「かしこまりました」

アテンダントが後ろへさがると、理乃はマサルに食ってかかった。
「わたしを馬鹿にするのはやめてちょうだい。ワインくらい飲みなれてるわ」
「馬鹿にしてるんじゃなくて子供扱いしてるんだ。子供なら子供らしくふるまうんだな」
すると理乃はいっそう真っ赤になってにらみつけた。
「失礼ね。わたしのどこが子供なのよ？」
「全部。オレは26歳の社会人でおまえは15歳の女子高生。ガキもいいとこじゃないか」
「いいこと、わたしを『ガキ』と呼ぶのはやめなさい。もしもう一度人前でそんな言葉を使ったら……」
マサルはいきなり片手をのばして理乃の口をふさいでしまった。
「そうやってつまらないことで腹を立てるから『ガキ』って呼びたくなるんだよ」
理乃は彼の手を振りほどこうともがき、浅黒い肌に爪を立ててかきむしった。
マサルが「いてっ」と叫んで手を引っこめると、彼女は悔し涙を浮かべてうつむいた。
「こんなことなら、鍵だけもらっておけばよかった」
「ああ。オレもそう思うよ」
その時、ジャンボはエアポケットに落ちこんで機体が激しく横に揺さぶられた。
〈オー！〉

通路を通ろうとしていた若いアメリカ人風の女がバランスを崩してマサルの肩にしがみついてきた。腕の中に抱えていたバッグが落ちて口が開き、彼の足もとに中身がこぼれた。

「ごめんなさぁ〜い」

その外国人女は少し怪しげな日本語であやまりながら背もたれをつかんで姿勢を直そうとする。女の歳は25歳前後で健康そうな小麦色の肌をしていた。マサルは〈英語〉で声をかけた。

〈だいじょうぶですか?〉

〈ええ、本当にごめんなさい〉

マサルは上体をかがめて理乃のつま先まで転がったアトマイザーを拾った。金のアトマイザーは表面に百合(ゆり)の模様が彫りこまれていて、今朝エレベーターの中で拾った弥生のものとよく似ていた。いや、ほとんど同じと言ってもよかった。

しかし、マサルはそのことにはまったく気づかず、女の美貌に見とれていた。

弓なりに整えた眉の下でぱっちりした大きなブルーの瞳が光り、銀に近いブロンドは柔らかくカールしながら肩や背中に流れ落ちている。上唇が下唇より少し厚めで、ともすれば下品な印象を与えそうだったが、口角を上にあげるようにして微笑むと逆にキュートな雰囲気になる。マサルの手からアトマイザーを受け取ろうと前かがみになると、大きく開

いたニットのセーターの襟ぐりから豊かな乳房の谷間がはっきりと見えた。

（かなり大きそうだな）

マサルは女の瞳に不思議そうな色が浮かぶのを見て、ハッと我にかえった。

〈これ、あなたのですね？〉

〈そうよ。どうもありがとう！〉

女は語尾のトーンを心持ちあげてお礼を言い、咲き誇る大輪のひまわりを思わせる笑顔を残して機体後部へと歩み去った。

マサルがつい座席から身を乗りだすようにして後ろ姿を見送っていると、後ろから理乃が不満げに「フン」と鼻を鳴らすのが聞こえた。

「いやね、物欲しそうな顔をして。下品きわまりないわ」

「そういうことを言うからガキだって言うんだよ」

「なんですって？」

「女を欲しいと思ってなにが悪い？　男ってのは生まれつきの狩人（かりゅうど）なんだ。欲しいと思った女はなにがなんでも絶対に手に入れる。そのためなら代償が伴おうとも絶対にあきらめない。たとえ自分が傷ついてでも、あるいは他の男を傷つけてでも、欲しい女を手に入れるために努力する。それが男なんだ」

「そんなの野蛮だわ。知能の発達していない原始人か野獣がすることよ」
理乃は露骨に眉をしかめて言いかえす。
「だからおまえはガキなんだ。男は女を求めることで強くなる。女は男に求められることできれいになる。男に『欲しい』と思わせられないような女、つまりおまえみたいなやつは、一人前の大人の女とはみなされないんだよ」
「そんなの……」
言いかえそうとしたが、理乃は反論できずに視線を伏せて唇をつぐんだ。
(この男の言うとおりかもしれない。わたしは今まで男の人から求められたことなんかないもの。屋敷に出入りしている男たちはみんなわたしに礼儀正しく接してくれるけれど、それはわたしが西音寺宗一郎の孫娘だからにすぎないんだわ)
マサルは(少しきつく言いすぎたかな)と心の中で反省した。
「まぁ、まだ若いんだし、今におまえを欲しいと思うような男が現われるさ」
と言いわけじみた言葉をつぶやいて、ちょうど運ばれてきたビールを缶のままでゴクゴクと一気に飲み干してしまった。

☆

食事が終わると窓のブラインドはすべて降ろされて映画が上映された。

日本ではまだ未公開のものだったが、マサルには興味のないジャンルで見る気になれなかった。

隣の席の理乃はヘッドホンをつけて、顎の下まですっぽり毛布にくるまって両目を閉じている。眠ってしまったのか、ピクリとも動かなかった。

マサルも少し寝ておこうと目をつぶってみたが、まどろんだだけで、すぐに目が覚めてしまった。映画は相変わらずつまらないシーンの連続だし、腕時計を覗いてみても、分針は思うように進んでいない。

（このままあと6時間以上も雲の上を飛びつづけるのか）

どこかで手脚を動かさないと体中の筋肉が凝り固まってしまいそうだ。それにナッツの食べすぎで喉がひどく乾いている。そこでシートベルトをはずし、映画を楽しんでいる乗客たちの邪魔にならないように頭をできるだけさげて機体の後部へと歩いていった。調子に乗ってビールを数缶空（あ）けたせいで足もとがふらついている。

最後部にいくつか並んでいるトイレの前で屈伸運動をしていると、いきなり背後のドアが開いて女が後ろ向きのまま出てきた。当然ヒップとヒップがぶつかって、ふたりとも後ろ向きのままであわてて互いの腕をつかんだ。

〈あら、ごめんなさい〉

聞き覚えのある声は通路でよろめいてマサルにしがみついてきた女のものだった。
〈こちらこそ、失礼しました〉
大学時代、英語が好きで、英検2級を持っているマサルの口から自然と〈英語〉が飛びだした。浅黒い頬に笑みを浮かべて女に話しかける。
〈ぼくたち、よく衝突しますね？〉
〈本当に。さあどうぞ〉
女はマサルがトイレの前に並んでいたのだと思い、ドアを押さえて中に入るようにうながした。
〈いや、用はトイレじゃなくて、きみにあるんだ〉
〈わたしに？〉
マサルはうなずき、彼女の肩にかかるブロンドをかきあげて耳もとにささやいた。
〈きみとふたりきりになりたい。いいだろ？〉
一瞬のためらいを見せる女の腕をつかみ、マサルは背後から背中を抱くようにしてトイレに押し入った。後ろ手で鍵をかけると、ふたりの頭上で小さな明かりがともる。
〈名前は？〉
〈**ジェニー**よ。どうしてこんなことをするの？〉

ジェニーは自分より5センチほど背の高いマサルを怯えたような目で見あげた。
〈さっき通路で見たときから、ずっとおまえが欲しかった。わかるだろう？〉
マサルはジェニーの厚ぼったい唇をキスで封じ、女の身体を洗面台に押しつけてダブダブしたニットの裾から両手を差し入れる。指はすぐにふくらみに到達した。ジェニーはブラジャーをつけていなかったのだ。手のひらからこぼれるほど大きくて弾力のある乳房を両手で包みこんで、ゆっくりと揉みしだく。
〈ンームム……〉
女はマサルの舌に舌を絡めてキスに応えつつ、鼻腔から甘い息をもらした。巨大なバストを揉まれると柔らかだった乳首がコロコロと硬く尖ってくる。
〈ひどいわ。初対面なのに〉
ジェニーは〈尻の軽い女だと思われて心を傷つけられた〉と言いたげな表情で双眼に涙を浮かべて彼を見あげた。だが、女の欲望は理性とは裏腹に熱く燃えはじめている。その証拠に乳房をこねあげられても抵抗ひとつせずにされるがままになっている。
〈誰だって最初は初対面だ。初対面だからというのはキスを拒む理由にはならないな〉
マサルは理屈をこねてジェニーの小麦色に灼けた首筋へ唇を這わせていく。彼女がつけているオレンジのような甘酸っぱい香水の匂いが鼻先にまとわりついた。

〈いい匂いだ〉
ロングスカートの裾をまくって片手を股奥へ潜りこませると、ジェニーの身体に官能の震えが走る。
〈まさか、こんなところでするつもりなの?〉
〈ああ。外のほうがいいか? あんなくだらない映画は即刻やめさせて、かわりにおまえにストリップショーをやってもらおうか〉
〈ダメよ。それだけはダメ〉
ジェニーはかぶりを振ってマサルに抱きついていった。
〈わたしの口でイカせてあげるから、インサートだけは堪忍(かんにん)して。ね?〉
〈そんなにフェラチオが得意なら、見せてもらおうか〉
マサルは壁に背中をもたせかける。ジェニーは彼の両脚の前にひざまずいてベルトのとめ金をはずした。ズボンとトランクスを膝のあたりまでずり降ろして、まだ柔らかなペニスを剥きだしにする。ジェニーは目を見張った。
〈あなたのもの、ずいぶん長くて大きいのね?〉
〈おまえのテクニックでもっと大きくできるだろう?〉
ジェニーは興奮で胸が高鳴ってくるのを感じつつ、朱唇を開いて左右に大きく張りだし

た亀頭を咥(くわ)えこんだ。先割れのあたりを舌先でなぞりあげ、両手で太竿の下にさがった玉袋をやわやわと揉みあげる。以前恋人に教わったように尿道口のあたりをチロチロと刺激するのだが、マサルのこわばりはピクリとも反応しない。

(どうして大きくならないの？　こうやれば、たいていの男は簡単にイッちゃうのに)

ジェニーはとまどいながらも舌を肉茎に絡みつけて舐めあげる。

(この男の欲望が完全に満たされるまでは、ここから逃げだせないにちがいない)

その予感は不幸にも的中しつつある。マサルは〈チッ〉と舌打ちをして彼女のブロンドをつかんだ。

〈もっと深く咥えこんで、ペニスの先を舐めながら吸いあげるんだよ〉

ジェニーの頭を両手でつかんで、その口中へ勃起をグイグイねじこんでいく。

〈ぶっ……ぐううっ〉

喉の奥を亀頭で突かれたジェニーは激しくむせこんだ。大きく見開かれたブルーの瞳に涙が浮かんでくる。

〈バカ、歯を立てるんじゃないぞ〉

マサルは小声で叱りつけて金髪を乱暴に引っぱった。

ジェニーは必死になって男根を舐めあげた。言われたとおりに喉の奥深くまで勃起を咥

えこんで、水を飲むように食道を収縮させる。
〈それでいいんだ。ほら見ろ、やっと硬くなってきたじゃないか〉
マサルの言葉どおり、ペニスはあっと言う間にそそり勃ってきた。ほとんど床と平行になるまで勃起したが、それ以上は高ぶらない。
〈うう、ううう……〉
ジェニーは子供のように泣きながらディープスロートをつづけた。
マサルはフェラチオでは射精できないと悟り、ジェニーの口から太ペニスを引き抜くと、日灼けした腕をつかんで彼女を洗面台の前に立たせた。
〈いいか、大声をあげたら、おまえが今までどんな顔をしていたのか、誰もが忘れてしまうほどぶん殴ってやるからな〉
脅すように言ってスカートを腰までめくりあげた。パンティに包まれたお尻を剝きだしにして、ナイロンの布地越しにクレヴァスを指で嬲りあげる。
時折、気流の乱れで機体が上下に揺れたが、興奮しているふたりは気づきもしない。
〈ああん。お願い、痛くしないで〉
〈セーターを脱げ。おとなしくしていれば痛い目は見ずにすむだろう〉
ジェニーが言うとおりにすると、ニットの下からグレープフルーツ大の豊かな乳房が露

出した。彼女の巨乳は手や顔と同じように小麦色だったが、マイクロタイプのビキニをつけて日光浴したおかげで、乳首の周辺だけが三角形に白く焼け残っている。

〈これでいい？〉

ジェニーは屈辱に目を潤ませて小首をかしげる。黙ってうなずいたマサルは、ポンプに入った液体せっけんを手のひらにたっぷり出して、その手をジェニーのパンティの中へ突っこんだ。

〈オー！　なんてことをするの、冷たいわ〉

〈すぐに熱くなるさ〉

マサルはジェニーの背中に覆いかぶさるようにして彼女の動きを封じ、甘い香を放つせっけんをクレヴァスの間に荒っぽく塗りこんでいく。

ジェニーは目の前の鏡に映る自分の顔を呆然と見つめた。

ダークレッドのルージュは激しいキスを受けて唇からはみだし、ブルーの瞳は涙で潤んでいる。日本人の男は左肩に顎を乗せ、ジェニーを背後から抱きしめるようにして恥ずかしい場所と剝きだしの乳房を嬲っている。

（なんてみだらな光景なの。これ以上は見ていられないわ）

ジェニーは頬を赤らめて両目を閉じた。出会ったばかりの男の愛撫を受けて、全身が熱

く火照りはじめている。乳首もクリ×リスも充血して硬くしこり、軽く触れられただけで悪寒にも似た小さな震えが身体の奥を走った。
〈ここはどうだ?〉
マサルは秘孔を守るようにぴったりと合わさっている2枚の花弁を器用に指でかきわけて、陰核を露出させた。それを円を描くように嬲りながら充血して赤くなった膣口の周囲をぬるぬるとなぞっていく。
〈ううっ。ひぃ!〉
敏感な突起を指でこねまわされて、ジェニーは内腿をブルブルと震わせた。全身から力が抜けて立っていられなくなり、鏡に両手を突いて身体を支える。
〈こんなに濡らして、中になにか入れているんじゃないだろうな?〉
マサルは女の耳朶に熱い息を吹きかける。指を2本まとめて秘花の中央に突き立て、じゅくじゅくに潤みきった花奥をえぐり、愛液をかきだすようにうごめかせる。
〈オー!〉
ジェニーは背中を弓なりにそらして鏡の中のマサルに訴えた。
〈もう我慢できないわ、あなたの素敵なコックを食べさせて。プッシーがペニスを欲しがってたまらないのよ〉

マサルはその言葉を待っていた。ジェニーのスカートとパンティを一気に剝ぎ取って下半身を丸出しにする。大きなお尻はハイレグカットに日灼けしていた。ジェニーは挑発するようにヒップを突きあげ、みだらにくねらせる。
〈物欲しそうなケツをしやがって〉
マサルはジェニーの尻たぶを割りひろげて、半勃(はんだ)ちのペニスを濡れそぼった秘孔にねじこんだ。難なく根元までペニスを挿入すると、腋の下から両手を入れて大きな乳房をぐにっぐにっと揉みしだく。
〈ウゥッ。お願いだから動かしてぇ〉
マサルは挿入したペニスをまったく動かそうとはしなかった。ジェニーはたまらなくなって自分から腰を前後に振りはじめた。洗面台の端を両手でつかんで角度に気をつけながら秘唇を貫く太幹を軸に身体をくねらす。
しかし、ヴァギナはようやく侵入してきた勃起を逃すまいとして締めつけるばかりで、ペニスを出し入れすることまではどうしてもできない。
マサルは鏡の中のジェニーを見つめながら硬くしこった乳首をいじりまわしている。
〈お願いよ、プッシーに入れただけじゃダメなの〉
ジェニーはすすり泣きをもらしてマサルに哀願した。女の本能的な欲望はすっかり燃え

あがって、白濁の液で消しとめられるのを待ちわびている。万が一このまま途中でやめられてしまっては、生殺しもいいところだ。

〈お願いだからお腹の奥まで突きあげてぇ！〉

マサルは鏡の中で身悶えるジェニーの姿をあざけるような目で見つめながら、両手を彼女のくびれたウエストまで滑らせていった。両脚に軽く力を入れて、きつく締めつけてくるヴァギナの中で剛直を抜き差しする。

〈オー！　ようやく……アァ〉

ジェニーは恍惚（こうこつ）の笑みを満面に浮かべて朱唇を緩ませた。

〈たっぷり嬲（なぶ）ってやるぞ〉

マサルはリズミカルにペニスを抽送しはじめた。熱く絡みついてくる肉襞をこねあげるように突っこみ、かと思うと逆に突き放すように勢いよく抜き取る。剛棒は花奥から溢れだす牝蜜をたっぷりと吸いあげてさらに硬く張りつめていく。

〈オーッ！　そうよ。いいわ、もっと動いて。ウォウッ〉

ジェニーは膣奥を激しく突きあげられるたびに苦しげな表情であえいだ。ブルーの瞳はうつろに開いて、半開きになった唇の端からだ液が溢れ落ちる。抽送に合わせて巨乳が重たげに揺れた。

〈きちゃうの。アレが……波がきちゃう〉

〈まだイクのは早いぞ〉

マサルは完全に勃起した巨根を出し入れしながら片手をのばして「サニタリー」の表示がついた引きだしを開けた。そこには小箱入りのナプキンと10センチほどの長さの白い紙袋がいくつか入っている。

紙袋をひとつつかんで中身を取りだした。袋の中から出てきたのは長さ8センチの白い紙筒だった。光沢のある紙筒の先端から丸めた綿花のようなものが飛びだし、まるで男の子がふざけて父親のおチ×チンを紙でつくったような形だ。偽ペニスの根元からは10センチくらいの綿ヒモが飛びだしている。

マサルはそれを鏡の中のジェニーに見せつけた。

〈これがなにか、知っているな〉

ジェニーはマサルの腰の動きに合わせてヒップをくねらせながら、鏡に映ったものをぼんやりと見つめた。

〈タンポンでしょ。それがどうしたの?〉

〈ケツの穴が寂しそうだから、こいつを食わせてやるぜ〉

その言葉とともにジェニーの菊門を指でくつろげた。

〈ノーッ！　そこには入れないでぇっ！〉
マサルは逃れようとするジェニーのアヌスにタンポンをぐいぐいとねじこんだ。が、半分ほど入ったところで先がつかえてしまう。
〈浣腸してから濡らしてやれば、根元まで入るんだが……〉
〈ダメよ。お願い〉
ジェニーは片手を後ろにまわしてアヌスから異物を抜き取ろうとする。その腕を後ろ手にねじあげて、マサルはペニスの抽送を再開した。さらにアヌスから飛びだしているタンポンを握って直腸をえぐるようにかきまわす。
〈ノーッ！〉
ジェニーは朱唇をOの形に開ききって叫んだ。ヴァギナとアヌスを同時に責められたことで、裸身は赤く火照ってじっとりと汗ばみ、乳房も太腿もブルブルと小刻みにわなないた。あまりの快感に両手から力が抜けて身体を支えられなくなり、乳房を鏡に押しつけながらヒップを振りたてる。
〈まるで馬のチ×ポでも咥えこみそうな勢いじゃないか〉
マサルは爆発寸前の極太ペニスをますます激しく秘孔に出し入れする。貪欲な肉壺は、雄汁を1滴残さずしぼり取ろうときつく締めつけてくる。

〈くるっ……。オオッ、ウオーッ！〉

マサルは野獣のような悲鳴をあげる女の口を片手でふさいだ。

ジェニーは絶頂に達すると同時に裸身をゾクゾクッと震わせたかと思うと、そのまま失禁してしまった。黄色い液が尿道口から勢いよくほとばしって洗面台の壁を濡らしている。

マサルは脱力していくジェニーの花奥にスペルマを放出した。ジェニーの肉体を満たしたエクスタシーは、魂を解き放つような解放感となってマサルの四肢の末端までひろがっていく。

〈とうとう波がきたか〉

マサルは失神したジェニーを抱えて便器の蓋の上へうつ伏せにした。床に落ちていたポーチからルージュを抜き取り、小麦色の背中に文字を書きなぐる。

『ＦＵＣＫ　ＭＥ！』

マサルはジェニーをボーイングのトイレ内へ置き去りにして席へ戻った。座席ベルトを締めて毛布を体にかけると、すぐに寝息をたてはじめる。

その横顔を理乃がじっと見つめていたが、マサルは気づきもしなかった。

第4章　なまいき令嬢を犯せ！

成田を飛び立ったボーイング747―400はほぼ予定どおりにランディングした。
入国審査を終えたマサルは、到着ロビーの外で理乃が出てくるのを待っている。
そこへジェニーが通りかかった。彼女は、マサルに気づくと露骨に眉をしかめる。
「あいつめ、荷物もないのになにをやってるんだ？」
マサルはそろそろ理乃が出てきはしないかと背後を振りかえったところで、偶然ジェニーを見つけた。片手をあげて「やあ」と笑顔であいさつしかけたが、彼女の表情に気づくとその笑みはたちまち凍りついてしまった。
ジェニーはまるで自分の母親を嬲(なぶ)り殺した犯人を見るような目つきでにらみつけている。
青い瞳は憎悪に燃え、唇は緊張でわなわなと震えていた。なにか言おうとして朱唇を開い

たが、次の瞬間にはパッときびすをかえしてタクシー乗り場へと小走りに急ぐ。
マサルは首をかしげてその後ろ姿を見送った。
どうしてジェニーがあんな目つきで自分をにらんでいたのか、マサルには想像もつかなかった。たぶん彼女とは二度と会わないだろうと思いつつも気になって理由を考えてみたが、わからない。実は昨夜機内のトイレで起きたことは、なぜかマサルの頭の中からきれいさっぱり消えているのだ。
「変だな。あいさつしようと思っただけなのに」
ふと視線をそらすと、真新しい純白のリンカーンコンチネンタルが横づけされている。
「誰かハリウッドの有名人でも迎えにきてるのかな?」
そこに現われた理乃が、マサルには声もかけずにリンカーンのほうへ歩いていく。灰色の制服姿の運転手が急いで車を降り、後部ドアを開けた。
「なに?」
マサルは理乃が高級車に乗りこむのを呆然と見つめた。
「バカみたいにつっ立っていないで、早く乗りなさい」
理乃はようやくマサルの存在に気づいた風を装って、冷たい口調で命令する。
マサルはあわてて少女の横に体を滑りこませた。

ふたりが乗りこんだリンカーンはどうやら特注らしく、車内の装備はすべて真新しい革と本物のヒッコリーが用いられ、床には毛足の長いベルベットが敷き詰められていた。
車内は広く、後部座席は手足をのばして横たわれそうなほど幅があって奥行も深かった。普通の乗用車とちがって運転席と背中合わせにもうひとつ座席があり、後部座席と向かい合って座れるようになっていた。おそらく体の大きなアメリカ人男性でも3人ずつ計6人はゆったりとくつろぐことができるだろう。窓と運転席の間には防弾処理を施した特殊ガラスがはめこまれており、車内は空調が効いて快適だった。
マサルは車内見まわすのをやめて前方へ目を向けた。
純白のリンカーンは背の高いパームツリーが左右に並ぶマンチェスター通りを風のように走り抜けていく。20メートルもの長い影がアスファルトの上に断続的に縞模様を描いていた。
マサルは理乃がいやがるのを承知の上でネクタイの結び目を緩めた。汗かきではないが、1枚のワイシャツを丸1日以上ぶっつづけで着通せば汚れもするし着心地も悪くなる。
「そろそろこれからの予定を聞かせてもらえないか？」
「これからおじいさまがよく滞在なさっていたホテルへいきます」
「そこに鍵の秘密を解くヒントがあるのか？」

理乃は肩をすぼめて首をかしげた。
「さあ？　わたしはその鍵がどこのものなのか、よく知らないの。この任務から早く解放されたければ、あなたもない知恵を絞ってよく考えることね」
マサルは柔らかな背もたれに背中を埋め、両目を閉じて考えこんだ。
（くそ。こうなったら今すぐこいつを犯してやろうか）
マサルは空想の中で小生意気なお嬢さまを革張りのシートの上に押し倒す。
「なにをするの!?　許しませんよ」
理乃は悲鳴をあげて全力で抵抗するだろう。しかし、頬を平手で軽く叩けばすぐにおとなしくなる。
「服を脱げ」
「いやよ」
「まだわからないのか？」
マサルが拳を振りあげて殴るまねをすると、理乃は真っ青になって両手で顔をかばう。
「お願いだから殴らないで。乱暴なことはしないで」
フランス人形は小さな唇をわななかせて、両手を首の後ろへまわしてワンピースのファスナーを降ろそうとする。けれど、指先が震えてホックがなかなかはずれない。

「早くしろ」
「無理です。ホックが……」
マサルはレースの襟を両手でつかんで乱暴に前身頃を引き裂いた。
「きゃあっ！」
理乃は清楚な白いスリップとブラをつけていて、男の視線から逃れようと両手で胸もとを隠しながら身をよじる。マサルは細い手首をつかんで理乃の身体を革張りのシートの上に押し倒した。
「いくら上品ぶっても女は女だ。それをこれから証明してやる。ションベン臭いマ×コにオレのチ×ポをぶちこんで、ガキのおまえを大人の女にしてやるぜ」
「いやあーっ！」
理乃は全身の力を振り絞って、体を押しのけようとする。
「抵抗しても無駄だ。ほら見ろ、おまえの処女膜なんか、このスリップと同じように簡単に破ってやるぞ」
マサルは脅すような口調で吐き捨て、純白のスリップを紙のように引きむしる。
「ああ、やめてください。お願いですから」
理乃は泣きながら、なんとかして凌辱をやめさせようと哀願する。

だが、獣欲に駆られたマサルの心にはどんな声も届きはしない。高慢ちきなお嬢さまのブラジャーを乱暴に剝ぎ取って、もぎたての水蜜桃のように瑞々(みずみず)しい乳房へむしゃぶりついていく。淡いピンク色の乳首に歯を立ててコリコリと嚙みしめる。

「あうっ！」

理乃は痛みを感じて悲鳴をあげた。男の手はすべすべした腹部を滑って両脚のつけ根へと動いていく。必死になって太腿を閉じ合わせたが、それでも恥丘のすぐ下に指をこじ入れられるだけの隙間ができてしまう。

「何度言えばわかるんだ。抵抗しても無駄なんだよ」

マサルは少女の白いパンティの中に右手を突っこんだ。

「ガキのくせに、こんなところにスケベな毛を生やしやがって」

淡い茶色の縮れ毛を数本指でつまんで根元から引っこ抜く。

「ひいっ、痛い！」

理乃は半裸に剝かれた身体を震わせ、黒目がちの大きな瞳からポロポロと屈辱の涙をこぼした。

「お願いですからもうやめてください。お金が必要ならお義母(かあ)さまにお願いして……」

「なに？　こいつめ、困ったことが起きると、そうやってなにもかも金で解決してきたの

かよ。冗談じゃないぞ、オレの怒りを静められるのはおまえの身体だけだ。処女を捧げて許しを乞うがいい」
理乃は絶望のあまり双眼を閉じた。目を閉じていても、自分のパンティがずり降ろされていくのがはっきりと感じられる。太腿をつかまれて無理やり左右に開かれても、もう抵抗する気は起きなかった。
マサルはお嬢さまの背中を背もたれに寄りかからせて、お尻がシートからはみだしてしまいそうなほど前方へ引きつける。そうすると理乃の両脚はコの字を横にしたような形になって、若草の陰にある秘花がすっかり剝きだしになる。
「お願いですから痛くしないでください」
マサルは少女の秘唇を指先でなぞりあげる。理乃は思わず悲鳴をもらした。
「くひいっ」
「おい、このオレがおまえのオマ×コをわざわざいじってやっているんだぞ。目を開けてオレがどんなことをしているかちゃんと見るんだ」
理乃は恐るおそる両目を開いて自分の下腹に視線を向ける。
マサルは大きく開かれた理乃の両脚の間に体を割りこませて、クレヴァスをじっくり視姦しながら秘唇をつまんで左右にひろげる。美少女の陰部は無抵抗のまま男の目にすっか

りさらされた。
「ああっ。見ないでください」
身を焼くような激しい羞恥が令嬢の白い柔肌を鮮やかなピンク色に染めあげる。
「さすがは育ちのいいお嬢さまだな。肉厚のビラビラもマ×コの穴もきれいなもんだ。クリ×リスなんかつやつや光って真珠みたいだ」
「お願いです。どうかお願いですから……」
理乃は嗚咽をもらしながらか細い声をあげた。両親にすら見せたことのない場所を恋人でもない男にジロジロ見まわされている。そう思うとあまりにも恥ずかしくて気が遠くなりそうだった。
「『お願いですからもっとよく見て、わたしのオマ×コがお気に召したらごぞんぶんにお召しあがりください』か?」
「ちがいます」
「ちがわないだろ。さあ、今オレが言ったとおりに繰りかえしてみろ」
理乃はしゃくりあげながらイヤイヤと頭を横に振る。これ以上恥ずかしいことを強制されるのなら、いっそあのドアを開けて走行中のリンカーンからハイウェーに身投げしてもいい、とまで思いつめていた。が、いくら気が強くても、自殺するほどの勇気はない。

「お願いです、もっとよくごらんになって、わたしのオ……。お願いですから、恥ずかしいことは言わせないでください」
「オ……なんだって？　よく聞こえないな」
マサルは少女の膣口を指先でなぞりながら、じわじわと言葉で嬲りつづける。理乃は屈辱で唇をわななかせつつもマサルが命じたセリフを棒読みで口にした。
「わたしのオ……オマ×コがお気に召しましたら、どうぞごぞんぶんにお召しあがりくださいませ」
「そこまで言うなら味見してみるとするか」
マサルは満足げにうなずき、令嬢の秘貝を思いきり開いてその中央を舌で舐めあげた。
「ううっ」
大事なところにぬるりとした薄気味悪い感触を覚えて、理乃は思わず声をもらした。薄目を開けて見ると、男は太腿の間に頭を突っこみ、舌を突きだすようにしてアソコをペロペロ舐めている。
「ああっ。なにをなさるの？」
「これからチ×ポを入れやすいようにたっぷりいじりまわして、舐めてしゃぶってぐしょぐしょに濡らしてやる」

「そんなことなさらないでください」
「処女は濡らさないと痛いぞ。それでもいいのか？」
理乃はなんと答えたらいいのかわからなくなって、イヤイヤとかぶりを振る。生まれて初めて受けるクンニリングスはあまりにもおぞましくて身体が震えてくる。ねっとりとした生温かな舌の感触は気持ち悪くてたまらない。なのに、しつこく責めたてられるとなぜか谷間の奥が熱くなってくるような気がする。
マサルは理乃の反応を確かめながら秘花の中央を舐めつづけた。彼には泣き叫ぶ処女を力ずくで犯すような趣味はない。愛撫を受けて処女の抵抗がゆっくりと溶け、四肢をこわばらせていた緊張がほぐれていくのを見るのが好きなのだ。
（今にこいつも自分から股を開いてチ×ポをせがむようになる）
そう確信してかすかに塩からい味のする処女のクレヴァスを執拗に舐めあげる。
理乃は雪白の肌を小刻みに震わせ、声をもらすまいと必死に朱唇を嚙みしめた。大事なところを舐められるうちに、裸に剝かれた全身がじっとり汗ばんできて身体の奥が疼きだす。尖った肉芽を集中的に嬲られると気持ちよくてたまらなくなってきた。
「すみませんけれど、いつまでそんなことをなさるのですか？」
理乃は甘い疼きに耐えられなくなって、ついに問いかけた。清楚（せいそ）で若々しい美貌にはい

つしか夢見るような表情が浮かび、可愛い声は熱を帯びてかすれていた。黒い瞳は涙をたたえてじっとりと潤んでいる。
「いやならここでやめてもいいんだぜ」
「それは困ります」
「ほほう。どうしてだ?」
理乃は興奮して赤く火照った頬を恥ずかしげに両手で覆ってその下から答える。
「大事なところを舐めていただくと、身体中がゾクゾクしてすごく気持ちがいいんです。もっとして欲しいの」
「なんだ、そんなにスケベな声を出しやがって。おまえ、処女のくせに、もうオレさまのチ×ポが欲しくなったのか?」
マサルは膝立ちの姿勢になって股間にそそり勃っている太竿を見せつけた。大きく張りだした亀頭から先走りの液がどぷどぷと溢れだしている。
「いえ、それは……」
生まれて初めて男のシンボルを見た理乃は、すぐにぎゅっと両目をつぶって顔をそむけた。
「こいつをマ×コへ入れたら舐めるより気持ちよくなるぞ。どうだ、入れて欲しいか?」

マサルは八分勃ちになっている極太棒をつかんで少女の内腿にぴたぴたと叩きつけた。
「やはりそれを入れていただいたほうがいいのですか？」
「もちろんだ。こいつが欲しかったら、さっきと同じようにおねだりするんだな」
理乃は白い太腿をブルッと震わせて朱唇を開いた。
「いい加減に目を覚ましたらどうなの？」
マサルはギクッとして双眼を開いた。理乃の処女喪失シーンを空想しているうちに、いつの間にか眠ってしまったらしい。
純白のリンカーンは巨大なホテルの前に停車していた。
マサルは後部座席の歩道側に座っているので、理乃より先に降りなければならない。あわてて外へ出るとカリフォルニアの乾ききった熱風が全身を包みこんだ。
「チェッ」
夢想とはいえ、小生意気な理乃の処女を奪えなかったのはしゃくだった。
(この役目が終わったら、マジでこいつをぶっ壊れるまで犯してやる)
マサルは心の中で思った。ふと見れば、巨大なガラスの自動ドアの前で、理乃があきれたような顔をして振りかえっていた。
「なにをぼんやりしているの？」

マサルは内心うんざりしながら理乃の後についてロビーに入っていった。

☆

理乃の祖父である西音寺宗一郎は世界的に有名な5つ星の高級ホテル『ウエストウッドグローバル』の最上階にあるロイヤルスイートを半永久的にリザーブしていた。
理乃は半年に一度の割合でこのホテルに滞在し、西海岸のビーチで日光浴を楽しんだり、ビバリーヒルズのブランドショップでショッピングに興じている。そのため当然のようにホテルの従業員とはほとんど顔なじみだった。
ふたりは総支配人に案内されて部屋へ入った。
マサルは汗を洗い流して着替えたかったが、理乃はそれを許さず、すぐに外出の用意をするよう言い渡した。
「ふざけんなよ。これじゃ放し飼いの猫より待遇が悪いぜ」
マサルは理乃には黙ってたったの5分でシャワーを浴び、会社から持ってきた緊急出張用の下着とワイシャツに着替えた。真夏の太陽の下へスーツ姿で飛びだすのはバカバカしかったが、どこかで着替えを買わないことにはどうにもならない。
「それで、これからどこへいくんだ?」
展望エレベーターの窓から地平線まで広々とひろがる町並みを見降ろしつつ、理乃に問

いかけた。
「西音寺コンツェルンの海外支社がこの街にあるの。そこへいけば鍵のことがわかるかもしれないわ」
「あーそう」
(ひょっとすると、ジイサンから預かった鍵はアメリカが世界各国の主要都市に照準を合わせた核ミサイルの発射スイッチなのか。あるいは世界最大の統一国家を形成するに充分なだけの財力を秘めた金庫の鍵？　それともＮＡＳＡがようやく入手して世間からひた隠しにしているＵＦＯのエンジンキーか？)
「んなわけないいって」
マサルは自分の想像に苦笑してしまった。
「なにが？」
「いや、なんでもないよ」
理乃は冷たくあしらわれて不機嫌そうに唇を尖らせた。
(こんなに生意気でも、たぶん笑うと可愛いんだろうな)
マサルは理乃の笑顔をまだ一度も見ていないことに気づいて残念に思った。
「支社にはリンカーンでいくのか？」

「いいえ。あの車はこのホテルのもので、ＶＩＰ待遇のお客さまだけを空港からホテルまで送り届けてくれる専用車なの。普段は使用できないわ」
「となると、タクシーを使うしかないか」
ホテルの車寄せには常時タクシーが数台いるものだが、その時に限って最後の1台がちょうど出ていった後だった。
制服姿のドアマンはふたりを見ると肩をすくめて「Ｓｏｒｒｙ」と謝り、空車がこないかと通りの向こうを見ている。
マサルも同じように歩道の端に立って空車をさがしはじめた。
「なにをしているの?」
「流しのタクシーを捕まえる。いや、待てよ。あそこに路線バスの停留所があるな。バスか地下鉄を使うとするか」
「バスですって?」
理乃は弓形の眉をひそめてマサルを見あげた。
「この街のバスには麻薬の常用者や拳銃の密売人がたくさん乗っていると聞いているわ。普通の人間は乗らないものよ」
マサルは彼女の奇妙な知識にあきれてしまった。だが、ここで誤解を解いている暇はな

いし、話をすればケンカになるのは目に見えていたので、すぐに気持ちを切りかえる。
「フロントで地下鉄の路線図をもらってくるから、ここで少し待っててくれ」
「いいわ。早くしてね」
マサルは不満そうな理乃を歩道の角に立たせたまま、ホテルのロビーへ引きかえした。
温室育ちの理乃は、いつも空調のゆきとどいた室内と高級車の車内を往復するのみなので、強い日差しと乾ききった高温の空気に全身を包まれると、すぐに水枯れした花のようにぐったりとしおれてしまった。頭の中がぼんやりして足もとがふらついてくる。
「地下鉄って冷房は効いているのかしら？」
日陰に入ることも思いつかずにマサルを待ちつづけていると、1台のオープンカーが理乃の目の前にとまった。ボディはメタリックブルーで日本ではあまり見かけない車種だ。
〈エクスキューズ・ミー？〉
運転席に座った男が助手席側に身を乗りだすようにして理乃を見つめている。男は40歳前後で薄緑色のポロシャツを身につけ、黒いサングラスをかけていた。鼻の下に髪と同じ茶色い口ヒゲをたくわえている。
「なにかしら？」
理乃はもうろうとしながら車のほうへふらふらと近づいていった。

〈マイ・ネーム・イズ・フレッド。プリーズ・ヘルプ・ミー……〉
ヒヤリングは得意だったのでそこまではっきりと聞き取れたが、あまりにも早口すぎてあとの言葉が理解できない。
「えーと、ミスター・フレッド、プリーズ・スピーク・モア・スローリィ」
〈オウ!〉
フレッドという男は了解の印に数回うなずき、サングラスをはずして茶色の瞳で理乃の黒い瞳をじっと見あげた。そして哀願するような深刻な顔で、
〈プリーズ・ヘルプ・ミー……〉
と同じ言葉を繰りかえす。
「なんですか?　もしかしてスペイン語なら、わたし、ぜんぜんわからないのだけど」
理乃が当惑の表情を浮かべて首をかしげると、フレッドは片方の手でポンポンと助手席のシートを叩いた。助手席はからっぽでなにも置かれていない。
「ごめんなさい。わたし、よくわからないの」
するとフレッドは天を仰ぐような素振りをして運転席から降りてきた。そして、急に右手をのばして理乃の首につかみかかった。
「あっ!」と叫ぶと同時に、理乃は首筋に小さな痛みを感じ、直後に激しいめまいに襲わ

れて気を失ってしまった。小さな身体が地面にぐったりと倒れこんでいく。
フレッドは理乃を軽々と抱えあげて助手席に座らせた。シートベルトを締めて理乃の身体を固定してから、運転席に飛び乗ってオープンカーを発進させる。
メタリックブルーのボディは暑くよどんだ空気を切るように疾走していった。

☆

一方、ホテルに戻ったマサルはフロントの美人スタッフに地下鉄の路線図を求めた。スタッフの名はアンジェラ。彼女が戻るのを待つ間、脱いだ背広をたたんで腕にかけようとする。そのとたん、内ポケットから古びた鍵が滑り落ちた。
「おっと。やばいやばい」
鍵を拾ってフロントの卓上に置き、背広がしわにならないように持ち直す。
そこへアンジェラが戻ってきた。彼女はマサルが西音寺宗一郎から預かった鍵を見て、問いかけた。
〈お客さま、セーフティボックスをご利用ですか？〉
〈え？　これ、ここの鍵だったの？〉
マサルはポカンとして聞きかえした。
〈はい。ボックスをご利用でしたらこちらへどうぞ〉

アンジェラはマサルをフロントの脇にある小部屋へ案内した。鍵と引き替えに奥から灰色のスチールでできた細長い箱を取りだしてマサルの前に置く。箱の前面には鍵のプレートと同じ『QC』の文字が刻まれている。
〈ご用がすみましたらお呼びください〉
〈ああ。ありがとう〉
アンジェラは小部屋を出ていき、マサルをひとりきりにした。
「この箱の中身を理乃に渡しちまえば、オレの役目は終わるってことだ」
マサルは胸を撫で降ろした。早く中を見たいような、逆にこの箱のことは内緒にしておいてもう少し理乃と旅行をつづけたいような、複雑な心境になったが意を決して蓋を開いた。箱の中には1枚の茶色い封筒が入っていた。
「なんだ、こりゃ？」
封筒を取りだして鉄製の箱の奥を覗いてみたが、他には何も入っていない。
「これが鍵の秘密かよ？　となると、西音寺宗一郎の遺言状か？」
封筒は糊づけされておらず、簡単に開封できた。ところが、その中からまたもや金色の鍵が出てきて、マサルは思わず外人がするように胸の前で十字を切った。
「神様、鍵の秘密はまた鍵ですか？」

うんざりしながら鍵を封筒に戻してそのまま背広のポケットに押しこむ。ベルを鳴らしてアンジェラを呼び、ボックスを返却する手つづきを取ってロビーへ出た。
（とにかくこれで終わったな）
マサルは西音寺宗一郎から「誰にも渡すな」と言われて鍵を1本預かった。その鍵がまた新たな鍵を生みだしたが、それに関しては自分に責任はない。つまり、理乃に新たな鍵を渡してしまえば任務終了となるわけだ。
「おーい、西音寺のお嬢さま〜！」
ホテルを出ると、役目がすんだ安心感でついおちゃらけて叫びながら理乃をさがす。しかし、ワンピースを着た美少女の姿はなぜかどこにも見当たらない。
「まさかオレを置き去りにしたのか？　でも、鍵はオレが持ってるから、先にいくってことはないか」
つい先ほど別れた場所まで駆け寄って周囲を見まわすが、理乃はどこにもいない。
〈ミスター！〉
振り向くと先刻のドアマンがマサルに片手を振って合図している。マサルはドアマンのところまで戻った。
〈先ほどご一緒だったお嬢さんでしたら、迎えの方がいらして出発なさいましたよ〉

〈迎えだって？　そんなの誰も頼んでないぞ〉
〈でも、ぼくは1台の青いオープンカーがきて、お嬢さんを乗せて走り去るのをここから見ていたんです〉
マサルの胸に不安が影を差す。
〈彼女、抵抗していなかったか？〉
〈別にそんなことはなかったですね。どちらかといえば親しげに言葉を交わして、男性にきちんとエスコートされて助手席に乗ったんですから〉
「うそだろ？」
マサルは両手で前髪をかきあげた。彼女が求めている鍵は彼の手中にあるのだ。理乃がそれを持たずに別の男と出かけるわけがない。
〈おいきみ、車のナンバーは覚えているか？〉
〈ええと、たしか、あの車は433だったと思います〉
〈わかった。青いオープンカーでナンバーの末尾が433だな。ありがとう〉
〈いいえ。お役に立てることがありましたらなんなりとおっしゃってください〉
マサルがチップのつもりで20ドル札を握らせると、ドアマンは淡いブルーの瞳をうれしそうに輝かせて〈サンキュー〉を繰りかえした。

マサルはホテルのフロントへ取ってかえしてアンジェラを呼び、声を潜めて言った。
〈西音寺理乃が誘拐されたらしい。至急警察を呼んでくれ〉
〈なんですって、それは本当ですの⁉〉
アンジェラは蒼白になってマサルを事務室へ招き入れた。
すぐに総支配人が駆けつけて警察に通報し、ついであのドアマンも呼びつけられた。
〈犯人はたぶん営利目的で彼女を誘拐したのだろう。となると、身代金は西音寺コンツェルンの支社か、あるいはこのホテルに要求してくると考えるのが妥当だと思う〉
総支配人はマサルの話を聞くとそう判断して、その場に居合わせた従業員たち全員に箝口令を敷いた。
〈それで警察は？〉
〈目だった動きをすると犯人側に察知されるかもしれないので、私服刑事をよこすと話していました。かなり優秀な刑事だそうです〉
マサルはうなずいて立ちあがった。
〈どこへいかれるんです？〉
〈目撃者がいなかったかどうか、ちょっとそのへんを当たってみたいんだ〉
〈それでは、この携帯電話をお持ちください。刑事が到着しだい、すぐにお知らせいたし

ます〉

マサルは携帯電話をズボンのポケットに押しこんでホテルを出た。

ゴールをめざして順調にコマを進めていたというのに、いつの間にか誰かが勝手にサイコロを振ったおかげでふりだしへ戻ってしまい、その上『1回休み』にはまって身動きが取れなくなってしまった。

今のマサルはそんな気分だった。どうにかしてまたサイコロを振らないことには、話がはじまらない。とりあえず通りを挟んでホテルの向い側にあるデパートでジーンズと開襟シャツ、歩きやすそうなスニーカーとソックスをクレジットカードで購入して、その場で着替えた。それまで身につけていたものはすべてデパートの紙袋に入れて脇に抱える。

背広姿の時はショートケーキの上へイチゴのかわりに乗っけられたペンギンのように居心地が悪く、どこにいても悪目だちしていて最悪だったが、これで少しは楽になった。

「刑事はまだこないのか？　人命がかかってるってのに、ずいぶんのんきだな」

マサルは眉をしかめてホテルへ引きかえした。横断歩道を渡って車寄せの横にさしかかった時、特注らしいオープンカー仕様の赤いプジョーがマサルの隣にすうっと並んだ。見るとシャネルタイプのサングラスをかけたブロンド美人が見あげている。マサルが立ちどまると、ブロンド美人はサングラスをはずして微笑(ほほえ)みかけた。

誰もが思わず見とれるほど整った顔だちをしていた。

濃いまつ毛にふちどられた大きなアーモンド形のグリーンの瞳。鼻筋が通った形のいい鼻とつややかで魅惑的な唇。背中の中ほどまである豊かなブロンド。

女はプジョーと同じ深紅のボディコンを身につけ、大きく開いた胸もとからは巨乳の谷間がすっかり見えている。黒革のパンプスはヒールが4インチほどもあり、車を運転するには危険すぎる高さだった。

マサルはブロンド美人の胸の谷間から無理に視線を引き離し、冷静を装って問いかけた。

〈ぼくになにか?〉

〈あなた、わたしの好みだわ。ちょっとつき合ってくださらない?〉

女は妖艶に微笑んで、挑発するようにはちみつ色の太腿をゆっくりと開いた。

第5章　誘拐・監禁・少女奴隷!?

乾いたスポンジが水を吸収するように、身体の外に吸いだされていた魂がじんわりと体表へ戻ってくる。
理乃は頭の奥に鈍痛を感じつつ双眼を開いた。しかしあたりは薄暗く、なにもはっきりとは見えない。乾ききった唇を開くとピンク色の舌でそれを潤した。
まるで四肢の隅々(すみずみ)へ水銀を流しこまれたみたいに全身が重くけだるかったが、両手を突いて無理に起きあがった。ようやく目が闇に慣れてきて周囲の様子が見えてくる。
ひどく殺風景な部屋だ。理乃が横たわっていたベッドと大型のテレビしかない。窓はひとつきりで遮光性(しゃこうせい)のカーテンがかかっている。その窓の正面に壁と同じ白っぽいドアがあって、その下から廊下の明かりが細くもれていた。

「ここはどこなの？　梨田さん？」
　問いかける声がうつろに反響して耳朶を打つ。
（そうだわ。梨田さんが地下鉄の路線図をもらってくるといってホテルへ引きかえして、その間歩道で待っていたら、青いオープンカーに乗った男の人……ええと、フレッドさんになにか話しかけられたんだわ。でも、あのあとどうしたんだったかしら？）
　理乃はベッドの縁に座って全身を点検した。ワンピースがやや汗で湿っている他はなんともない。下着も乱れていないし、靴はベッドの足もとに並べてあった。
「あんな日の当たる歩道にずっといたから、急に熱射病にかかって倒れてしまったのね。きっとあの人が助けてくれたんだわ」
　お嬢さま育ちの理乃は人を疑うということをほとんど知らなかった。記憶があやふやなせいで、自分がフレッドという男に薬物を注射されて拉致されたということもまったく自覚していない。
「ここはどこなの？　ウエストウッドグローバルではないようだけど……」
　頭がくらくらしていたが、無理に立ちあがってドアへと歩きだす。ところがドアは彼女の気配を察したように向こうから開いた。廊下の光が四角く床を濡らし、その中央に大きな人型がくっきりと浮かびあがる。

「どなた？　梨田さんなの？」
〈目が覚めたのか〉
かえってきたのは〈英語〉だった。理乃にはその男の声に聞き覚えがあるような気がした。男は壁に片手を這わせて電気のスイッチを入れた。すぐに室内が明るくなる。
〈あら。あなたでしたの。助けてくださってありがとうございます〉
理乃は目の前に立っているのが青いオープンカーの男だと知ると、美しい頰に笑みを浮かべてお礼を言った。
〈助けた？〉
フレッドは後ろ手にドアを閉めながら不思議そうに首をかしげた。しかしすぐに理乃の言葉に調子を合わせてフランクな笑顔をつくり、彼女のもとへゆっくり歩み寄る。
〈ああ、そうだ。外はすごく暑かったから、倒れるのも無理ないよ。調子はどう？〉
〈ええ、だいじょうぶです。ここはどこですか？〉
〈オレの家だ。安心して休むといい〉
〈せっかくですけど、わたし、大切な用があるんです。ホテルのそばで梨田さんを見かけませんでした？〉
〈ナシダ？〉

〈ええ。梨田さんはわたしと同じ日本人の男性で、彼と一緒に祖父のオフィスへいくことになっていたのです〉
〈さあ？　見なかったが……。ところで、きみの名前は？〉
〈理乃です〉
〈理乃ね。理乃、きみに見てもらいたいものがある〉
〈わたしに？〉
〈うん。すぐに用意するからベッドに座って〉
理乃はベッドの端へ腰を降ろして、揃えた両膝の上に組んだ手を乗せた。フレッドはテレビのスイッチを入れて戻り、彼女の横に座りこむ。
ほどなく、ブラウン管が明るくなって画面の中にひとりの少女が突然登場した。少女はまるで誰かに突き飛ばされたように、ばったりとジュウタンに倒れこんだ。短いプリーツスカートがまくれて太腿が剥きだしになる。振りかえった少女の顔には怯えきった表情が浮かんでいた。
〈彼女はエミリというんだ。これが初めての経験なんだよ〉
フレッドが説明する。
〈あの子、どうかしたのかしら？　ビデオのようだけれど、初めての経験ってなに？〉

理乃はハラハラしながら少女を見守った。
その少女は12、13歳くらいのプエルトリカンで黒っぽい皮膚に褐色の瞳と髪をしていた。鼻の頭と頬にそばかすがあり、頬がふっくらとしている。チアガールをしているのか、胸もとがV字に深く切れこんだジャージ素材のウェアを着ていた。
ブルネットの美少女は起きあがろうとして両膝をつくが、画面の端から中年の男が現われて彼女の身体の上に覆いかぶさっていく。
『NO！』
少女は大声で叫び、男の胸を両腕でつっぱねた。中年の男はエミリの健康そうな太腿の間に体を割りこませ、彼女をジュウタンの上に押しつけてウェアの上から乳房を揉みしだく。
〈どうしてあんなことをするの？〉
理乃は怒りに唇を震わせてフレッドに問いかけた。だがその刹那、後ろから肩をつかまれて身動きできなくなってしまった。
〈いやっ、なにをするの？〉
〈これからエミリの身に起きることは、やがておまえの身にも起きる。もっとも、今はまだ準備の段階だがな〉

フレッドは身をもがいて逃げだそうとする理乃を無理やり太腿の間に挟みこんだ。理乃の太腿の上に自分の両脚を乗せて動きを封じ、ワンピースの上から乳房を揉みはじめる。

〈いやっ、やめてください！〉

　理乃は男の手から逃れようと四肢をばたつかせた。だが、太腿を押さえつける男の両脚が邪魔になって、立つこともままならない。

〈お願い、その手を離して！〉

　フレッドは理乃の首筋に鼻を埋めて女の子らしい甘い体臭をかぎながら、乳房を揉みしだいた。小さな耳たぶを軽く噛んで低い声でささやきかける。

〈言っただろう。エミリがこれから経験することを、おまえも経験することになるんだ。ただし、オレの言うとおりにしていれば、あんなにひどいことをする客にはおまえを売らない。どうだ？〉

　フレッドは抵抗する理乃の顎をつかんで、テレビのほうを向かせた。

　エミリはもう半裸に剝かれていた。明るい黄色と赤のウェアは乱暴に引き裂かれて青い果実のように未熟な乳房が露出し、プリーツスカートはウエストまでめくれあがっていた。画面の中の男はますます勢いづいて美少女の乳首をしゃぶり、ウェアと同じ黄色い素材でできたパンティの股ぐりを片手でこすりたてている。

〈いやです！　お願い、もうやめて〉
理乃はフレッドの豹変ぶりに思わず泣きだしていた。フレッドのことを自分を助けてくれた親切でいい人だと思っていたが、裏切られたと知ると悲しみと怒りがごちゃ混ぜになって胸の奥からこみあげてくる。なんとしても男の腕から逃れたかった。乳房をまさぐる手に爪を立ててみたが、びくともしない。
〈こんなに暴れるところを見ると、おまえはまだ処女のようだな。勉強のためにエミリの演技をよく見ておけよ〉
（演技って、あれは本当にレイプされているんじゃないの？）
理乃はがく然としながらエミリの抵抗する様を見つめた。
エミリは恐怖でガタガタと震えながら男の腕をつかんで押し戻そうとしている。男は彼女の乳房をまんべんなく舐めあげ、乳首を口に含んで舌の上で転がしていた。さらに、片手で剝きだしの脇腹やへその周囲をさするように愛撫する。
『Ｎｏ！　Ｎｏ……』
いつしかエミリの頰は上気していた。オレンジ色の美唇を開き、苦しげに肩を上下させている。男の腕に手をかけてはいるが、力が入らないらしく、されるがままになっている。
〈あれが演技なんて信じられないだろ。うまいもんだ〉

フレッドは理乃の襟もとに両手をかけて、ワンピースを一気に引き裂いてしまった。

「きゃあーっ！」

さらに、剥きだしになった胸もとを隠そうとする理乃の両腕を払いのけて、ブラジャーを剝ぎ取った。

〈大声をあげても無駄だ。今夜はこの家にはオレしかいないからな〉

理乃の88センチの乳房を両手のひらにすっぽり包みこんで、マッサージするようにゆっくりと揉みはじめた。

〈お願い、もうやめてください〉

理乃は涙で頬を濡らして頼みこんだ。が、ハンバーグの生地をつくるように乳房をこねあげられると、なぜか息が弾んでくる。

〈乳首が硬くなってきたぞ。どうだ、気持ちいいだろう?〉

理乃は左右に頭を振った。だが、確かに誰にも触らせたことのない乳首が刺激を受けて硬くしこっているのは事実だった。その芯をほぐすように揉みしだかれて、疼くような感触が乳房全体にひろがっていた。

〈んんっ〉

理乃は声がもれそうになるのを、唇を噛みしめてこらえた。助けを求めるように周囲を

見まわしたが、凌辱を受けて身悶えるエミリの姿が目に飛びこんできただけだった。理乃は呆然として半裸の身体を震わせた。

画面の中の男はエミリのパンティを剝ぎ取って茶色い若草の生えた恥部を露出させていた。エミリが太腿を閉じようとするのを強引に開脚させて、まだ熟れきっていない果肉を指で嬲っている。

『NO！』

エミリは苦しげに叫び、その身を弓なりにのけぞらせた。肉厚の花びらを大きく左右に開かれ、鮮やかなピンク色をした膣口をすっかり剝きだしにされる。少女の太腿がブルブル震えていた。

男が低い声でエミリになにかボソボソささやいた。すると彼女はカメラのほうへ視線を向けて頰を真っ赤に染めた。自分が凌辱されている様をビデオに撮られていることを、明らかに意識しているのだ。またも『NO！』と叫んで大事なところをカメラから隠そうと必死に両脚を閉じようとしている。

しかし男はエミリの太腿の間に自分の体を割りこませて抵抗を封じた。そして泣きじゃくるエミリのクレヴァスを執拗に指で嬲る。黒いブリーフで包まれた男の股間は異様に大きく盛りあがっていた。

〈覚えておけよ、ああやって中途半端に抵抗するのがいいんだよ〉
フレッドは理乃の股奥へ片手をのばし、清楚な白いパンティで包まれた股間を指先ですうっと撫であげる。
理乃は異変に気づいて自分の下腹を見降ろした。フレッドは片手で乳房を揉みながら恥ずかしいところを撫でている。なんだかムズムズとこそばゆくて、気持ちがいいような感じがしてくる。
〈んっ……。お願い、それだけは許してください〉
〈安心しろ、今におまえもエミリと同じように気持ちよくなるからな〉
フレッドはどこに隠し持っていたのか、ジャックナイフを出して白いパンティを引き裂き、理乃の花園を剝きだしにしてしまった。恥丘に生えた柔らかな縮れ毛を指先でこすり、じわじわと秘唇の奥へその指を進めていく。
〈お願いですから家へ帰して〉
理乃は子供のように泣きじゃくった。大事なところの周囲をまさぐる男の指の動きはひどくおぞましかった。それなのに硬く尖った乳首や太腿のつけ根を執拗に愛撫されているうちに、なんとなく気持ちがよくなってきて息が荒く乱れてくる気がする。
(どうしてこんなに気持ちがいいの？　こんなの生まれて初めてだわ)

理乃の抵抗が弱まったと知ったフレッドは、ピンク色の花びらを指でかき分けた。包皮を剝いてクリ×リスを露出させると、太腿の間に挟みこんだ少女の若々しい裸身がビクッと震えた。
〈ここをいじると、もっと気持ちよくなってくるからな〉
クリトリスに人差し指の腹を押し当て、円を描くように軽く触れる。
〈ううっ……〉
理乃は声をもらすまいと朱唇を嚙みしめた。敏感な突起をじかにいじくりまわされるたびに、内腿がひくひくとけいれんする。
(本当にいやなの？　わからないわ。気持ちよくってたまらないんだもの)
オナニーすらも未体験だった理乃は、肉芽を嬲る男の指に我知らず酔いしれながら、わずかに残っている理性でそう考えていた。
フレッドは中指の先をクレヴァスに当てて、指のつけ根で少女の恥ずかしいお豆を転がしながら残りの4本の指で膣口全体をやさしく揉みしだいていく。もう片方の手も遊ばせておかずに、おいしそうなピーチ色の乳房をこねあげた。
〈見ろ、エミリのヴァギナにバトンが入っていくぞ〉
理乃は唇を嚙んで両目を細く開いた。

エミリは両脚を大きく割りひろげられて横たわっている。たっぷりと秘花を嬲られたためか、もう抵抗する気もないようだ。
エミリの身体の上にまたがった男は、長さ40センチほどのバトンの先で尖った乳首をこねまわす。かと思うとそれを朱唇へ突きつけて舐めるように強制していた。
エミリは泣きじゃくりながらバトンの先端を舌で舐めた。荒く弾む息に合わせて乳房が上下にたぷたぷ揺れている。男を見あげる褐色の瞳は涙で潤みきっていた。
男は青いビンに入っている透明なクリームをたっぷりとすくって、それをバトンの先に塗りつけていく。
フレッドが理乃の乳首をつねりあげて説明する。
〈あのバトンには催淫剤をたっぷり塗りつけた。今にエミリは自分から男のペニスを入れて欲しいと泣きわめくようになるぞ〉
理乃には『催淫剤』という英語の意味がわからなかった。それでもエミリの意識が正常ではないことは画面を見ればよくわかった。これから起きるであろうことを考えただけで裸身に震えが走る。
（まさかアレをあそこに入れるの？）
男は充血して左右に開ききったエミリの秘唇の中央をバトンの先でグリグリこねまわす。

小さな秘孔が刺激を受けて開かれると大きな丸い飾りを挿入した。
『OH！』
バトンの先端がヴァギナに入った瞬間、エミリは苦痛に満ちた声をあげて両手でジュウタンをかきむしった。背中を弓なりにのけぞらせて『NO！』と叫ぶ。
男は少女のきゃしゃな肩をつかんで熱く潤む秘壺へゆっくりとバトンを挿入していく。40センチほどのバトンは半分近くエミリの花奥へ埋没してしまった。
『P……Please』
男は卑猥な笑みを浮かべて銀色のバトンを抽送しはじめる。
『No！　OoooH！』
ブルネットの美少女は硬い異物で花奥を深々とえぐられて、あられもない声をあげて裸身を震わせた。無意識のうちに両手で乳房をしぼるように揉みあげ、男の抽送に合わせて豊かな腰をくねらせる。
理乃は画面の中の少女がバトンで犯される様子を見ながら、自分も苦しげに身悶えた。
理乃の処女孔はフレッドの指によって透明な液をじわじわと溢れさせている。
〈濡れてきたじゃないか。オレの指がヌルヌルだ〉
フレッドが五指を激しくうごめかせると、肉厚の秘唇と指がこすれてくちゅくちゅとみ

だらな音がたつ。
〈んくうっ……。お、お願い〉
理乃はうわずった声をあげて内腿をブルブルわななかせた。大事なところをいじられているうちに頭の中がまばゆい光でいっぱいになって、泡立つような快感が全身にひろがっていく。
（もっともっとアソコをいじって欲しい。ちがう。こんなことは今すぐやめさせなくちゃ。ああ、でも、もっと触って欲しいわ。……嘘よ！　見ず知らずの男性に裸を見られて、そのうえ大事なところをいじって欲しがるなんて、わたし、どうしちゃったの？）
理乃は理性と本能のアンバランスな欲求にとまどい、どうすればいいのかわからなくなっていた。
『NO！』
エミリはヴァギナからバトンを抜き取ろうとする男の腕をつかんだ。催淫剤がまわりはじめたらしく、若々しい美貌も全身の美肉もすっかりとろけさせて男の腕にしがみついていく。
いったんエミリを突き放した男は、彼女の目前で黒いブリーフを一気に脱ぎ捨てた。すると、エミリの手首と同じほどもある極太ペニスが剝きだしになる。男の勃起はヘソを打

たんばかりの勢いで硬くそそり勃っていた。大きく張りだした亀頭の先からはぬるぬるした透明の液が吹きだしている。

『OH、NO……』

エミリは目前にそびえ勃つ凌辱棒を見ると、恐怖で朱唇をわななかせた。すぐにここから逃げだしたいと思うのだが、催淫剤の影響で麻酔を打たれたように手足が痺れていて動くことすらままならない。

男は自慢の逸物をたっぷり見せつけてから、少女のウエストをつかんで瑞々しい太腿を自分の腰に絡ませた。淡い陰りの中央へ剛直を突きつけて、まだ抵抗感の残る肉壺を割るように極太ペニスをゆっくりねじこんでいく。

『NOー!』

エミリは裸身をのけぞらせた。狭間を裂くような激痛から逃れようと、身体は上へ上へとずりあがっていく。しかし男はエミリの細いウエストをつかんで自分のほうへ引きつけ、脈打つ剛棒を狭あいなヴァギナへ情け容赦なく挿入しつづける。

理乃はついに見ていられなくなって、顔をそむけた。するとフレッドは理乃の顎をつかんでテレビのほうへ強引に向き直らせる。

〈今におまえもああなるんだ。楽しみにしていろよ〉

〈イヤよ。イヤです〉

理乃はフレッドの手中から逃げだそうと全力を振り絞るが、彼の愛撫は巧みで、大切なところをいじられればいじられるほど身体中が重く痺れて動けなくなっていく。

(わたしもあの子のようになってしまうの？　男の人のアレを入れられて、うれしそうな顔をするようになるの？)

〈もうやめてください。他に欲しいものがあるなら、どうにでもしますから！〉

理乃は処女を奪われるかもしれないという恐怖からパニックに陥って大声で叫んだ。

フレッドは抵抗する理乃の狭間を指で責めつづけた。肉厚で鮮やかなピンク色をした花びらを指で挟み、硬く尖った花芯を別の指でじっくり嬲りあげる。

理乃の身体はあまりにも敏感すぎて、クリ×リスを軽く揺さぶられただけでも内腿がゾクゾクと震えた。その脳裏にマサルの顔が浮かびあがる。

(梨田さんはいったいなにをしているの？　どうしてわたしを助けにきてくれないの？……まさか、あの男もグル？　この男とどこかで打ち合わせてわたしを誘拐させて、今頃は西音寺コンツェルンに身代金を要求しているんだわ。きっとそうよ。あの男は初めて出会った時から、わたしのことを憎んでいるようだったから)

理乃は心の中でマサルを罵(ののし)った。恥ずかしい場所からこみあげる快感は静まるどころか

いっそう高まり、汚れを知らぬ令嬢を絶頂へと押しあげていく。

「くっ、くううっ……」

屈辱の涙を流しながらも、理乃は秘唇を震わせてフレッドの指をむさぼった。男の愛撫は下腹全体にむずがゆい快感をもたらし、排尿したいような甘い疼きが身体の奥を駆け抜ける。

フレッドは愛液でしとどに濡れそぼった指を理乃の唇へこすりつけた。牝蜜の匂いが理乃の鼻孔にムッとひろがる。

〈こんなに濡らしておねだりされたんじゃ、オレのペニスを入れてやらないわけにはいかないなぁ〉

〈イヤです。それだけは堪忍(かんにん)してくだっ……ああ、お願い、おトイレを……バスルームを使わせてぇ〉

理乃は激しい尿意に襲われてうわずった声をあげた。

〈だめだ。どうしてもションベンをしたいなら、エミリのようにここで放尿しろ〉

エミリはバックスタイルを取らされ、牝犬のように背後から激しく突きあげられていた。男の極太棒は淫蜜でぐっしょりと濡れている少女の花奥を我が物顔で出入りしている。押しはゆっくり、引きは速く、というリズムで剛直をピストンさせると、エミリは傷ひとつ

ないきれいな背中を大きくのけぞらせて甘いあえぎ声を放った。
『AH！　HUMMMM……』
男は細いウエストをつかんでペニスの抽送を加速する。やがて青筋の走った剛棒を秘裂に根元までぶちこみ、歯の根を食いしばって精液を放出した。
『OoooH！』
その瞬間、エミリは手脚をガクガクとけいれんさせて絶頂に達した。ペニスを挿入された秘部からゴールデンシャワーがほとばしってジュウタンを濡らす。
〈そんな、ああ……〉
理乃はそのシーンを見せつけられて言葉を失った。
（人前でおしっこをもらすなんて⁉　どうしてあんなことができるの？　わたしには恥ずかしくて絶対できない。あんなことをするくらいなら死んだほうがマシだわ）
『HUM……』
ヴァギナからヌルリと抜け落ちた巨根の先から白濁した残り汁が溢れて、エミリの丸いヒップにしたたり落ちる。
〈どうだ、あんな快感、おまえも味わってみたいだろう？〉
フレッドはなおも理乃の肉芽をいじりながら耳もとにささやく。彼の男根はズボンを突

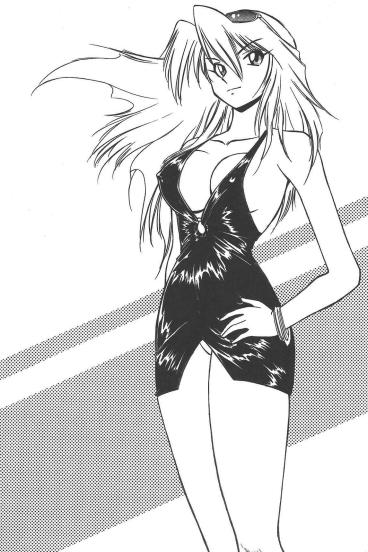
き破りそうなほど硬く勃起していたが、欲望を理性でセーブしながら美しい令嬢の狭間に指を這わせつづける。
〈イヤです。お願い、バスルームへいかせて〉
理乃の尿意はこれ以上は持ちこたえられないほど高まっていた。大事なところの中央にあるボタンのような肉の突起をいじられるたびにお腹の奥がジンジン疼いて、なにもかもすべてを忘れて自分自身を解放したくなってくる。
〈だめだ。すっかり出しきるまで見ていてやるから、このまま放尿しろ〉
フレッドは理乃を責めるようにクリ×リスを嬲る指の動きを速めた。
〈もう、だめ。いじらないで……ああっ〉
その刹那、尿道が開いて黄色い液がほとばしり、谷間を覆う男の手をびしょびしょに濡らした。理乃は失禁を食いとめようと下半身に力を入れた。
〈いいぞ、我慢せずに全部出すんだ〉
フレッドはゴールデンシャワーを浴びた指で肉芽と膣口を同時にくじる。
〈だめぇ、お願いよぉ〉
理乃は放尿と敏感な花芯をいじられる快感に襲われて、泣きながら残りの尿を放出した。
独特の芳香を放つ黄色い液はシーツを伝って床までもぐっしょり濡らす。

〈ごっ、ごめんなさい。どうしてもとめられなかったの〉
理乃は半開きになった唇をわななかせた。目には、大粒の涙が溢れている。
フレッドは泣きじゃくる彼女をベッドに突き倒した。
〈残念だが、おまえの処女はまだ破らない。この世の中には必死で抵抗する処女を自分の思いどおりに調教するのが大好きな紳士がいるんだ。そんな紳士が見つかったらおまえを高値で売りつけて、どんな要求にも応えられるような牝奴隷に仕立ててもらうからな〉
男の言葉を聞いた理乃は、絶望に胸が締めつけられるのを感じた。
〈柔順な牝奴隷になったら、今度はマゾ女が大好きな紳士に売り飛ばす。その次にどうなるかはおまえの身体とやる気しだいだ。せいぜい可愛がってもらえるように努力しろよ〉
フレッドはあざけるような笑い声をあげて、ベッドの下から高さ20センチほどの透明なガラスの水差しを引っぱりだした。
〈いいか、これからはこれがおまえの便器だ。この部屋にはバスルームなんてものはないから、ウ×コもションベンもこいつにするんだぞ〉
フレッドはビデオのスイッチを切って部屋を出ていった。つづけて静まりかえった室内に外側から鍵をかける非情な音が響き渡る。
理乃はベッドに突っ伏したまま、激しく肩を震わせて泣きつづけた。

（あの男、絶対に許さない。こんなに恥ずかしい目にあわせたからには、絶対復讐してやるんだから！）

血がにじむほど唇をきつく噛みしめて、理乃はマサルへの復讐を胸に固く誓った。

第6章　星空のカーセックス

〈ディーよ〉
深紅のプジョーに乗った金髪の女はマサルにそう名乗った。
〈悪いが、つき合ってる暇はないんだ〉
マサルがホテルへ戻ろうとすると、ディーという女はエンジンを切ってひらりと背後へ降り立った。
〈知ってるわ。市警から依頼されて犯罪捜査にきたの〉
マサルは驚いて後ろを振りかえった。
深紅(しんく)のボディコンに包まれた身体はバツグンのプロポーションで、誰もが見とれるほどの巨乳が深い谷間をつくっている。ウエストは細くくびれて形のいいヒップへとつづいて

いた。剝きだしの肩にぼれる豊かなブロンドを背中へ払いのけ、頭の上へ黒いサングラスをカチューシャのように乗せて微笑(ほほえ)みかける。
　ディーはポカンとした表情のマサルに言った。
〈おかしいわ。猫にベロを取られたみたいな顔ね〉
〈あんたが刑事なのか？〉
〈ええそう。だいたいの事情は上司から聞いたわ。犯人から連絡がきていないかどうか、ホテルに一度寄ってからわたしたちの捜査をはじめましょう〉
　ヒールをコツコツ鳴らして歩きはじめる美女の後をマサルがあわててついていく。
（いくらここがアメリカでも、こんなに色っぽい私服刑事がいるわけないぞ。だまされてるんじゃないのか？）
　しばらく歩いてから、マサルは不安を感じてディーの背中に問いかけた。
〈本当に刑事なのか？〉
〈そうよ。ここには様々な住民が住んでいるわ。大富豪もいればその日の食事にも困るような人々もいる。そのため、刑事や警官もそれらの住民に合わせた人物が必要なの。ちなみにわたしはビバリーヒルズ専属の刑事なのよ。高級住宅街の住民は自分より品位が下の人間には冷淡だわ。彼らと対等に話をするには、それなりの容姿やバックグラウンドが必

要だってわけ〉

ふたりは話しながらホテルに入った。説明する女刑事は4インチのハイヒールをはいているため、マサルとは目線がほとんど同じ高さにあった。

「梨田先輩！」

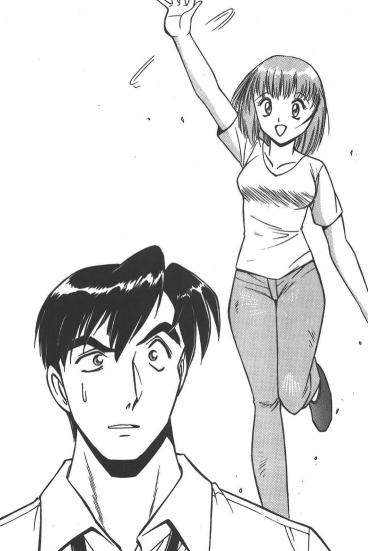
ロビーのソファに座ろうとしたマサルは、思いがけない人物から声をかけられた。

ぺったんこのローファーで駆け寄ってきたのは東京にいるはずの吉田有紀だった。彼女はなにかを警戒するようにマサルの1メートル手前で足をとめて彼を見あげた。その目がちらっとディーを盗み見る。

「有紀ちゃん、どうしたんだよ？」

「社長が、梨田先輩は短気で理乃お嬢さまを怒らせてしまいそうだからニコマル・ケミカルを潰されないようにしっかり見張ってこいって。業務命令で海外出張なんて初めてで、あたし、もううれしくって胸がドキドキしちゃう」

「あのどケチがよくそんなことを許したな」

「あたしもビックリしたんだけど、ほら、社長夫人名義のゴールドカードも借してもらったの。これでお嬢さまが欲しいとおっしゃるものはなんでも買っていいって。なんか、すごくリッチになっちゃった気分だわぁ」

すっかり舞いあがった様子の有紀は、ゴールドカードをひらひらと見せびらかした。
〈彼女は？〉
日本語のわからないディーが当然のようにマサルへ説明を求めてくる。
〈ぼくの会社の後輩なんだ。理乃お嬢さんの相談役みたいな仕事を引き受けたらしい〉
マサルは日本語で有紀に話しかけた。
「有紀ちゃん、こちらはミス・ディー」
〈ディーよ。よろしく〉
有紀は片手をあげて「ハァイ！」とディーにあいさつする。
〈マサル、早くいきましょう〉
ディーは仲のいい恋人のようにマサルの腕に自分の腕を絡めてフロントのほうへ引っぱっていく。有紀はそれを見ると険しい表情になって、急いでふたりの後についていった。
「待ってよ先輩、どこいくの？」
〈ねぇマサル、彼女をなんとかできないかしら？　せめてお嬢さまが見つかるまでは足手まといにならないように、なにか別の口実をつくって隔離しておいて欲しいわ〉
〈たぶんそれは無理だと思うな〉
マサルはゆるゆるとかぶりを振った。有紀は短大卒だったが、ヒアリングは苦手でディ

ーの〈英語〉がほとんどわからず、不審そうな顔でふたりの会話に聞き耳を立てている。
「先輩、なにを話してるの？」
「あとで説明するよ」
フロント係のアンジェラは彼らを見るとすぐに事務室へ案内した。
総支配人は電話の前に座りこみ、ベルが鳴るのをひたすら待ちつづけている。そのかたわらには市警から派遣された別の私服警官が逆探知の準備をして待機していた。警官たちはディーを見ると片手をあげて敬礼する。
ディーは威厳たっぷりにうなずいてから、警官たちに問いかけた。
〈犯人からの連絡は？〉
〈まだです。誘拐に使用された車両が海岸ぞいのフリーウェイを南下してメキシコへ向かっているらしいという情報がつい先ほど入ったのですが、現在確認中です〉
〈メキシコ？　そう、わかったわ。イズモト、あなた、マサルに電話がきたら、かわりに応対してね。わたしと彼は犯行車両を追います。情報はこの携帯へ逐次連絡してちょうだい。番号は×××ー××××よ。ではよろしくね〉
〈×××ー××××ですね。承知しました〉
日系2世で日本語の話せる警官イズモトが代表して返事をかえした。

〈犯人はメキシコへ向かったようよ。わたしたちも後を追うわ。マサル、パスポートを用意して〉

「梨田先輩、どこいくの?」

有紀はそれまで黙ってやりとりを見守っていたが、英語がわからないため会話が理解できない。カリカリしながらマサルに問いかけた。

「理乃が誘拐されたんだ。パスポートは持っているか?」

「ゆーかい!? お嬢さまが誘拐されたの? マジでぇ? 本当?」

「ああ。本当だから、大声を出すのはやめてくれ。パスポートはあるのか?」

「あるわよ。でも、そんなものどうするの?」

有紀は両目を真ん丸にしてマサルを追いかけていく。

「これから彼女や市警の協力を得てお嬢さんを取り戻しにメキシコへいく。国境を越えるにはパスポートが必要になるんだ」

「マジ? 本当にメキシコまでいくの? 危なくない? お金、5百ドルしかないけど向こうでも使える? あたし、毛虫入りのテキーラなんか飲めないよぉ」

マサルはあきれ顔で有紀を振りかえった。

「メキシコへいくのがいやなら、このホテルにいてくれ」

「冗談でしょ。あたしも一緒にいくわ。お嬢さまと一緒でなきゃ、ディズニーランドにもショッピングにもいけないもん。ミッキーに会うまで日本には絶対帰らないんだから」

〈マサル、時間がないわ〉

ディーに呼ばれて、マサルは有紀に「いくぞ」とだけ言ってきびすをかえした。

「あっ、やだ、待ってよー」

有紀は子供のようにパタパタと足音を鳴らしてふたりの後を追った。

特別仕様のプジョーに3人が乗ると、ディーは流れるような動作で発進させた。

☆

ワインレッドに輝く高級車は混雑する市内から海岸ぞいのフリーウェイへと駆け抜けた。まばゆい太陽の下、カリフォルニアの海風を切り裂きながら5号線を猛スピードで南下していく。

路外にそびえたつパームツリー。マリンブルーの海を見降ろすように崖ぎりぎりに建てられた高級住宅。後部座席の有紀は次々と流れていく景色を感心した顔で見ていた。横に並んだダットサンの荷台に子供と大型犬が乗っているのを見ると、大きく手を振ってあいさつし合う。

〈彼女、シニアスクールの生徒みたいね〉

ディーの言葉を聞いて、マサルは吹きだしそうになった。

アメリカ人にとって日本人の顔立ちは幼く見えることが多い。Ｔシャツとジーンズを着た有紀がマサルの目には女子大生のように映っているのだから、ディーが彼女を高校生のように見ていてもしかたがないだろう。

ディーは赤いマニキュアを塗った指先でＦＭのスイッチを入れた。とたんに速いビートの曲がステレオから流れだす。

有紀はディーが彼女の気をそらすためにラジオを入れたのだとは気づかずに赤いボディを軽く指で叩きながらリズムに乗りはじめた。

ディーは西日を遮(さえぎ)るためにサングラスをかけてマサルに話しかけた。

〈今のうちに説明しておきたいんだけど、最近メキシコに近い都市で10歳から16歳までの子供の誘拐が続発しているの。犯行の方法は様々で学校の帰りを狙われることもあれば、両親が外出中にベッドからさらわれることもあるわ〉

〈誘拐の目的は幼児ポルノを撮(と)って販売するため？〉

〈わからないわ。犯人は男女関係なく子供を誘拐しているの。それに、その手のビデオが流出すればルートをたどって出所をつきとめられるのが普通だけど、今回だけはビデオはどこにも流れていないし、子供の行方(ゆくえ)もまったくつかめなくて、市警でもお手あげなの〉

〈犯行の目撃者はいないのか?〉
〈ええ、ほとんどね。ただ、犯人は複数でボスは日本人だという噂が以前からあって、誘拐組織は『March』と呼ばれているわ〉
ディーはうんざりしたようにかぶりを振ってアクセルの自動ロックを時速90マイルまで引きあげた。これでプジョーはアクセルを踏まなくても時速90マイルの速度を保って走りつづける。
〈きみは理乃が『March』に誘拐されたんだと思うか?〉
〈もしかするとそうかもしれない。今まで『March』のターゲットは中南米の子供たちだけで、外国人が狙われたのはこれが初めてよ。それも誘拐されたのが日本の有名な大富豪の孫娘ともなると話はやっかいだわ。この事件が解決されないと、日米間のありとあらゆる接点にひずみが生じて政治的にも国際的にもまずいことになるのは目に見えているわ。なんとかして早急に彼女を奪回しなければ〉
ディーの言葉はまるで自分自身に対する決意のようにマサルには聞こえた。
だ円に歪んだオレンジ色の太陽は、今まさに太平洋へゆっくりと没しようとしている。
茜色の光は風に舞いあがる彼女のブロンドを燃える炎のような色に染めあげ、ハチミツ色の頬を濡らしている。

ディーはマサルの視線に気づいて問いかけた。
〈どうかした?〉
〈いや。きれいな横顔に見とれていたんだ〉
〈ありがとう〉
〈ひとつ質問したいんだが、ディーっていうのは本名なのか?〉
〈あだ名のようなものよ。わたしの本名は友達にしか教えないことにしているの〉
「梨田先輩」
後ろから肩を叩かれて、マサルは有紀がいることを思いだした。
「あたし、機内食を食べただけでホテルに直行したからすごくお腹が空いてるの。バーガーキングでもいいから、どっかそのへんのファストフード店に寄ってもらえません?」
マサルは自分も空腹なことに気がついた。考えてみると、有紀同様、機内で出た食事を食べたのが最後だった。
〈ディー、すまないが食べ物をどこかで買いたいんだが〉
〈いいわよ。近くのコンビニに寄るわ〉
ディーは薄闇の迫るフリーウェイを飛ばしていく。ほどなく出口を見つけて車のノーズをゆっくりと巡らせた。その後、小さな街に着いてコンビニをさがしている最中、コンソ

ールボックスから電子音が響きはじめる。
〈携帯よ。たぶん市警からだと思うわ。取ってくれる？〉
マサルは彼女のかわりに携帯電話の受話スイッチを入れて耳に当てた。
〈ディー刑事ですか？〉
やや南部なまりのある女の英語が耳に飛びこんできた。
〈いや。彼女は隣にいる。ぼくは梨田マサル。西音寺理乃の情報ですか？〉
〈ええそうです。彼女は郊外のバス停留所にいるところを無事に保護されました〉
〈本当に？　彼女と話はできますか？〉
〈いいえ。彼女は今、市警の車でこちらへ向かっているところです〉
〈わかりました。連絡をありがとう〉
女は語尾のトーンをあげるようにして返事をかえし、電話はそこで切れた。
マサルは一瞬その話し方に聞き覚えがあるような気がしたが、その興味よりも理乃が見つかったことでホッとしながらディーに言った。
〈理乃が警察に保護されたそうだ。市警に向かって移動しているらしい〉
〈まぁ、本当？　それはラッキーだったわね。それじゃあ、祝杯をあげなくっちゃ〉
ディーはサングラスをはずしてうれしそうな笑顔を見せた。

〈祝杯よりも、早く彼女のもとへ戻らないと……〉
〈堅いことは言いっこなし。彼女は市警で待たせておけばいいわ。おいしいものを食べて、アメリカの夜を楽しんでちょうだい〉
ディーは急にくだけた様子になって右手をマサルの太腿にそっと這わせた。前を向いたままで彼の股間をやさしくまさぐる。
マサルは緊張に頬をこわばらせて女刑事の横顔を盗み見た。
〈いきなり挑発してきて、どういうつもりなんだ?〉
拒否するつもりでその手をつかむと、ディーはグリーンの瞳を流し目にして目くばせをする。
〈最初に言ったでしょう？　あなたはわたしの好みのタイプなの。彼女が無事に見つかったのだから、少しくらいはつき合ってくださらなくちゃ〉
「梨田せんぱーい、今コンビニがあったのに、どうして寄ってくれないのー？」
有紀の声で現実に引き戻されて、マサルは思わず不機嫌な顔になった。
「お嬢さんは無事に見つかったそうだ。彼女がこちらへ戻ってくるまで、オレたちもなにか食べておくことにしよう」
ディーは日本語の意味がわかったように大きくうなずき、巨大なロブスターの看板を飾

っているレストランの駐車場へプジョーを乗り入れた。

☆

有紀はまだ若いせいか、時差ぼけなどものともせずに旺盛な食欲を見せた。しかしマサルは体内時計が狂ってしまったらしく、時々耐えがたいほどの睡魔が襲ってきてまぶたが自然と重くなる。

「パスタもおいしいし、ロブスターなんか甘みがあって最高！　先輩、食べないの？」

「ああ。あまり食欲がないんだ」

マサルは口当たりのいいシャンパンを飲みながら、ディーの様子をうかがっている。ディーは彼の向かいの席に座り、シーフードサラダをつつきまわしていた。食べ物にあまり興味がないのか、浮かない顔で窓の外をちらちら見やっている。車を運転しているので、アルコールはやめてトマトジュースを飲んでいた。

「それじゃあ、そのロブスター、有紀にちょうだい。ねぇ、このベーグル、手づくりっぽくておいしいよ。セサミがきいてて嚙むととっても香ばしいの」

「ふうん」

マサルが有紀に生返事をかえして考えこんでいると、なにかが股間に触れた気がした。思わずイスから飛びあがりそうになった。見ると、パンプスを脱いだディーの右足が両脚

のつけ根へとのびている。マサルはディーへ視線を向けたが、彼女は相変わらず窓の外を見るともなく見ながらそ知らぬふりを決めこんでいる。
「冷たいポテトスープって最高！　ポテトだけじゃなくて、なにか不思議な味がするんだけど、ハーブとかの隠し味を使ってるのかなぁ？」
有紀はとろりとした白いスープをスプーンですくってしげしげと観察している。
女刑事ディーは、マサルのモノをジーンズの上から足の指で揉みしだいた。短い五指を巧みに動かしながら指のつけ根でやさしくペニスを刺激する。
マサルは女の挑発を受けて分身が硬くそそり勃ってくるのを感じた。ディーの愛撫は疼くような快感をもたらした。極太ペニスは狭苦しい空間の中でいっぱいにふくれあがり、自由を求めて悲鳴をあげている。
〈お飲み物のおかわりはいかがですか？〉
頭上からウェイトレスの声が聞こえてきて、マサルはハッと顔をあげた。テーブルの上のグラスが空になっている。シャンパンは有紀が残りを全部空けてしまったようだ。
〈コーヒーを〉
マサルはかすれ声で答えた。
〈承知いたしました〉

ウェイトレスが去ると、もう一度ディーを見る。今度はマサルをじっと見つめていた。
〈車に忘れ物をしたわ。取りにいってくる〉
〈オレも一緒にいこう〉
有紀は立ちあがるマサルを不思議そうな顔で呼びとめた。
「どこいくの？　どうして梨田先輩がついていくの？」
「駐車場は暗くて物騒だからな。女性がひとりきりじゃ危険だろう」
「すぐ近くなのに」
「ここは日本とはちがうんだ」
マサルは有紀の追及を振り払ってディーの後を追いかけた。小走りに駆けると刺激がモロに伝わって硬く張りつめた剛棒が暴発しそうになる。
ブロンドの女刑事ディーはレストランの外で待っていた。マサルが飛びだしてくるのを待ちかまえていたように両肩に腕をまわして、唇を押しつけて、荒い息をつきながらマサルの頬や首筋にもキスを繰りかえす。
マサルは濃厚なキスをかえしながら女刑事の巨乳を片手でまさぐった。同時に右手をぴったりしたスカートに包まれた太腿のつけ根へ挿入する。
〈待っていたのよ、この時を。出会った瞬間からあなたが欲しかったの。欲しくて欲しく

て死にそうな気分だったわ〉

マサルはディーがガーターベルトとTバックパンティしかつけていないのを指で知った。ヒモ同然のパンティは股の部分が失禁したようにぐっしょり濡れて女の秘部に貼りついている。

〈大洪水だ〉

〈あなたのせいよ。もっと触って〉

ディーは両脚を肩幅に開いて男の指を招きながらマサルのジーンズのジッパーを引き降ろして、勃起した極太ペニスを剝きだしにする。

〈すごいわ。こんなに大きなの、初めてよ〉

女刑事はすすり泣くような声でそうささやいた。ほっそりした長い指で円をつくって青筋の浮かびあがった太幹をゆっくりこすりたてる。マサルの指がパンティのクロッチを横にずらして敏感な部分に直接触れるやいなや、半裸に剝かれた身体を大きく震わせて壁に背中を押しつける。

マサルは秘唇をひろげて、たっぷりと蜜をたたえているクレヴァスを指先でかきまわした。中指の爪くらいあるクリ×リスは充血して包皮から飛びだしている。蜜壺の入り口を指でたどると、熱く潤うそれは男の巨根をおねだりするようにヒクヒクと動いてみせた。

〈欲しいか？〉
〈ええ、奥までいっぱい突きあげて。たっぷり感じさせて欲しいの〉
ディーは素早くTバックを脱ぎ捨てて、片脚を折り曲げてマサルの腰に絡ませる。ぱっくりと開いた牝壺の入り口に向けて、マサルは脈打っている灼熱の棒をねじこんだ。腰を突きあげるようにして剛直を進めていく。
〈オオッ！　すごいわ。硬くてアソコを突き破られてしまいそう〉
　女刑事は感きわまった声を必死に押し殺した。
（すぐ脇のドアから、いつ誰が出てくるかわからない。こんなところを誰かに見られたら、恥ずかしくてたまらないわ）
　そう思うとますます興奮してきて、巨根を深々と咥（くわ）えこんだヴァギナがぐしょぐしょに濡れてくる。
〈自分からおねだりするだけあって、ずいぶんと締めつけてくれるじゃないか〉
　マサルは言葉で嬲りながら、女体を揺さぶるように激しく突きあげた。熱くぬらつく肉襞を亀頭の先でえぐりあげ、手にあまるほど巨大な乳房を揉みしだく。
〈インバイのメス豚め。おまえはいつもゆきずりの男にプッシーを見せつけて挑発しているのか？　誰でもいいからヴァギナを開いておねだりしているんだろう？〉

〈そんなっ……。誰でもいいなんてことは……アウッ！〉
ディーは乱暴に乳首をつねられて悲鳴を放った。秘唇の奥からこみあげてくる快感に四肢を震わせつつ、涙のにじんだ双眼で男の顔を見つめる。マサルの表情がどことなく変化しているような気がして目をしばたたいた。
マサルは緊張した面持ちで、柔肉の形が変わるほど強く巨乳を揉みたてながら、ディーの身体を壁へ押しつけた。
〈そんなに激しくされたら壊れてしまいそうだわ。お願いよ、もう少しやさしくして〉
〈メス豚の分際で飼い主に命令するとはいい度胸だな。自分の立場を身を持って知るがいい〉
マサルはパンパンに張りつめた勃起をヴァギナへ突き立てたまま、ディーに四つん這いの姿勢を取らせる。
〈オウッ、なにをするつもりなの？〉
肩越しに問いかけるディーの形のいいヒップを、マサルはいきなり平手で叩きはじめた。
パンッ！　パンッ！　パンッ！
〈ヒイィーッ！〉
美人刑事は生まれて初めてスパンキングを受けて、あまりの痛さに悲鳴をあげた。男の

大きな手がもたらす激痛から逃れようとヒップをよじるが、マサルは細くくびれたウエストをつかんで強引に引き寄せ平手打ちを繰りかえす。

〈ヒイイッ〉

ディーは激痛に耐えきれず下半身をくねらせた。するとヴァギナは彼女の意志とは関係なく勝手に収縮してマサルの巨根を熱く締めあげる。

〈オオウッ。痛い、やめてぇ〉

〈尻を叩かれてよがるとは、たいしたメス豚じゃないか。もっと平手をくれてやるから、ありがたくちょうだいしろよ〉

マサルは熱く潤む蜜壺の中を肉のこん棒でゆっくりとかき混ぜながら、女刑事のヒップを何度も平手で叩いた。そのたびに、濡れそぼった花びらが太幹に絡みつく。

駐車場に車が1台入ってきて、そのライトがふたりの姿を一瞬明るく照らしだした。

ディーの全身は羞恥と興奮で燃えるように熱くなっている。肉の乗った上向きの白いヒップは、両方とも真っ赤に腫れあがっている。

〈お願い、なんでもしますから、もう許してください〉

女刑事は子供のように泣きじゃくりながら肩越しにマサルへ許しを求めた。

〈なんでもするだと？　じゃあオレのケツの穴を舐めてもらおうか〉

マサルはディーのヒップを両手で押しやった。グポッというみだらな音が響いて淫蜜まみれの極太ペニスがヴァギナから抜け落ちる。

ディーは身体の支えを失って地面に倒れこんだ。あお向けに転がったところへ、レストランのドアが開いて明るい光が半裸の肢体に降り注ぐ。

〈オウッ、見ないで〉

ドアを開けたのは有紀だった。ふたりが駐車場へ出ていったまま、いつまでたっても戻らないので、やむなく社長から預かったゴールドカードで支払いをすませてきたのだった。片手にはディーがテーブルに置きっぱなしにしていた車のキーを持っている。

「梨田せんぱーい、どこいっちゃったの？　梨田せ……」

有紀は両手でメガホンをつくって叫んでいたが、次の瞬間には地面に転がっているディーの姿を見つけて屈みこむ。

「どうしたの？　だいじょうぶ？」

ディーは有紀の視線に気づくと急いで両脚を閉じた。

「メス豚がもう1匹登場か」

有紀はハッとして視線を巡らせた。するとそこにはマサルが仁王立ちになっていた。剝きだしの股間からは巨根がそそり勃ち、ドクッドクッと脈打ちながら勢いよくヘソまで反

りかえっている。

「先輩……」

有紀は言葉を失ってしまった。

〈立つんだ〉

マサルは細い腕をつかんで力ずくでディーを立たせた。そのまま大股に歩きだすマサルの背中へ、有紀が恐るおそる問いかける。

「どこへいくの？」

「おまえも一緒にこい」

その場へひとりだけ残るわけにもいかず、有紀は後からついていく。マサルはディーの腕をつかんだままでプジョーの運転席に腰を降ろした。そして呆然としている女刑事の身体を力まかせに引き寄せる。

〈オレの上に座るんだ〉

〈いやよ。お願い、その手を離して〉

〈まだ痛い目にあいたいか？〉

マサルは抗うディーを無理やり後ろ向きの体勢で自分の太腿の上に座らせてしまった。

細いウエストをつかんで濡れそぼる秘唇を指で開き、まだ勃起している剛直をヴァギナへ

と突き立てる。
〈アウッ!〉
有紀は恐怖に唇を引きつらせた。
「梨田先輩、そんなことはやめてください。ディーさんがかわいそうすぎます」
「なんだと? それじゃあ、おまえがこのメス豚のかわりになるか?」
有紀は絶句してかぶりを振った。マサルはディーの秘花を極太棒で貫いたまま、彼女の身体の上からふたりまとめてシートベルトをセットする。
〈キーはどこだ?〉
有紀はハッとしてキーを握りしめた手を背中へまわした。
マサルはその気配に気づいて右手を差しだす。
「キーを渡すんだ」
「イヤよ。ディーさんを解放してくれたら渡してもいいけど」
「バカを言うな。おまえらメス豚にはオレの命令を拒否する権利はない。このメス豚がこれ以上苦しむ顔を見たくなかったら、素直に言うとおりにしろ」
マサルは見せしめのためにディーの乳首を両手でひねりあげた。
〈ヒイーッ!〉

女刑事は豊かなブロンドを振りたてるようにして背中をのけぞらせた。痛みのために美貌が歪み、あえぐように開かれた唇の端からよだれがひと筋こぼれ落ちる。
「わかったわ。言われたとおりにする。だからお願い、それ以上ひどいことはしないで」
「それじゃあ、助手席に座って鍵を渡せ」
有紀はマサルの命令に従ってキーを手渡した。
〈運転できるな？〉
肩越しに問いかけられて、ディーはもうろうとしながらうなずいてみせる。
〈変なことをしたら、おまえの命はないものと思え〉
ディーはもう一度うなずいてエンジンを始動させた。狭間を硬くそそり勃ったペニスで貫かれているせいで全身が熱く疼いている。助手席に座った有紀が自分の恥ずかしい姿を見つめていると思うとなぜかすごく興奮してきて、乳首が勝手に勃起してくる。
青白い月光の下、真っ赤なプジョーはゆっくりと車道へ滑りだした。
時折すれちがう対向車のドライバーはディーの姿を見るとギョッと目を見張った。
彼らの驚きに満ちた表情を目にするたびに、美貌の女刑事は激しい羞恥にさいなまれて半裸の身体を切なげに震わせる。背後から両手をまわされてGカップの巨乳を揉みあげられると、今まで一度も味わったことのない激しい快感が脳天まで突きあげて、目の前が白

くかすんでくる。
マサルはディーが意識を失いそうになると、すかさず乳首をつねりあげて運転に集中させる。有紀はあまりにもひどい光景を見せつけられて、泣きながら哀願した。
「お願いだから、もうこれ以上ひどいことをしないで。先輩はいつもみんなにやさしいのに、どうしてこんなひどいことをするの？　なんでそんな冷たい人になっちゃったの？　ううん、今だけじゃないわ。あたしにまであんなことをして……」
有紀はベッドに両腕を縛られた時のことを思いだして身体を震わせた。
マサルは無言のままディーからハンドルを奪った。気絶寸前になっている女刑事の肩越しに前方を見つめ、プジョーのノーズを右へターンさせる。車道をそれると少しの間、板張りの路面を走り、やがて臨海公園へと乗り入れた。
青白い街灯の下で車が停まり、有紀は怯えた表情でマサルの横顔を見つめた。
(これからどうするの？　あたしたち、どうなっちゃうの？)
心の中で疑問を言葉にしても、返事はかえってこない。
マサルはシートベルトをはずして革張りのシートをめいっぱい後ろへ倒した。当然マサルの体はシートとともに後ろに倒れ、狭間を貫かれたままのディーは背面騎乗位の体位となる。

「いいか、このメス豚がイクところをたっぷり見てやれ」
マサルは有紀に命令して、もうろうとしている女刑事のウエストを両手でつかみ、なかば持ちあげるようにして豊満な女体を上下に揺すりたてた。
〈オオッ、オウ……〉
ディーは意識を取り戻し、欲望のままに自分からヒップを激しく上下させてマサルの巨根を秘唇でむさぼった。ブルッブルッと美身を震わせ、狭間から湧きあがる甘い疼きを抑えこむように豊乳を両手で揉みあげる。
有紀は息をすることも忘れてふたりの痴態を凝視した。女刑事の身体からは汗が吹きだし、青白い街灯の光を浴びて全身がキラキラと輝いている。
(あんなに激しく動かしてだいじょうぶなの？　ディーさん、気持ちいいのかしら？)
有紀は今まで他人のセックスを一度も見たことがなかった。眉をしかめた女刑事の表情が、まるで苦痛を必死にこらえているように見えた。それでも、彼女が自分で乳房を揉んでいるのを見ると、なんとなく気持ちよさそうだと思えた。
(ディーさんみたいにされたら、どんな気分かしら？　梨田先輩のおチ×チンを根元まで入れてもらってお腹の奥まで突きあげられたら、あたし、変になってしまうかも)
そんなことを考えただけで胸が苦しくなり、自分のアソコも熱く潤んでくるような気が

した。意識を自分の秘部へ集中させると、いつの間にか女の蜜が大事なところから溢れてパンティが濡れてしまったことがわかった。ジーンズまで染みでていないか心配になって、そっと股間へ指先を這わせる。

マサルは有紀の気持ちを察知したように黒い瞳で彼女を見た。

「おまえも犯して欲しいか？」

「イ……イヤです」

「本当のことを言うがいい。このメス豚と同じようにすべてを忘れてよがり狂いたいと」

ディーはマサルの言葉どおり我を忘れて快楽をむさぼっている。唇の端からよだれをこぼし、金髪を振り乱してヒップをくねらせていた。

その様子を見て、有紀は本能のおもむくままにコクリとうなずきかえしてしまった。

(この人を狂わせている快感を、一度でいいから味わってみたいわ)

「ディーの乳首とクリ×リスをいじってやれ。こいつを一度イカせてからおまえをたっぷり犯してやる。いいな？」

有紀は催眠術をかけられたように、おずおずと片手をのばして金髪女の乳房をつかんだ。もう片方の手は頭髪と同じブロンドの毛が密集している恥丘へと進めていく。

〈アウッ！　ヒッ……ヒイイィッ〉

熱く勃起した肉真珠に触れられた瞬間、ディーはひときわ大きく手足をけいれんさせた。激しく押し寄せてくる快感に白目を剝いて乳房を突きだし、有紀の指に恥丘をこすりつけるようにして美尻を振りたてる。

有紀は女刑事の肉芽を指でくじりながらもう片方の乳首を舌の先で舐めていく。イヤイヤはじめたレズプレイだが、陰部を嬲っているうちにディーの興奮が伝わってきて全身が熱く燃えてくる。アソコが疼きはじめてヒップが自然と左右に揺れだした。ブロンドの美人を愛撫するだけでは物足りなくなって、片手で自分のジーンズとパンティを引き降ろし、指で膣口をいじりはじめる。

〈いいぞ、締めつけてきやがる〉

マサルはうわずった声を放ち、目の前で揺れているディーのアヌスへ指を1本挿入した。抵抗感のある肉のすぼまりを犯して直腸の壁を指腹でえぐりあげる。

ディーは全身の性感帯を責めたてられて、あっと言う間に絶頂まで昇り詰めてしまった。

〈ヒグウッ……オオオオーッッ！〉

という野獣のような咆哮を放ち、次の瞬間には四肢から力が抜けてぐったりとなる。

「うぉう！」

マサルもまた、女刑事のヴァギナに巨根をひときわ強く締めつけられて、スペルマをた

っぷりと射出した。白濁の液をドプドプドプッと噴きあげると全身に射精の快感と身震いがひろがって、魂が肉体からすっぽ抜けるような虚脱感に満たされていく。マサルは仰臥するように倒れこんだディーの身体を両腕で抱きしめたまま、意識がすうっと遠のいていくのを感じていた。その目前で有紀が荒々しい息を吐いている。

有紀は自らの股間にまわした手で、淫蜜で濡れぬれの秘部を激しくこすりあげていた。欲情に駆られてトロンとした瞳でマサルに問いかける。

「先輩、ディーさん、イッちゃったみたい。今度はあたしの番でしょ？　ね？」

Tシャツを脱ぎ捨て、ブラジャーも取って乳房を剝きだしにすると、マサルの右手をつかんで柔らかな肉球をつかませる。

しかし、マサルは射精と同時に気を失ったらしく、ピクリとも反応しない。

「先輩。ねぇ、先輩ったらぁ！」

有紀は自分だけイケなかった悔しさで泣きそうになりながら、ふたりの頬をぴしゃぴしゃと平手で叩いて目を覚まさせようとした。

第7章　オレって二重人格!?

目が覚めた時、マサルは殺風景な部屋にひとりきりだった。
開襟シャツとジーンズをつけたままの姿で、体の上に毛布が1枚かけてある。
「ここはどこだ?」
不思議そうに周囲を見まわしてベッドから立ちあがった。よく見ると窓ははめ殺しになっていて、その向こうに鉄格子がついている。
「なんでオレは……理乃はどうしたんだ?」
ドアを開けると薄汚れた廊下と制服姿の警官が目に飛びこんできた。
警官はマサルの姿を見て、思わず腰のピストルに手をかける。
〈ルーサー、だいじょうぶよ。あとはわたしがやるわ〉

警官の背後にディーが現われ、マサルの顔を見ると眉をしかめて両手を腰に当てた。
〈気分はどう?〉
〈別になんともないが、オレがどうかしたのか?〉
〈どうもこうもないわよ。あんな場所でひどいことをして……〉
責めるような口調で言いかけたが、ディーは眉間にシワを寄せて首をかしげた。
〈まさか、きのうのことを覚えていないなんて言わないでしょうね?〉
〈きのうのことって?〉
マサルが聞きかえすと、ディーは真っ赤になって視線をそらしてしまった。
「梨田先輩っ!」
有紀が廊下の向こうから駆けてくる。どこかで着替えたらしく新しいカットソーとミニスカート姿で、マサルの前に仁王立ちになってマサルをにらみつけた。
「先輩、きのうはどうしてあんなことをしたんですか?」
マサルは当惑の表情を浮かべてふたりの顔をかわるがわる見つめた。
「きのうオレがなにをしたってんだよ?」
ディーと有紀は申し合わせたように口をつぐんでしまった。だが、有紀は廊下を通りかかる警官たちは日本語がわからないだろうと考えて思いきって口を開いた。

「きのうの夜、梨田先輩はレストランの駐車場でディーさんに無理やりエッチをしたんです。それからあたしたちを臨海公園に連れてって、すんごくエッチなことをしたの」
有紀は言葉を選んで説明したが、さすがに詳しくは言えずに赤面する。
「オレがディーに無理やりエッチをしたって?」
「まさか、あんなにすごいことをしといて、記憶がないとは言わないでしょうね?」
マサルは即座に「ない」と答えた。
「理乃をさがしにメキシコへつづくフリーウェイを南下する途中、ディーの携帯に理乃が見つかったと連絡があって、引きかえす途中でレストランへ寄ったところまでは覚えている。でも、その先は……記憶がないんだ」
「信じられない! あんなにひどいことをしたのにぜんぜん記憶がないなんて、梨田先輩ってやっぱり二重人格なんじゃないの?」
「そういえば日本にいた時もそんなことを言ってたよな。どうして有紀ちゃんはオレを二重人格にしたがるんだよ?」
「だって、つい半日前に自分がしたことを覚えてないなんて普通じゃ考えられないもん。先輩は二重人格よ。ジキルとハイドみたいなものなんだわ」
「オレのどこが二重人格に見えるんだ? 冗談言うのもいい加減にしろよ」

ふたりの間にディーが割って入った。
〈マサル、西音寺理乃はまだ見つかっていないわ。きのうあなたが受けたわたしあての電話はガセネタだったのよ〉
〈なんだって!?　それなら彼女は今どこにいるんだ？　早く助けにいかないと……〉
〈わかってるわ。昨夜市警に戻ってから、すぐにかわりの者をメキシコへ向かわせようとしたの。でも、犯人が使用した車は盗難車で、市街地のはずれの駐車場に乗り捨てられているのが見つかったわ。おかげで犯人の足取りはそれきりまったくつかめないのよ〉
マサルは〈クソッ〉とつぶやき、握りしめた拳で廊下の壁をドンと叩いた。
〈犯人からの要求は？〉
〈ホテルにも西音寺コンツェルンにも、どこにも連絡がないの。彼らはもしかすると彼女が日本の大富豪の孫娘だとはまだ知らずにいるのかもしれないわ〉
たとえディーの言うとおりだったとしても、理乃が無事だとは誰にも断言できない。普通の娘と同じ扱いをされれば、かえって危ない目にあっているかもしれないのだ。
〈オレはどうすればいいんだ？〉
〈ひとまずホテルへ戻って連絡を待ってちょうだい。犯人側の動きがつかめれば、すぐに連絡をするわ〉

〈わかった。一刻も早く理乃を見つけだしてくれ〉

☆

マサルと有紀は市警の覆面パトカーでホテルまで送り届けられた。
フロントに預けてあったルームキーを受け取り、理乃が拉致(らち)される前にチェックインした最上階のロイヤルスイートへ向かう。有紀はパトカーを降りた時から、マサルの後ろを数歩離れてついてきていた。マサルはそのことに気づくと、部屋へ入るなりくるりときびすをかえして有紀を正面から見降ろした。
「どうしてそんなにオレを敬遠するんだ？」
「だから言ったでしょ。梨田先輩は二重人格なの。自分でも気づかないうちに女性をレイプしちゃうようなひどい人なのよ」
有紀はいつでも廊下へ逃げだせるように後ろ手でノブをつかんでいる。緊張に満ちた彼女の姿を見て、マサルはがっくりと肩を落とした。
「悪いがオレには記憶がないんだ。思いだそうとしても、どうしても思いだせない。まるで有紀ちゃんにひどいことをした時の記憶だけがきれいさっぱり抜け落ちてしまったように、なにも思いだせないんだ」
「これを見てもダメなの？」

有紀は泣きそうになりながらミニスカートの裾をつかんでウエストの位置までおずおずと持ちあげた。つづけて狭間を覆う真新しいスキャンティを片手でずり降ろす。

マサルは思わず自分の目を疑った。剝きだしになった有紀の恥丘は哀れにも毛を丸刈りにされて、ピンク色の地肌がすっかり露出している。

「先輩はあたしの両腕をベッドに縛りつけて、こんなひどいことをしたのよ。やめてって泣いてお願いしたのに、恥ずかしい言葉を言って、ずっと奥のほうまで……」

有紀は両目に涙を浮かべて訴えた。自分の手で秘部をさらす羞恥に耐えられなくなり、ドアに背中を押しつけて朱唇をわななかせる。

「あたし、あの夜が初めてだったのよ。先輩が好きだったから、初めては先輩にあげてもいいって思ったのに……。先輩にこんなことをされただけじゃなくて、スキャンティも隠されちゃって、ノーパンのままストッキングだけはいて家に帰ったのよ」

有紀はとうとうこらえきれずに嗚咽をもらした。

「すまない」

マサルはうめくように言って、ドアにもたれかかっている有紀の身体を両腕で抱き寄せた。有紀は一瞬身体を硬直させたが、すぐにその身を彼の胸にまかせていく。

（オレは本当に二重人格なのかもしれない）

マサルは胸の奥から不安がこみあげてくるのを感じつつ、震えている有紀を抱きしめる。彼女の頬を伝う涙を指先で拭いながら低い声で問いかけた。
「オレはそんなにひどい男だったのか？」
「まるで人が変わったみたいだった。すごく怖い顔で、乱暴な言葉を使って……」
有紀は恥辱と恐怖に満ちた2夜を思いだしてその身を震わせた。けれども、涙に濡れた顔をあげると恥ずかしそうな表情で言った。
「でもね、ちょっとだけ気持ちよかったの。梨田先輩のアレっておっきくて硬いし、すごくじょうずだから」
小さな声で本心を言って、また恥ずかしそうにマサルの胸へ顔を埋めていく。
「有紀ちゃん」
マサルは両腕ですくうようにして有紀の身体を抱きあげた。
「やだ、先輩、なにをするの？」
「怖がらせたおわびに、今度はたっぷりやさしくしてあげるよ」
マサルは有紀をベッドルームまで運んでいき、しわひとつないシーツの上へ有紀の身体をそっと横たえた。
生まれたての朝の光が柔らかなカーテンを通して部屋中に降り注いでいる。

「こんな明るいところで……恥ずかしい」
マサルは顔を覆う有紀の手を左右に開いてキスをした。ふっくらした美唇をついばむように吸いあげる。有紀はためらいを見せながらも、口中に押し入ってきた舌に自分の舌を絡めてキスをかえした。服の上から乳房を揉まれて恥ずかしそうにまぶたを閉じる。胸のボタンをはずされても抵抗しようとはしなかった。
「先輩、やさしくしてね」
「ああ。オレがおかしくなったら、その時は言ってくれ」
有紀は「えっ?」と言ってまぶたを開いた。マサルが冗談めかした顔で自分を見降ろしているのを知ると、すぐに四肢の緊張を解く。
マサルは黙って有紀の上半身を剝きだしにした。傷ひとつない美しい肌に舌を這わせて、乳房から脇腹、脇腹から下腹へとじわじわ舐めあげていく。右の腰にあるスカートのホックをはずすと、有紀はヒップを浮かせてミニを脱いだ。すぐに無毛の秘部が露出する。
マサルの舌は柔肌を湿らせながら狭間へと近づいていく。有紀はとっさに太腿をきつく閉じ合わせた。
「だめよ、シャワー浴びさせて。それ以上舐めちゃイヤ」
「いいんだ。身体を洗ったらこのおいしい匂いがなくなっちゃうだろ。女らしい甘い匂い

をかぎながらするとすごく興奮するんだ」
「やだ、先輩ったら」
有紀は肌をピンクに染めて裸身をくねらせる。
マサルはむっちりとした太腿の間に片手を入れて、下肢を割り開いた。するとすっかり毛を剃られてしまった秘裂が目に飛びこんでくる。
「意識がなかった時のこととはいえ、こんなことをするなんて……。ごめんな」
「ううん。他の男だったら絶対許さないけど、先輩だから許してあげる」
有紀は自分の乳房を揉む太い腕に手をかけた。浅黒い肌を愛撫するように指腹でなぞり、息を軽く弾ませながらマサルの動きに注目している。
マサルは有紀の両脚をつかんでヒップの下に羽根枕を押しこんだ。
(先輩にバージンを奪われた時と同じだわ。こうやってアソコを高くしてするのが先輩のクセなのかしら、それとも……)
有紀はぼんやりしながらそんなことを考えている。
「すごくきれいだな。桃色じゃないか」
マサルは秘部に見とれて感心しきった声をあげた。両手の指で秘唇を左右に開くと舌を突きだすようにして花芯をペロリと舐める。

有紀は大事なところに生温かな感触を覚えて声をもらした。
「やんっ……。先輩、そんなとこ舐めないで。汚いでしょ」
「汚くなんかないさ」
マサルは両腕で青白い太腿を抱えこみ、なおも執拗に可愛い割れ目を舐めあげる。指先で包皮をめくってクリ×リスを剝き、敏感なそれを舌で押すように愛撫する。
「ああんっ。……そこ、痺れちゃう」
有紀は内腿をわななかせて甘い声をあげた。ピンク色のお豆を吸いあげられると下腹全体が痺れてきて、たまらなく気持ちよくなってくる。
「有紀はずいぶん敏感だな。舐めれば舐めるほどオマ×コの奥からエッチなラブジュースがどんどん溢れてくるぞ」
「そんなの嘘よぉ」
有紀は恥ずかしがって否定したが、マサルは花奥からにじみだす蜜を指ですくいあげて見せつけた。透明な液は指の間でぬろりと糸を引いて落ちる。
「これをたっぷり指につけて、クリ×リスをいじると気持ちいいぞ。やってみるか?」
「イヤイヤ。先輩がやってぇ」
有紀はだだっ子のようにかぶりを振って甘い声でマサルにおねだりをする。

「しょうがないなぁ」
マサルはねっとりとした愛液を指にまぶして肉芽にこすりつけた。円を描くように愛撫するたび、有紀の裸身はヒクヒクと敏感な反応をみせる。
有紀は欲情に黒い瞳を潤ませてマサルを見あげた。
「あふっ、はっ……。せ、せんぱぁい、あたし、おかしくなってきちゃう。気持ちがよくって意識がなくなっちゃいそうなの」
「どうして欲しいんだ？」
「先輩のアレをアソコに入れて。有紀、先輩の硬くて太いやつで大事なトコロをいっぱいかきまぜて欲しいの」
「ここに入れて欲しいのか？」
マサルは念を押すように、濡れた膣口を指先でえぐった。
「はひぃ。そ、そこなの。そこに入れてぇ」
マサルはベッドの脇に立って窮屈なジーンズとブリーフを脱ぎ捨てた。股間の息子はもはや硬く太くそそり勃っている。有紀は男のシンボルを目にして思わず吐息をもらした。
（ディーさんにしたみたいに有紀を狂わせて。オマ×コのずっと奥まで突きあげて、気絶するまで犯して欲しいの）

頭の中で恥ずかしい言葉を思い浮かべながら前戯を受けて甘く痺れている身体をうつ伏せに横たえる。
「どうした？」
有紀は首筋まで真っ赤になってか細い声で答えた。
「後ろからして。男の人って、そういうのが好きなんでしょ？」
「有紀はメス犬みたいに後ろから犯されるのが好きなのか？」
「ちがうわ。そんな恥ずかしい言い方をしないで。だいたい、後ろからするのが好きかどうかは、やってみないとわからないんだから」
男を挑発するように形のいいヒップが左右に揺れる。蜜で濡れそぼった秘部は太陽の光を受けてきらきらと光っていた。
「お願い、早く」
有紀は下腹に手をのばして、指でピンク色の陰唇を左右にかき分けた。
「自分の指でオマ×コをそんなにおっぴろげるとは、なんていけない子なんだ」
「有紀ね、本当はすごく悪い子なの。悪い子だから、いっぱいおしおきして。少しくらいなら痛くても平気だから」
有紀は膣口が露出するほど秘部を大きく割りひろげて、肉づきのいいお尻をプリプリと

振ってみせた。
マサルはゴクリと息を呑んで有紀のヒップに手をかけた。
「本当に後ろからでいいんだね？」
「いいわ。たっぷりして。有紀は二度目だから、たぶん激しくしてもだいじょうぶよ」
マサルはその言葉を信じて青筋の立った極太棒の先端を蜜壺の入り口へ押し当てた。
「いくぞ」
有紀は両手でシーツをギュッとつかみ、唇を嚙みしめて肉棒の浸入にそなえる。
マサルは鮮やかなピンク色をした秘花の中央へ剛直をゆっくりとねじこんでいった。狭あいな肉壺は抵抗する様子を見せ、いやいやながら小さなお口を開いて異物を少しずつ呑みこんでいく。
「あうっ」
ヴァギナの壁を亀頭でえぐられ、有紀は思わず小さな声をあげた。
(アソコの入り口が痛いよぉ。こんなに太いものを入れるのはまだ無理なのかしら？　中全体がジンジンしてくるわ)
「有紀のオマ×コはずいぶんきついな。チ×ポを入れるのが大変だよ」
「きついとダメ？」

「いや。根元まで入ってしまえばこっちのものだ」
マサルはその言葉どおり、熱く煮えたぎる蜜壺へ太竿をすっかり埋没させていった。つづけて有紀の太腿と脇腹の間に片手を入れて、勃起して剝けあがった肉芽を指で転がしはじめる。
「あひっ。そ、そんなの……あうっ」
敏感な肉芽をひねるように愛撫するたび、有紀は見事なカーブを描く裸身を震わせて根元まで挿入された勃起をきつく締めつける。
「どうだ、感じるか？」
「うん。すごく感じて痺れちゃう」
有紀はマサルの指に花芯を押しつけるようにして腰をひねりはじめた。そうすると花奥へ突き立てられた極太棒が熱く潤む肉襞の中でうごめいて、ひと味ちがった快感がじわじわとこみあげてくる。
「ああっ、すごい。感じちゃうぅ。んふうぅ……はひぃ」
有紀はうわずった声をあげて激しくヒップを振りたてた。玉のような輝きを持つ美肌にはじっとりと汗が浮かび、息が荒々しく弾んでいる。マサルの手の中にある乳房は硬く充血して上下にゆさゆさと揺れ動いた。ヴァギナは肉襞の表面へ煮えたぎった愛液をぐっし

よりと浮かべて、太幹をイソギンチャクのように締めあげる。
（これ以上持ちこたえられそうもないな）
そう悟ると、マサルは目の前で艶めかしく動いている女のウエストを両手でつかみ、奥歯を噛みしめて抽送を開始した。浅黒い腰をグラインドさせ、剛直の挿入にひねりを加えて秘孔を深々と突きあげた。大きな亀頭で燃えるように熱い膣壁をこすりたてる。
「ううっ。あひぃ！」
有紀は抽送に合わせてヒップを動かし、亀頭がＧスポットを直撃するたびに喉の奥を絞るような嬌声を放った。白い裸身は真っ赤に染まり、四肢の先が震えて四つん這いの体勢を取っているのがむずかしくなってくる。それでも必死に手脚を突っ張って極太棒で貫かれている美尻を高く掲げていた。
「おおおっ、うおっ……。ひぃーっ」
ふたりの結合部は激しくぶつかり合い、ぬくっちゅくっと卑猥な音をたててシーツの上に淫汁をまき散らす。
「有紀、ああ。イキそうだ」
「イッてぇ。有紀の中でイッてぇ！」
悲鳴じみた声にうながされるようにして、マサルは白濁した樹液をヒクヒクとうごめく

淫花の奥にたっぷりと注ぎこむ。
「ひいいっ、熱いぃ。お腹が熱いよぉ。あぁあああっ……」
有紀もまたビクビクッと裸身をのけぞらせて絶頂に達した。イッたと同時に全身から力が抜けてしまい、くたっとシーツの上へ倒れこむ。
「おい、だいじょうぶか？」
マサルはあわてて秘唇からペニスを抜き取り、有紀の上半身を腕に抱きあげた。
「だいじょうぶ。すごくよかったから、気絶しそうになっちゃった」
視線があうと、有紀は頰を真っ赤に染めて微笑んだ。顔中が満ち足りた笑みでとろけきっている。
マサルは会社で彼女のいろんな顔を目にしている。怒った顔、すねた顔、悲しげな顔。有紀は同じ年頃の女の子よりも表情が豊かで、どんな顔をしていても魅力的だった。しかし、絶頂を味わった直後の有紀が、これほど美しく魅惑的な表情を浮かべるとは今まで思いもしなかった。
「きれいだ。こんなにきれいな有紀を見たのは初めてだよ」
マサルは真剣な表情でささやき、絶頂の余韻に浸っている有紀の唇へキスをした。まだ荒く弾む息とともに乳房が上下に揺れている。そのふくらみをつかんで、やさしく揉みあ

げた。
有紀は大きく息を吸いこんで、マサルの腕に手をかけた。
「そんなにされたら、またイッちゃいそう」
「何度でもイケばいいさ。気持ちよさそうな有紀の顔をいつまでも見ていたいんだ」
とささやき、マサルはまだひくついている有紀の狭間に手をのばす。絶頂に達して敏感になっている肉芽を指腹でこすると、彼女は「ああっ」とうめいて裸身をのけぞらせた。
ヌルヌルに潤っている蜜壺に指を2本挿入してGスポットのあたりをじわじわと責めたてる。
「んぅ……ひぃ！　もうダメぇ。身体がバラバラになっちゃう」
有紀は裸身を丸めるようにして、膣壁を刺激するマサルの腕にしがみついた。膣口から4センチほど上の肉壁をえぐられるたびに、身体がわななないて快感の震えが四肢の末端へとひろがっていく。やがて目の前がまばゆい光でいっぱいになって、意識がすうっと遠のいていった。
「ううっ、くふうっ……」
というめき声とともに、有紀の身体はピクリとも動かなくなった。
「イカせすぎておかしくなっちゃったかな？」

マサルは有紀の裸身をもう一度抱きしめた。心配そうに顔を覗きこみ、有紀が気絶しているだけだと知ると白桃のような頬を舌でペロペロと舐めあげる。充血して赤くなっている花芯を指でつまんでいじってみても、有紀は目を覚まさなかった。

「可愛いやつだな」

マサルは大きくのびをして深呼吸をした。久しぶりに射精後の解放感を味わって身も心も満足したが、急に不安が胸の奥からこみあげてきた。

（オレは本当に無意識のうちに有紀やディーを犯したりしたんだろうか？　有紀が言うとおり二重人格なのか？）

地元の高校を出るまでは親元で暮らしていたし、大学の時は寮で集団生活を経験した。だから、もしもマサルが二重人格で無意識のうちに別の人格が出現して犯罪を犯しているなら、親か友達がそれを教えてくれたにちがいないと思う。

（とすると、二重人格になったのは最近のことなのか？　原因はなんだろう）

いくら考えてみても、マサルには思い当たる点などない。あれこれと思案しながら熱いシャワーを浴びてベッドルームへ戻った。

「とにかく今は、理乃が無事に戻ることを祈ろう」

ぐっすり眠っている有紀の身体に毛布をかけてあげて、そのかたわらに腰を降ろす。

（オレの理想は朝野弥生（あさのやよい）だったが、本当に相性がいいのは有紀みたいな女なのかもしれないな。有紀ならセックスの好みは一致してるし、お嬢さま育ちで世間知らずの理乃とちがって、ケンカをしてもすぐに仲直りできそうだ）

ぼんやり考えていると、リビングルームのほうから呼び鈴の音が聞こえてきた。

裸の腰にバスタオルを巻いただけの姿でドアスコープを覗くと、男性従業員が立っているのが見えた。ロックを解除し、チェーンをはずしてドアを開ける。

〈先ほど市警のかたがお見えになって、これをお渡しするようにとのことでした〉

従業員が差しだしたのはホテルの向かいにあるデパートの紙袋だった。

〈ああ、ありがとう〉

マサルはチップを渡して従業員を返し、紙袋の中を覗きこんだ。

「そうか。ディーの車に置き忘れたんだな。スーツがしわだらけだ。クリーニングに出しておかないと……」

袋からしわくちゃのズボンを取りだそうとした時、指先に固いものが触れたような気がして、マサルは背広のポケットをまさぐった。そこにはサテンのスキャンティと4つ折りにたたまれた茶色い封筒が入っていた。スキャンティを鼻へ軽く押し当ててみると、有紀の身体と同じ匂いがした。

「このスキャンティは有紀のものだったのか」
マサルはスキャンティをたたんでポケットへ戻した。つづけて封筒を逆さにして振ると、手のひらの上に金色の鍵が滑り落ちる。
「鍵の次はまた鍵。そして鍵の秘密をさぐる美少女は、何者かの手中に落ちて行方不明か……」
マサルは淡々とした口調でつぶやき、手がかりはないかと封筒の中を覗きこんだ。
「メモも手紙もないな……いや、待てよ」
封筒をつかんだまま、壁全面にひろがる窓のほうへ歩み寄った。茶色い封筒ののりしろをていねいに剝がして完全にひろげて窓へ押しつける。
太陽の光に透かしてみると、封筒の内側には針でつついたような穴が無数に空いていた。その穴は適当につけられたものではなく3本の直線をはっきりと形成し、『キ』の字を描くようにうがたれていた。その上、直線の端にはそれぞれ『SU・B1vd』、『FL・B1vd』、『KIN・B1vd』と手書きの文字が書きこまれている。そして封筒の隅に『505F6』という文字も記されていた。
「どうしてこんなものが？」
マサルはホテルに備えつけの薄い便せんに3本の線と文字を書き写して、ソファに座り

こんだ。
4つの言葉のうち3つに共通するのは『Blvd』の文字だ。
「『Blvd』、『Blvd』……。BLOOD、BUILDING……。文字は別としておいて、交差する3本の直線が意味するものは……そうか！」
パンと音がするほど平手で強く太腿を叩き、ティーテーブルの電話をつかんだ。内線0をプッシュしてフロントを呼びだす。電話に出たのはアンジェラだった。
〈今すぐ市内の地図を持ってきてくれないか？〉
アンジェラはそれから数分のちに部屋へやってきた。
〈地図をどうなさるんですの？〉
〈理乃が見つかるまでここでぼんやりしてるってのもなんだから、彼女の祖父の遺言の品をもらいにいくんだ。アンジェラ、きみも手伝ってくれ〉
マサルは封筒から書き写したメモを彼女に見せた。
〈この3本の線は『ブールバード』、すなわち『通り』を意味しているんだ。つまり頭に『SU』『FL』『KIN』という文字がつく通りを見つけて、その交差する地点をさがす〉
アンジェラはメモを見ながら少しの間考えこんでいたが、笑顔になってうなずいた。
〈わかったわ。最初のはサンセット・ブールバード。次がフラワー・ブールバードで、そ

のふたつの通りを横切っているのがキング・ブールバードよ〉
〈この地図で教えてくれ〉
彼女は求められるまま市内の地図でそれぞれの通りを指し示した。
〈ということは、ふたつの通りで挟まれたキング・ブールバードのどこかに『５０５Ｆ６』があるのか〉
〈その『５０５Ｆ６』が遺産なの？〉
〈いや、遺産がどんな形状なのかは誰にもわかっていないんだが、これはたぶん番地かなにかだろう。とにかくキング・ブールバードへいってみよう〉
「どこへいくの？」
見るとベッドルームへつづくドアの陰から有紀が顔だけヒョコッとのぞかせている。まだ裸のままらしく、頬を朱に染めてマサルを見つめていた。
「西音寺コンツェルンの遺産をいただきにいく。一緒にいくか？」
「ホント？　５分だけ待って」
その言葉どおり、有紀は５分で着替えてマサルの前に飛びだしてきた。

第8章　遺産に隠された秘密

理乃は裸身に透けるように薄いネグリジェを着て窓の外を眺めていた。

この別荘へ連れこまれてから2日目の夜がすぎようとしている。食事は1日に三度きちんと与えられていたが、ほとんどがハンバーガーやチャイニーズフードをテイクアウトしてきたもので、どれも冷たくてひどい味だった。もちろん、外出はおろか部屋を出ることすら許されていない。別荘にはセキュリティシステムが導入されているらしく、窓に開閉を察知するセンサーが取りつけられていた。

「どうして誰も助けにきてくれないの？」

最初のうちは彼女らしく気丈なところを見せて平静を装っていたが、時間がたつにつれて不安と心細さで胸がいっぱいになってくる。

（誰でもいいから、わたしを助けて。今すぐここから出してくれないと、頭がおかしくなってしまいそう）

理乃はゾクッと背筋を震わせて両腕で自分自身を抱きしめた。

（そろそろアレがくる）

予感どおり、尿と便を排出したいという欲求が下腹から重くせりあがってくる。朱唇を噛みしめ、ベッドに座ってお腹に力を入れてみるが、抵抗しても無駄に等しい。

「お願いよ、もうこんなことはさせないで」

うめくようにつぶやき、部屋の隅までそろそろと歩いていった。床にガラスの水差しとトイレットペーパーが置かれている。

理乃はネグリジェの裾をまくって水差しの上にまたがった。身を切るような羞恥がこみあげてきて、頬も首筋も真っ赤に染まる。両目をつぶり、匂いを感じないように息をとめる。

「イヤ。もうイヤよ……」

苦悶の表情で下腹に力を入れると、水差しの中へ黄色い液と褐色の固体が落ちていく。

フランス人形のような白く美しい頬をひと筋の涙が流れた。トイレットペーパーを手に取って汚れた場所をていねいに清める。その手が秘部に触れた瞬間、理乃はハッと表情を

強張らせた。いつの間にか、ビラビラした肉唇の間が尿とはちがう液で潤んでいる。
（これはなに？　どうしてこんなに濡れているの？）
理乃は花奥から溢れてきた透明な液を、恐るおそる指ですくって鼻の先へ近づけた。その液はかすかに粘り気があるが匂いはほとんどしない。こんな液が出てきたのに気づいたのは生まれて初めてのことで、不安で胸がドキドキしてくる。
「どうしてこんなふうになってしまったの？　まさか、あのフレッドという男にアソコをいじられたせいで身体がおかしくなったの？」
もう一度狭間に手をのばし、奇妙な液が溢れている場所に指で触れてみた。
（まさか、ここは男性のアレが入るところなの？　穴なんてあるようには感じられないけれど、わたしのここにもアレが入れられるの？）
きつく閉じたまぶたの裏には、強制的に見せられたアダルトビデオの場面が浮かびあがっている。
理乃は目を閉じたままで白い指を肉芽へ持っていった。ためらいがちにクリ×リスへ触れると、小さな悦楽の波が湧きあがって下腹部がゾクゾクわなないてくる。
「ああ……」
小さなあえぎ声をもらし、もう一度花芯へ軽くタッチした。

（こんなことをしてはいけないわ）

頭の中ではそう思うのだが、その指は理乃の意志に反して敏感なピンク色の真珠をゆっくりと刺激しつづけている。オナニーをするのは生まれて初めてだったが、肉の突起に指腹を押し当ててクリームをすりこむように揉みしだくたびに、狭間から心地よい波がこみあげてきて目の前がまばゆく光る。

「くうっ……」

理乃はとうとうペタンと床に尻モチをついて両脚をM字に開脚した。今にも泣きだしそうな顔になって秘部をこすりたてる。

（ここに触ると気持ちがよくなるなんて、今まで誰も教えてくれなかったわ。とても下品で頬が熱くなるほど恥ずかしくてたまらないのに、どうしても気持ちがよくてやめられないの）

「あっ、ああっ」

指先に愛液をまぶしてクリ×リスをいじるうちに、手足が小刻みにけいれんして皮膚の表面に汗が吹きでてくる。まるで全身の細胞が一気に生まれ変わろうとしているような激しくて新鮮な感覚だ。快感のあまり身体中がバラバラに飛び散ってしまいそうな気がしてきて、急に怖くなってくる。

「あひぃ……助けてっ、ああーっ」

理乃は床の上にあお向けになり、四肢を激しく震わせて絶頂に達した。白い裸身は上気して桃色に染まり、美肌は霧のような汗でしっとり潤んでいる。息をするたびに88センチの乳房がネグリジェの下で上下に揺れ動いた。

「はっ、はあっ、はああっ」

〈すっかり奴隷生活に慣れてきたようね？〉

理乃はビクッとしてドアのほうを向いた。誰もいないとばかり思っていたのに、いつの間にかひとりの女が音もなく部屋に入ってきて壁にもたれかかっている。

「そんな……」

激しい羞恥を感じ、理乃は両手で顔を覆ってその場にうずくまった。心の奥から絶望がこみあげてきて目から涙が溢れだす。

〈気にすることはないのよ。そのうち、人前でおもらしをしたりオナニーをするのが大好きになっちゃうんだから〉

女は歩み寄って、理乃の腕をつかんだ。乱暴に引きずり立たせてベッドへ連れていく。人形のように美しい少女をしわだらけのシーツの上へ突き飛ばした。

理乃は急いでベッドに起きあがり、祈るように両手を組んで目の前の女を見あげた。無

駄だとわかっていても、どうしても哀願せずにはいられない。
〈お願いです。家に帰して〉
〈それはできないわ。あなたは大切なプリティドールなんだから〉
〈プリティドール？〉
〈そうよ。おまえはもう人間ではないわ。『お人形』なの。意志を持たない人形のようにあたしたちの命令どおりに動きつづけ、商品価値がなくなったら身体中をバラバラに分解して、今度はそれらを新たな商品として販売するの〉
理乃は言葉の意味がよく理解できずに表情を曇らせた。
〈おまえはもう二度と自分の意志を持つことはできない。でも、おまえがよく努力してお客さまに奉仕すれば、分解される前に特定のお客さまがついて、肉奴隷としてお買いあげいただけるかもしれないわ〉
〈わたしを売るの？〉
女は平然とうなずいて、頬にかかる白っぽいブロンドを両手でかきあげた。理乃の青白い顔を見つめながらゆったりしたニットのワンピースを脱いでいく。
〈いい思いをしたかったらビデオを見てよく勉強するのね。いろんなテクニックを覚えておけば、お客さまに接する機会が自然と増えて、自分を売りこみやすくなるから〉

ブロンドの女は紫色のブラジャーに包まれた巨乳を誇示するように両手ですくいあげた。
〈Gスポットって知ってる？〉
理乃は頬を強張らせたまま、イヤイヤと頭を振った。
〈それじゃあ教えてあげるわ〉
女は全裸になってベッドへあがり、理乃の前に座りこんだ。理乃の白い太腿をV字に開かせて、その上に小麦色の太腿を1本ずつ重ねるように置く。4本の脚が絡み合って、まるで2本の松葉の葉を互いちがいに重ねたような格好になった。
〈オマ×コ開いて〉
理乃は「えっ？」と絶句した。
〈アソコのビラビラを自分の指で開くのよ。それくらいできるでしょ？〉
〈そんなこと、できません〉
〈やるのよ〉
ネグリジェ越しに乳首をつねられて、お嬢さまは「ヒイッ！」と声をあげた。黒い瞳に涙を浮かべながら自分の指で秘唇を割りひろげる。
〈そうよ。それじゃあ、あたしがするのと同じようにやるのよ。いいわね？〉
女は小麦色に日焼けした指で理乃の膣口の周囲をなぞりあげた。

〈もう濡れてるわ。オマ×コ汁でヌルヌルよ。さあ、あたしにも同じようにして〉

理乃は全身を震わせつつ、女の狭間へそっと手をのばした。

(ヘタに逆らって痛い目を見るくらいなら、いっそ言われたとおりにしたほうが利口かもしれない)

そう思って、女の愛撫をまねて陰唇をひろげてその内側をこすりたてる。

〈ハアァン。そうよ、クリ×リスを剝きだしにして、たっぷりいじりまわして。おまえもそこをいじられるのが大好きでしょ?〉

ふたりは互いの秘部へ両手をのばし、人差し指と中指の腹で敏感な肉のお豆をそっと揉みしだく。

「んっ……」

理乃は忘れかけていた官能の波がまたもやこみあげてくるのを感じて唇を嚙みしめた。充血した突起をいじられるたびに、内腿がプルプル震えて息が荒く弾んでくる。

〈お願いです、もうこんなことはやめて……〉

〈じゃあ、そろそろGスポットを教えてあげましょうか〉

女は目尻を赤く染めて理乃の秘孔に人差し指を押しつけた。

「まさか、そんな……」

理乃は女の指から逃れようとヒップを浮かせた。だが、太腿の上に女の両脚が乗っているのでほとんど身動きできない。

〈指くらい入れても平気よ。タンポンより細いんだから〉

〈いやっ！　お願い、もうやめてください！〉

女は理乃の肩をつかんで抵抗を封じ、濡れそぼった蜜壺に人差し指を挿入した。

〈ほらね、簡単に入っちゃったわ。おまえも同じようにするのよ。やらないとひどい目にあわせるからね〉

シルバーブロンドの女は理乃の右手をつかんで、その手を自分の秘裂に持っていった。

〈入れるのよ。入れなきゃ、今すぐフレッドを呼んできておまえをレイプさせるわ。それでもいいの？〉

理乃は恐怖に表情をひきつらせ、導かれるままに女の秘孔へ人差し指を挿入する。

〈そうよ。１本じゃなくて３本まとめて入れるの。根元まで入れて、こんなふうに中を引っかくようにいじってちょうだい〉

女はやりかたを示すように理乃の蜜壺の内側を指腹でえぐりはじめた。人差し指を小刻みに震わせながら動かしていく。

「あっ、あああっ……」

（動いてる。アソコの中で、指が……）

理乃は花奥から快感の波が湧きあがってくるのを感じた。女の秘裂を3本まとめた指で必死にかきまわした。白い指をうごめかせると秘唇と指がこすれ合って、ヌチョヌチョと恥ずかしい音がたつ。

ふたりの女は息を弾ませながら互いの淫花を執拗に愛撫し合った。

〈そうよ。もうちょっと奥……。そう、そのへんがわたしのGスポットよ。そこをいじられるとすごく感じて……オウッ、そこぉっ！〉

ブロンドの女はうわずった声をあげてヒップを揺すりたてた。理乃の乙女壺を指で犯す一方、別の手で美少女の白い乳房を揉みあげる。

「あっ……ひいいっ」

理乃もまた、甘いよがり声を放って背中をのけぞらせた。女の指は理乃のGスポットとクリ×リス、そして右の乳房を3点同時に責めている。熱く潤んだ肉襞をえぐられるたびに内腿がブルブルわななき、目の前が真っ白に染まった。

「ひーっ。そっ……もぉやめっ……あひーっ」

西音寺家の令嬢は裸身を震わせ、双眼を歓喜の涙で濡らしてよがりつづける。女の指が深々と突き刺さった膣口は溢れだした淫蜜でトロトロにとろけきっている。

〈もっと激しく！　自分だけイッたら許さないわよ〉

理乃は女に叱咤されてあわててヌルヌルのオマ×コを責めたが、とうとうこらえきれずに四肢をガクガクとけいれんさせてイッてしまった。気が遠くなってベッドへあお向けに倒れこむ。

〈ひとりだけイッちゃうなんて、本当に身勝手なお嬢さまだこと〉

女は理乃の太腿にまたがって膝立ちになり、オナニーをはじめた。理乃の指を自分の秘孔へ出し入れしつつ、自分の指でクリ×リスを刺激する。

〈ハンッ……ハヒイッ、ヒッ。ンハァーッ〉

背中に流れ落ちるシルバーブロンドを振り乱し、形のいいヒップを縦横無尽に振りたてて快感をむさぼる。

〈オッ、オオウーッ！〉

女はエクスタシーに達して、ベッドへあお向けに転がった。今度はまだひくついている蜜壺へ自分の指を3本挿入する。ヌルヌルの液で潤みきったヴァギナは細い指をキューッと締めつけた。

〈ハヒイッ〉

勃起した肉芽に軽く触れただけで、またもや快感がこみあげてくる。

〈オオッ。きちゃうわ。波がきちゃう〉
ジェニーは全身の血という血が煮えたぎるのを感じつつ、甲高いよがり声をあげて悶えている。ちょうどその時、ドアが開いてフレッドが中を覗きこんだ。
〈ジェニー、アンジェラから電話で、日本人の男が事務所へ向かったそうだ〉
〈日本人？　それは刑事なの？〉
〈いや、話によると理乃の知り合いらしい。なんでも、理乃の祖父の遺産をもらいにきたとか……〉
〈遺産ですって？　そんなもの、あの事務所にはないわよ。西音寺宗一郎はいったいどうして事務所の場所をかぎつけたのかしら？〉
〈事情はわからないが、とにかくオレは様子を見にいってくる〉
〈わかった。いざとなったらその男を消すのよ。いいわね？〉
〈ああ。いつもどおりに連れだして、どこかで解体するよ〉
フレッドが出ていくと、ジェニーと呼ばれた女はベッドの上に座り直して考えこんだ。
〈美和子(みわこ)は理乃はひとりで日本を発ったと言ったはずよ。それなのにどうして男がついてきたの？　ボーイフレンドが勝手に後を追いかけてきたのかしら？　変だわ〉
背後を振りかえった瞬間、ジェニーは理乃の視線を捕らえてギョッとなった。

〈今の話、聞いていたの？〉

理乃は答えず、パッと身を起こして部屋から逃げだそうとする。

だが、ジェニーの反応は早く、理乃の腕をつかんでベッドへねじ伏せてしまった。細くきゃしゃなウエストに馬乗りになって、身悶える理乃の首に両手をかける。

〈処女の身体をもう少し楽しませてもらおうと思っていたけど、もう生かしてはおけないわ。今すぐ死んでもらう。美和子には、おまえは事故死したと伝えることにしよう〉

理乃は殺気に満ちた女の目を真っすぐに見かえした。

〈美和子ってお義母(かあ)さまのこと？　どうしてあなたが、わたしのお義母さまを知っているの？〉

〈美和子は、おまえがあまりにもワガママで言うことを聞かないから、たっぷり調教して柔順な女の子にしてくれ、とあたしに頼んだのよ。日本にいるおまえの知人には『理乃は祖父の死を悲しみ、傷ついた心をいやすためにアメリカへ留学した』と伝えてあるわ。つまり、おまえが誘拐されたことは誰も知らない。今うちの事務所にいる日本人の男を除いてはね。もっとも、その男はこれからフレッドに殺されることになるんだけど〉

ジェニーは微笑を浮かべて理乃の首にかけた両手へ徐々に力をこめていく。

理乃は必死に四肢をもがいて抵抗したが、女の力は恐ろしく強く、その身体をはねのけ

ることすらできない。呼吸が苦しくなり、目の前がすうっと暗くなっていく。
〈ほほほほ。誰だって死んでしまえばただの肉の塊になるのよ。でも、おまえの肉体にはまだ使い道があるわ。死んだと同時に移植可能なパーツをすべて切除して高値で売り飛ばす。角膜も、腎臓も、肝臓も、使えるものはすべてね。もっとも、おまえの場合は移植に必要な検査はまだ行なっていないから、使用できるパーツは限られているけれど〉
　理乃は女の声を聞きながら、魂が地獄めがけて落ちていくような墜落感を感じていた。全身から力が抜けて手足の先が冷たくなっていく。
（助けて！）
　意識がなくなる寸前、理乃の脳裏には浅黒い男の顔がぼんやりと浮かんでいた。

第9章　真昼の大どんでん返し

マサルと有紀はアンジェラの運転する車でキング・ブールバードへ向かった。
キング・ブールバードはその名のとおり、片道6車線の見事な大通りだった。通りの両側には5メートルほどの若いパームツリーが等間隔に植えられている。
「505番地はこのへんだけど……」
「あった！　あれじゃない？」
後部座席の有紀が声をあげて古びたビルを指差した。ビルの正面玄関の真上には番地を示す金色のプレートがはめこまれていて、その数字は『505』だった。
〈車をその先のパーキングエリアに停めておきます。わたしはおふたりが戻られるのを車で待っていますから〉

マサルはアンジェラを車に残し、有紀とともにビルへ急いだ。玄関は小さなホールになっていて奥に階段があり、右手には郵便受けが並んでいる。
「505F6。F6は部屋の番号か？」
しかし、郵便受けに記された部屋番号は2ケタの数字で、ローマ字はついていない。
「わかった！　F6は『Floor6』、つまり6階なんじゃない？」
「そうなると、あとはこの鍵が頼りだな」
マサルは有紀を連れて階段を駆け登った。
6階には廊下を挟んで8室がある。すべてオフィスらしく、ドアのすりガラスにそれぞれ社名が記されていた。が、祝日のせいかフロア全体がシーンと静まりかえっていた。
マサルはひと部屋ずつドアをノックし、返事がないのを確かめると鍵穴にキーを挿入していった。
「ホントにこのフロアの部屋の鍵なのかなぁ？」
有紀の疑問に答えるように最後の部屋の鍵が開いた。ノブをまわしてドアを開けると生温い空気がむっと溢れてふたりの身体を包みこむ。
「ん〜。なんか、ずっと使ってないって感じね」
「そうだな。有紀、この部屋の持ち主が誰なのか調べてみてくれ。……おっと。あんまり

めちゃくちゃにかきまわすなよ」

「わかった」

部屋の中は8畳間ほどの広さで壁際にスチールデスクが1台あり、その上にパソコンと電話があった。他には細長いロッカーと小さな洗面台、そしてソファがあるだけだ。

マサルはデスクの前に座って机の引きだしを開けてみた。

1番目の引きだしにはこの住所あての数枚の封書と筆記用具が入っている。2番目の引きだしにはラベルに書きこみをしたフロッピーが数枚と経理の帳簿らしきファイルがあった。ためしにパソコンを立ちあげてフロッピーを1枚読みこませてみる。

数秒置いて灰色のブラウン管に文書名がいくつか浮かびあがった。

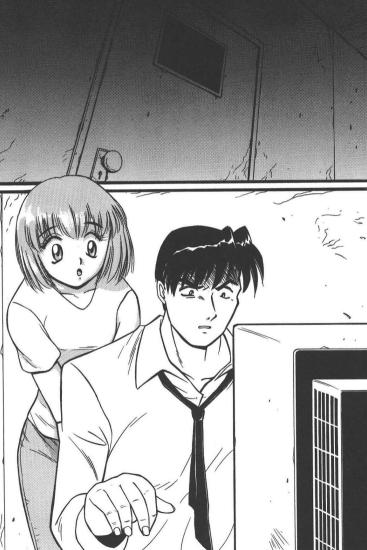
「『在庫リスト』と『入金処理』か」

(西音寺宗一郎はなぜこの部屋の鍵をオレに託したのだろう?)

マサルは不思議に思いつつ、『在庫リスト』を選択した。その項目にはマサルが日頃会社のカタログでよく見かける英単語が記されている。

「品名『血液』『角膜』『腎臓』『骨髄』……。なんだ、これは?」

リストには人間の肉体の部位につづいて、それらの数量と入庫、出庫の数が明記されている。備考欄の隣には『提供者』という欄があり、名前と年令が記されていた。

「きゃー！　すごいの見つけちゃった」

有紀は洗面台のミラーボックスをかきまわしているところだった。にこにこしながらマサルのほうへきて手の上のものを見せつけた。それは金でできたアトマイザーだった。

「これって、先月イギリスで行なわれたオークションに出品されたものなのよ。スイスの巨匠のハンドメイドで世界中にふたつしかないの。たしか、落札価格はふたつ一緒で5万ドルっていう話だったのよね」

有紀は表面に百合の模様が彫りこまれたアトマイザーを指の間に挟みこみ、宙に透かしてうっとりと見とれた。

「なんでそんなことを知ってるんだ？」

「『ブランド・ファッション』っていうテレビで見たの。落札したのが日本人だって聞いて、それで覚えてたんだ。こんなに高価なものをそこいらへんに無造作に置いとくなんて、すごい無用心よねぇ」

有紀は香を試すつもりでアトマイザーの蓋を取って自分の手首に吹きつけた。

「おい、こんなところで……」

想像したとおり、たちまち狭い室内に香水の匂いが充満する。その匂いをかいだマサルは、眉をしかめて有紀の手から香水入れをもぎ取った。

「やーん。少しくらいいいじゃない」
「いや……。もしかすると、この香水入れの持ち主はオレの知ってる女かもしれない」
マサルは香水の匂いを胸いっぱいに吸いこみ、アトマイザーをしげしげと見つめた。
（オレンジのように甘酸っぱくて、同時にスパイシーな大人の香……）
「そうか、ジェニーだ！」
マサルは金のアトマイザーを握ったまま、スチールデスクへ取ってかえした。受話器を取って、ディーの携帯電話の番号をプッシュする。
（そういえば、ディーの携帯電話にかかってきた女の口調は、飛行機の中で耳にしたジェニーのものとそっくりだった。どうしてあの時、気づかなかったんだろう？）
数回のコールの後、呼びだし音がとぎれた。
《どなた？》
〈梨田だ。至急調べて欲しいものがある。ひとつめはジェニーという名の女の身元だ〉
マサルは自分が乗ってきた成田発の飛行機の便名とジェニーの特徴をざっと述べた。
〈たぶん乗客名簿と出入国カードを調べればなにかわかると思う。それと、もうひとつはキング・ブールバード５０５のビルにある会社の持ち主だ。今そこにいるんだが、奇妙なものを見つけたので、それがなにを意味するか調べて欲しい〉

《わかったわ。今すぐ向かうから、そこを動かずにいて》
数分後、女刑事ディーは彼女の瞳と同じグリーンのジャンプスーツに身を包んでマサルの前に現われた。
〈ジェニーの件はいま調査中よ。それで、奇妙なものっていうのは？〉
マサルはパソコンに映しだされた『在庫リスト』を示した。
〈これは……〉
ディーはそう言ったきり絶句してしまった。しなやかな指でキーを叩き、画面上に次々と現われるリストに目を通していく。
〈とんでもないものを見つけてくれたわね。どうしてあなたがこんな場所へくるつもりになったの？〉
〈これは西音寺理乃の祖父が理乃に残した遺産なんだ。オレは偶然彼からこの部屋の鍵を預かって、理乃が遺産を受け取る手伝いをするためにこの街へきたんだよ〉
ディーはイヤイヤとかぶりを振った。
〈こんなものは受け取らないほうがいいわ。金塊や札束とちがって、そう簡単に受け取れるようなものではないし、そんなことをすればよけいな罪をかぶることになるわよ〉
〈罪だって？〉

〈ええそう。これは人身売買のリスト……というより、人間の臓器や血液を売買した時の証拠書類にちがいないわ〉

マサルは驚きのあまり、かえす言葉を失った。

〈世の中には難病で苦しみ、大金を積んででも臓器や血液を手に入れたいと思っている人がいるわ。この会社は誘拐した少女や少年の身体のパーツを高値で売りつけているのよ。もちろんそんなことをすれば法律に触れるから出所を隠して闇売買でね。といっても、角膜移植みたいに比較的簡単な手術ならともかく、複雑な臓器移植は公の場所ではできないし、手術をできる医者も限られているけれど〉

〈じゃあ、この会社がきみの言っていた『Ｍａｒｃｈ』なのか？　どうして西音寺宗一郎がここの鍵を持っていたんだ？〉

女刑事は答えに困ったように肩をすくめ、1番目の引きだしから封書を抜き取って勝手に封を開いた。

〈『Ｍａｒｃｈ』と同一組織かどうかは詳しく調査しないとわからないわ。たぶんこの会社の『倉庫』の場所を調べてみればなにかわかるはず……。あら、ビンゴ（大当たり）よ！〉

〈ビンゴ？〉

〈これは警備会社からの請求書よ。毎月こんなに高い額を払っているということは、この

『倉庫』にはかなり大切なものを保管しているということになるわね〉
〈じゃあ、誘拐した子供たちもそこにいるのか？　まさか理乃もそこに……〉
〈今すぐ『倉庫』へいってみましょう〉
ビルのすぐ前にワインレッドのプジョーが鎮座していた。
〈ディー、その先のパーキングエリアにアンジェラがいるはずだ。彼女にひとこと断わっておかないと〉
〈アンジェラならもういないと思うわ。でも、尾行をつけてあるから安心して〉
〈なんだって？〉
ディーはプジョーのギアをハイトップまで持っていきながら説明する。
〈考えてみて。メキシコへいく途中、携帯にかかってきた理乃の情報はガセネタだったのよ。あの電話は彼女が誘拐されたと通報があった時に市警から借り受けてきたものだから、備品係以外の人間は番号を知らないはずなの。それなのにどうして『やつら』はわたしの携帯の番号を知ったのだと思う？〉
マサルは考えこみ、けれど答えられずにディーへかぶりを振ってみせた。
〈わたしがホテルで部下に番号を教えた時、そばにはアンジェラもいたわ。つまり、理乃の素性を知っていて、なおかつわたしの携帯の番号を知っていたのは彼女しかいない、と

いうことになるわね〉

〈待ってくれ。そうなると、アンジェラは理乃を誘拐した犯人の仲間なのか？〉

〈そうかもしれない。だから念のために私服刑事に尾行させているのよ〉

ディーは携帯電話を使って事務所から持ちだした封筒の住所を市警本部に連絡する。その間、マサルは後部座席の有紀にディーの推理を日本語で説明した。

「じゃあ、センパイが言ってたジェニーっていう人は誰なの？」

「オレはアメリカへくる途中、機内でジェニーがあの香水入れを持っていたのを目撃している。もしもあの香水入れが世界中にふたつしかないものの片方なら、彼女はあの部屋に出入りしている人間のひとりじゃないかと思うんだ」

〈ユキ、頭をかがめて〉

「えっ、なに？」

有紀が問いかえした瞬間、ビシッという音とともにフロントガラスに穴が開いた。

「ひゃあっ！　今のなに!?」

マサルはプジョーの約10メートル斜め後方に傷だらけの黄色いムスタングがいるのを見つけた。ムスタングの助手席から中年の男が片腕だけ突きだすようにして拳銃の狙いを定めている。

〈ディー!〉

〈わかってるわ。マサル、これを使って〉

ディーは片手でハンドルを切ると同時に、マサルの手に女性が護身用に携帯するコルトを押しつけた。

〈冗談だろ?〉

〈その手の小型銃なら発射の際の反動は少ないから初心者でも扱えるはずよ。予備の弾はシートの下にあるわ。あとの責任はわたしが取るから、早くあいつらを片づけて〉

そうこうしているうちにも、ムスタングの狙撃者は次々と弾を撃ちこんでくる。プジョーのサイドミラーは砕け、助手席のヘッドレストにもぽっかりと穴があく。

ディーは車と車の間をすり抜け、赤信号をぶっちぎる。交差点で90度に近い角度でプジョーをターンさせる。ワインレッドの高級車は悲鳴じみた甲高いノイズを放った。衝撃で銀のホイールキャップがはずれて歩道へと転がっていく。

「センパイ、このままじゃ死んじゃうよ〜っ。きゃーっ!」

「有紀、車がとまるまでずっとそのままでいるんだぞ」

マサルは銃の安全装置をはずし、グリップを両手で握りしめた。発射の反動で体勢が崩れないよう両脚に力を入れてトリガーを引く。

パン！

コルトは小さな音をたてて弾を射出した。真っすぐ前にのばされたマサルの両腕は一瞬宙に跳ねあがり、グリップを握る手にビリッと痺れが走る。目を凝らして狙いを定めたというのに、鉛の弾はムスタングのボディをかすりもしなかった。

「くそっ」

〈腕が跳ねないように体を固定して狙いを定めて〉

ディーはプジョーをジグザグに進めながら、射撃の初心者相手に無理なことを言う。

〈わかった〉

マサルはシートに両膝をつき、両腕をヘッドレストに乗せて狙いを定めた。

その刹那、マサルの右肩の肉がバッと弾けた。いきなり焼け火箸を突き立てられたような激痛が右肩全体に走る。

「ぐっ……」

「先輩！」

有紀が悲鳴をあげて身を乗りだす。

「だめだ、隠れてろ」

「冗談言わないでよ、ケガ人は引っこんでて！」

有紀はなおも狙いを定めようとするマサルの手からコルトをもぎ取った。顔色は真っ青で、怒りのあまり表情が強張っている。
「もーあったまきたっ！」
叫ぶやいなや、有紀は片手でコルトをぶっぱなした。
パン、パン、パン。
乾いた音とともに、ムスタングのライト、ボンネット、フロントガラスへ次々と穴があく。6発全部放出してしまうと、有紀は運転席のシートの下から予備の弾を取りだして慣れた手つきで充塡する。
マサルはポカンとした表情で問いかけた。
「どうしてそんなに手慣れているんだ？」
「去年グアムへ旅行した時、現地でピストルの射撃体験をしたの。コルトはその時経験ずみよ。うまいでしょ？」
カリフォルニアの風が絹のようなストレートヘアをふわりと宙に巻きあげる。有紀はニッと笑って狙いを定めた。
「イケイケ、いっちゃえーっ！」
パン、パン、パン、パン。

次の瞬間、黄色いムスタングはキキキーッという悲鳴をあげてノーズを左右に揺すりだした。有紀の放った弾がドライバーに命中したのだ。
〈やったわ！〉
ディーの言葉どおり、ムスタングは右へ大きくそれてバスの停留所に突っこんでいった。鉄製のポールに正面から体当たりをかませてようやく停止する。ひしゃげたボンネットの下から白い蒸気が激しく吹きだした。
ディーは銃傷だらけのプジョーをターンさせてムスタングの後ろにつけた。市警から支給されているピストルを片手で構えて事故車に近づいていく。
ムスタングの運転席のドアは追突の衝撃で10センチほど開き、ゆらゆらと揺れていた。
〈手をあげて出てきなさい〉
しかし、車中から反応はなかった。女刑事がパンプスのかかとで蹴りを入れると、ドアはぐらりと傾いて大きく開き、内側から顔中を鮮血で染めた男があお向けに倒れてくる。
「ひえーっ。あ、あたしの弾、当たっちゃったの？」
有紀は震えながらマサルの腕にしがみついた。ディーが男の頸動脈をさぐるのを恐るおそる見つめている。
〈脈はあるわ。どうやら車が衝突した時、ヘッドボードに頭をぶつけて失神したようね〉

「死んでないの？　よかったぁ」
ディーは運転席の男が、胸のほぼど真ん中に有紀の弾を食らって絶命していることはわざと黙っていた。まだ体温の残る死体のポロシャツの胸ポケットから免許証を取りだして氏名を確認する。
〈フレッド・スミス。住所はパークアベニューか。『倉庫』とはちがうわね〉
そこへ市民の通報を受けて救急車とパトカーがほぼ同時に到着した。
ディーはバッジを見せて事情を説明し、理乃を拉致した男でもあるフレッドの免許証を警官に渡した。金髪をなびかせて振りかえり、マサルに言う。
〈こいつらはたぶん雑魚よ。親玉を見つけにいくわ〉
傷だらけのプジョーは彼ら3人を乗せて再び走りだした。

☆

理乃はうつ伏せで後ろ手に縛られ、ヒップを高くかかげた格好でベッドに突っ伏していた。雪のように白い乳房の下には羽根枕が置かれている。
ブロンドの女、ジェニーは理乃のヒップをつかんで、可愛い割れ目の中央から溢れてくる淫蜜を舌先で舐めあげていた。
「うっ、ううっ……」

（わたし、全裸にされて、大事なところもお尻の穴も全部見られて、その上アソコを舌で舐められているのね）

そう意識すると、羞恥で頭がおかしくなりそうだ。けれど、理乃の若々しい身体はジェニーの執拗な責めにあまりにも正直に反応している。ざらついた舌が清楚（せいそ）な秘花へ触れるたびにお腹の底から快感がこみあげてきて、花奥が疼きだす。

ジェニーは舌の先をクレヴァスへこじ入れて入り口をえぐるように刺激した。同時に人差し指でひときわ敏感な肉芽を円を描くように嬲りはじめる。

理乃は甘美な波が湧き起こってくるのを感じて下半身をゾクゾクと震わせた。全身が熱く火照り、頭の中が痺れてぼんやりしてくる。

「うはぁっ……。お、お願い、もう……」

ジェニーは淫蜜で熱くとろける花園から舌を抜いて、理乃の裸身をあお向けに転がした。硬くしこったピンク色の乳首をつねりあげて黒い瞳を覗きこむ。

〈もうやめて欲しいの？〉

理乃は目を潤ませて小さくイヤイヤと頭を振る。

〈それじゃ、今日はこれくらいにしておこうか〉

ジェニーがベッドから降りようとするのを見て、理乃は〈待って！〉と声をかけた。

〈お願いです、もっとしてください。もっと、さっきのように……〉

〈さっきのように、どうするの？〉

理乃の頬がさっと赤く染まった。肩で息をし、形のいい乳房を弾ませて年上の女を見あげるが、理性が働いて小さな声しか出てこない。

〈イ、イカせてください。お願いです〉

ジェニーは意地悪な魔女のような表情になって、羞恥に顔をそむける理乃の頬をつかんだ。無理に自分のほうを向かせて正面から視線をぶつけて問いかける。

〈わたしの指？　それともバイブでイキたいの？〉

〈そんなこと言えません〉

〈言えないならイカせてあげないわ〉

ジェニーは真っ赤なペディキュアを塗った足で理乃の恥丘をぐりぐりと踏みつける。

〈痛い！〉

〈ほら、言ってごらん。指が欲しいの？　それともバイブ？〉

〈バ、バイブです。バイブを……〉

〈どうするの？〉

〈バイブを理乃のプ、プッシーに入れてください〉

理乃の双眼から大粒の涙がこぼれ落ちた。本当はそんなエッチなことをして欲しいのではない。彼女の理性は悪夢のようなこの境遇から解放されて身も心も自由になることを求めている。

それなのに、理性とは裏腹に身体中が絶頂を求めてジンジンと疼いている。中途半端に嬲（なぶ）られたクリ×リスも、尖った乳首も、魂が弾け飛ぶような快感を欲しがっているのだ。

〈お願いです、どうかバイブを根元まで入れて、スイッチを最大にして理乃がイクまでかきまわしてください〉

理乃は泣きながら器具（オモチャ）による愛撫をせがんだ。自分から白い太腿を大きく割りひろげて秘部を女に見せつける。理乃のクレヴァスは秘孔から溢れだした透明な液で菊門までぐっしょりと濡れそぼっていた。

〈やれやれ。この子を一度食べさせてあげたら、すっかり忘れられなくなってしまったようね。本当にわがままで貪欲なお嬢さまだこと〉

ジェニーは長さ15センチ、直径2センチのバイブを理乃に見せつけてから、手のひらを軽く叩いた。美少女の裸身にまたがって上体をかがめる。

〈この子をプッシーに入れて欲しかったら、たっぷりおしゃぶりしなさい〉

理乃は突きつけられた細身のバイブを美唇に含んだ。耐水ビニールで包まれた細い筒を

舌の表面で舐めていく。この器具がスイッチを入れると振動をともないながらぐねぐねと激しく波打つことは、先ほどの責めで体験ずみだった。

〈それくらいでいいわ。やっぱり女って、自分の処女を破った相手のことが忘れられないものなのねぇ。ほら、おまえのロストバージンの相手をくれてやるわ〉

ジェニーは理乃の手首の戒(いまし)めを解き、太腿をつかんで左右に開いた秘唇の中央へバイブをゆっくり挿入していく。

「あっ……」

理乃はその瞬間、ビクッと肩を震わせた。硬くて細いものがお腹の奥に入ってくる。バイブの感触は吐き気をもよおしそうなほどおぞましいのに、スイッチを入れただけでそれが快感に変わっていくと思うと、逆に興奮が高まってくる。

〈ご希望どおり根元まで入ったわよ。これからどうするんだったかしら?〉

ジェニーはその手で理乃の肉芽をチロチロとこすりたてる。

〈スイッチを……スイッチを入れてください〉

〈入れてあげたら、あたしのプッシーを舐めてくれる?〉

〈お願いです。なんでもしますから〉

理乃は身体の疼きにとうとう我慢できなくなって、ヒップをみだらにくねらせた。

〈フフフッ。西音寺のお嬢さまも地に堕ちたものね〉
スイッチが入ると細身のバイブはまるで青蛇のようにうねうねとうごめきはじめる。
その時、どこかで番犬の吠える声がしたが、バイブの振動音にまぎれて、ふたりには聞こえなかった。
〈ひいいっ！〉
少女は花奥を深々とえぐられた。ジェニーがシックスナインの体勢になってクリ×リスを舐めあげると、快感が稲妻のように裸身を駆け抜けていく。
（ああ、まだ男性の体も満足に知らないというのに、こんなもので処女を奪われて快感をむさぼることを覚え、今また絶頂に達しようとしているなんて……）
理乃は身を焼くような激しい羞恥から逃れようと下腹から湧き起こる快感に溺れていく。頭はからっぽになり、全身がとろけて意識が白濁していく。
「うっ。ああっ……ひっ、ひいいっ」
〈舐めて。約束でしょ〉
理乃は震えながら突きつけられた女の秘裂を舌で舐めあげた。だが、バイブの快感はあまりにも強すぎて意識がもうろうとなり、クンニリングスがおろそかになってしまう。
〈さぼってないでちゃんと舐めなさい〉

ジェニーは切なげなあえぎ声をあげるお嬢さまの美唇に、濡れそぼるクレヴァスをぐいぐい押しつけていった。

「ああっ、いっ、イクうっ！」

理乃はひときわ大きく裸身をけいれんさせて絶頂に達した。青白い四肢をぐったりと投げだし、身体中を満たした快感の波がゆっくりと引いていくのを堪能(たんのう)している。秘孔に根元まで挿入されたバイブは、彼女の官能をさらにあおりたてようとするかのように執拗にうごめきつづけた。

「んっ、ああ……」

〈自分だけイクとは、なんてわがままな子なのかしら。許せないわ〉

ジェニーはカッとなって理乃のクリ×リスをつねりあげた。

「ひいーっ！」

すると、少女は両脚をガクガク震わせて背中をのけぞらせた。目尻の赤く染まった魅惑的な表情で女を見あげる。

「ごめんなさい。わたし……ああっ、それだけは……」

ジェニーは理乃の膣奥からバイブを抜き取り、愛液で濡れそぼった先端を小菊のような柔肉のすぼまりへとねじこんでいく。

〈おまえはプッシーが敏感だから、アヌスホールでも同じくらい感じるかもしれないわ。ほらほら、もう3分の1は入ったわよ〉
お尻の穴をバイブで犯された理乃は、恐怖で美貌を強張らせた。
「痛いっ！　お願い、やめてください。イヤぁ！」
細身のバイブはグネグネとうごめきながら、少女の直腸をじわじわ犯していく。
〈あともう少しよ。本当にエッチなお嬢さまねぇ。やめて、なんて言いながら、お尻の穴でバイブをどんどん食べちゃうんだから〉
理乃の菊門はジェニーの言葉どおり、みだらなオモチャを半分以上もむさぼっている。
〈ほら、今度こそちゃんと舐めるのよ〉
ジェニーはまたもやクンニリングスをさせようとして、泣きじゃくる理乃の顔に自分の秘部を寄せていった。ねっとりとした液で濡れそぼる秘唇を指でかきわけて肉芽を令嬢の口もとに突きつける。理乃がいやいやクリ×リスを舐めはじめると、ジェニーはおかえしに理乃のクリ×リスを指で転がした。
〈んぅ……ひぃぃ！〉
可愛い菊門を犯す振動は理乃の秘部全体を震わせている。ピンク色の突起を嬲りあげられるたびにオシッコがもれてしまいそうなほどの快感が裸身を貫く。

〈ああっ。お、お願いです。そっちにもなにか入れて。お願い〉
理乃はバイブで犯されたヒップをくねらす。ジェニーの肉芽を舌で転がすのを中断してうわずった声をあげた。
〈そっちってなんなの？〉
〈オマ×コです。理乃のオマ×コに指を入れてぇっ！〉
ちょうどその時、部屋のドアが外から開かれて銃をかまえたディーが飛びこんできた。
〈動くな！〉
ベッド上のふたりは、一瞬その身を硬直させた。
だが、ジェニーは状況を悟ると素早く反応し、マットレスの間に隠してあったジャックナイフを抜き取った。銀に光る切っ先を理乃の首筋に突きつける。
〈その子を解放しなさい！〉
〈フフン。こいつの死に顔を見たくなかったら、そこをどくのよ〉
ナイフの鋭い歯先が、理乃の白い皮膚に食いこんでうっすらと血がにじむ。
ふたりの女は互いの顔を凝視し合った。
「理乃……」
その声を聞いて理乃はディーの後ろにマサルが立っているのを見つけた。あられもない

姿を見られてしまった羞恥で、少女の頬から首筋にかけてが真っ赤に染まっていく。
〈それ以上罪を重ねる必要はないわ。バカなことはおよしなさい〉
ディーはピストルを構えたまま1歩前に出る。
〈おまえたち、お嬢さまを殺されたくなかったら、今すぐここから出ていきな〉
ジェニーがそう言ったとたん、彼女の背後で窓ガラスが粉々に砕け散り、裸の背中に破片が突き刺さった。壊れた窓の向こうにはコルトを握りしめた有紀が仁王立ちになっている。ディーの指示で窓ガラスの上部を狙って弾を撃ちこんだのだ。
理乃は渾身(こんしん)の力を振り絞って裸身を前へ投げだした。前のめりに倒れこむ理乃の頭上すれすれをディーが発射した弾がかすめて、ジェニーの肩に着弾する。
〈ああーっ！〉
ジェニーは撃たれた肩を押さえ、叫び声をあげて床にあお向けに崩折れた。
「理乃！」
マサルがとっさに飛びだして理乃の身体を両腕で抱きとめる。
「な、梨田さん……。よかった、助けにきてくださったのね？」
「遅くなってすまなかった。だいじょうぶか？」
黒い瞳に大粒の涙が盛りあがり、理乃はマサルの腕の中で声を殺して泣きじゃくる。

「オレがついていながらこんな目にあわせてしまって、すまなかった」
有紀は心配そうな表情で理乃の背中へ毛布をかけてあげた。マサルは理乃の身体を有紀に預け、傷口を押さえてうずくまるジェニーのほうへ向き直る。
〈こんなところでもう一度会えるとは奇遇だな〉
と言うが早いか、シルバーブロンドの悪女にむしゃぶりついていく。豊かな乳房をわしづかみにして揉みあげ、もう片方の手を太腿の間に差し入れた。
「梨田先輩、また二重人格になってるよっ！」
〈マサル、あなた、もしかして病気なんじゃないの？〉
有紀とディーに怒鳴りつけられ、マサルはハッと正気を取り戻した。

第10章　社内恋愛の結末は……

日本へ帰国すると、マサルはマンションへ寄らずに会社へ直行した。
社長はちょうど在室中で、彼を見ると笑顔になって椅子から立ちあがった。
「梨田くんか。いやぁ、このたびはご苦労ご苦労……そちらの女性は誰だね？」
バーコードはマサルの後ろから入ってきたディーを見て、いぶかしげに眉をひそめた。
「こちらはL市警のディー刑事です。ある事件の捜査のために来日されました」
「事件だと？　そういえば理乃お嬢さまはどうした。一緒じゃなかったのか？」
「彼女なら病院です。少しケガをなさったので」
「なんだと!?　梨田くん、きみはいったいなんのために理乃お嬢さまについていったんだ。
なにもワシはきみに海外旅行をプレゼントしたわけじゃないんだぞ。なんだってお嬢さま

がケガなんかを……」
〈お黙り〉
ディーにいきなりぴしゃりとやられて、バーコードはあんぐりと口を開いて黙りこむ。
女刑事はグリーンの瞳でマサルに問いかけた。
〈彼女はどこにいるの？〉
そこへ社長室のドアがノックされて、弥生がコーヒーを運んできた。
「失礼します」
コーヒーを配り終えて出ていこうとする弥生にマサルが声をかける。
「朝野さん、ちょっと待ってくれないか」
「わたしになにか？」
マサルはジーンズのポケットから金のアトマイザーを抜き取って、弥生の前に差しだした。
「これに見覚えはないかな？」
「あら、わたしのよ。どこで落としたのかしら？」
弥生は百合の模様が入ったアトマイザーを取りあげようとした。けれど、マサルは数秒早くその手を引っこめた。金色の小物を指先に挟んでじっと見つめる。

「朝野くん、これ、ハンドメイドで世界にふたつしかない高価なものなんだってね」
「さあ？　それは、ある人からいただいたものだから、わたしはよく知りませんの」
「『ある人』じゃなくて、西音寺美和子だろ」
理乃の母親の名を聞くやいなや、弥生の顔に緊張の色が走った。
「そんな人知らないわ。友達からいただいたんだもの」
マサルがアトマイザーの蓋を開けて香水を噴きだすと、オレンジのような甘酸っぱくてスパイシーな香が社長室に充満する。
「それに、中の香水はきみのじゃないね？　きみがいつもつけているのは、もっと甘いバニラのような香のものだ」
「最近香水を変えたのよ。今はそれをつけているの」
それまで黙っていたディーがテーブルの上にA４版の書類をポンと投げだした。書類の上部には『イースタンアメリカンバンク』のロゴが印刷され、その下に顧客名と口座番号、そして口座への出入金の内容がすべてプリントされている。
「ジェニーとアンジェラは『Ｍａｒｃｈ』のすべてを白状したよ。『Ｍａｒｃｈ』は翻訳すると『３月』、つまりきみの名前と同じ意味だね」
弥生は弾かれたようにドアへ走った。だが、社長室を飛びだそうとする寸前、手首にデ

ィーの投げつけたクリスタルの灰皿が命中して、ドアの前で棒立ちになる。
「いったいこれはどういうことなんだ？　梨田くん、今すぐわけがわかるように説明したまえ！」
声高に怒鳴り散らすバーコードを、ディーはまたもや〈お黙り〉のひとことで黙らせた。社長は外人に弱いらしく、すぐに勢いをなくして肩をすぼめてしまう。
「わたしがなにをしたというの？　梨田さん、説明してよ」
弥生は開き直って食ってかかった。
「世の中には移植可能な臓器を求めて難病と闘っている人々がいる。そんな人たちの弱みにつけこみ、誘拐した子供たちの臓器を高値で売りつけているやつらがいる。そんな非道なことが許されると思うのか？」
「なにを言っているのか意味がわからないわ」
弥生は頬を引きつらせて、じりじりと後ずさる。
「朝野くん、きみはインターネットを利用して臓器移植が必要な重症の患者とその家族を見つけだし、臓器提供者、つまり誘拐した子供たちのデータと患者のデータが適合すれば、キング・ブールバードにあるダミー会社を通して商品を売りつけている。そうだね？」
「嘘よ！」

ディーは静かに立ちあがり、自分より小柄な弥生をじっと見降ろした。
〈あなたの日本の口座にはダミー会社からの送金が不定期にあるわね。それも、普通では考えられないほど高額の送金が。あれはどういうことなの？〉
「そんなの知らない。わたしは関係ないわ！」
「西音寺美和子は先日イギリスで行なわれたオークションでこの香水を手に入れ、信頼の印としてひとつをきみに、そしてもう片方をジェニーに与えたんだ」
〈証拠はすべて揃っているわ。朝野弥生、あなたを未成年者誘拐その他の容疑で逮捕します〉
「イヤよ！」
マサルは逃げだそうとする弥生の二の腕をとっさにつかんで、言い聞かせる。
「人間の命や臓器を金で売買することは誰にもできない。神の意志にそむく行為なんだ」
「別にいいじゃないの。生きている価値のない人間から臓器を取りだして、必要としている人間に売ってあげているだけのことよ」
「馬鹿なことを言うな！　人間の価値は誰にも決められない。この世で生を受け、やがて命を失うまでは、誰もが存在価値を持っている。無駄な命なんてどこにもないんだ！」
弥生はマサルの手から逃れようと全力でもがいていたが、その言葉を聞くと失念したか

のように抵抗をやめた。マサルを見あげる瞳に涙が盛りあがってくる。
「死ぬには惜しすぎる人が次々と亡くなっていくわ……。それをわたしがとめてはいけないの？　彼らの命を助けてあげてはいけないというの？」
「命の長さを決められるのは神様だけだ」
〈さあ、いきましょう〉
　ディーは弥生の両手に手錠をかけた。社長室を出ていこうとして、ふと思いだしたようにマサルの顔を振りかえった。
〈そうだ、忘れてたわ。これからはキャンディって呼んで。ディーは『ＣＡＮＤＹ』の『Ｄ』。甘すぎる名前だから友達以外にはそう呼ばせないの〉
〈ありがとうキャンディ。また後で会おう〉
　女刑事キャンディはウインクをひとつ残して社長室を出ていった。
「梨田くん。お願いだ、頼むから事情を説明してくれないか？」
　マサルは手の中に握りしめていたアトマイザーをバーコードめがけて放り投げた。
「今回のことはそのうち新聞に詳しく載りますよ。それじゃあ、出張の代休ってことで、来週まで休ませてもらいます。お疲れさまでした」
「梨田くん！」

バーコードの声が追いかけてきたが、マサルはかまわず社長室を出ていった。

☆

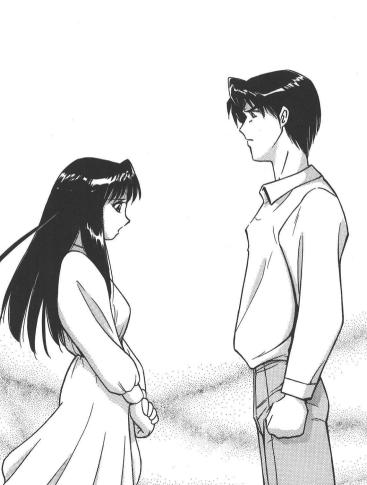
真昼の太陽がマンションのベランダをまばゆい白に染めている。有紀は鼻唄を歌いながら、洗ったばかりのワイシャツをハンガーにかけていた。
「ただいま」
マサルの声を聞いて振り向こうとした瞬間、有紀は背後から抱きしめられていた。
「あ。おかえんなさい。病院、どうだった？」
「うん。それが、信じられない話だが、どうやらオレはストレスが原因で、時々突発性の夢遊病になっていたらしい」
「夢遊病？」
「ああ。人によっては、会社や私生活で強いストレスを受けつづけると、そのうち心と体にズレが生じることがある。オレの場合はアルコールを多量に摂取してから眠りにつくと、次に目覚めるまでの間に別の人格が現われて、無意識のうちに好き勝手なことをしてストレスを発散させていたらしい。理乃を助けにいった時、シラフだったのにジェニーを襲ったのは、ストレスが限界を越えて別のオレが目覚めたんだろうってさ」
有紀は肩越しにマサルの顔を見あげて問いかえした。

「そんなことって、アリ?」
「あるらしいな。すごく珍しいケースだって医者にも言われたよ」
「だよねぇ。なーんか、取ってつけたみたいな理由だなぁ。んあんっ……やだ」
スカートの上からお尻を丸くなぞられて、有紀はゾクッと身体を震わせた。はずみで洗濯物のカゴが倒れて洗いたてのトランクスや下着がふたりの足もとに散乱する。
「ああん。センパイ、お願い、こんなトコでそんなことしないで」
マサルは甘い香のする有紀の首筋にキスをしながら耳もとでささやいた。
「いいだろ。有紀が欲しいんだ」
「でも、なにもこんなトコでしなくたって……はぁん」
マサルは有紀のスカートをまくりあげて、お尻の奥へ右手を差しこんでいく。パンティ越しに秘部を揉みあげ、もう片方の手でTシャツの上から柔らかな乳房をこねまわす。
「あっ……。いやぁん。こんなの、誰かに見られたらっ、ああっ」
有紀はヒップをくねらせながら太腿をきつく閉じて、マサルのイタズラな指をアソコから締めだそうとする。けれども、馬跳びの馬のような格好を取らされてしまうと、大事なところはすっかり無防備になってしまった。
「パンティが湿ってきたぞ。おもらししたのかな?」

「ちがいますっ！　もぉ、梨田先輩がそんなトコを触るからぁ……っ。ああ〜ん」
マサルはそそり勃ってきた剛直を有紀の太腿に押しつけるようにしながら、パンティの中へ右手を挿入する。
「やっぱりヌルヌルだ」
「ダメよぉ。早くしないと、洗濯物が汚れちゃうからぁ」
「わかったわかった。早くしてやる」
マサルはドクドクと脈打っている極太棒の先端を有紀の秘裂に押しつけた。大きく左右に張りだした亀頭に愛液をまぶして、一気に花奥へ挿入する。
「ああーっ……」
マサルはよがり声を放つ有紀の口を片手でふさいだ。熱く潤むヴァギナを硬く勃起した巨根でこすりあげる。ざらついた膣襞は肉茎にねっとりと絡みつき、激しい抽送に合わせてぐいぐい締めつけてくる。
「んっ、んっ……んぐうっ！」
有紀は手すりを両手でつかんで、形のいいお尻を上下に振って身悶えた。まるで頭の中に太陽が飛びこんできたように、まばゆい光が脳裏を満たしている。半裸に剝かれた女体は熱く燃えあがり、全身の細胞が沸騰して次々と弾けていく。

「今日はいちだんと乱れ方が激しいな。スケベ汁が大量に溢れて太腿まで伝ってるぞ」
「いやあっ。言わないでぇ」
有紀は苦しげに眉根を寄せ、かぶりを振って身体をくねらせる。ベランダの向かい側にはここと同じようなマンションが立っていて、その廊下からはこちらが丸見えだった。
（もしもあの廊下を誰かが通りかかって、こっちを見たら……）
と思うと、有紀はいてもたってもいられなくなってくる。それなのに、頭の片隅には（梨田先輩にこんなに愛されているあたしを世界中の人に見て欲しい）という意識がある。
「もっとっ……あうっ。は、早くぅ」
有紀のウエストをつかんだマサルは、肉槍を熱いぬかるみの中へ何度も何度も叩きこんだ。生温かな十指で太幹をしぼりあげられるような感触がして背筋がゾクゾク震えてくる。
ふたりの結合部から溢れた液が、洗いたてのワイシャツの上に飛び散った。
「有紀、どうだ、感じるか？」
「いいっ。すごくいいの。ひいいっ」
有紀は目を潤ませて、大きな声が出ないように必死になって唇を嚙みしめた。太くて硬いもので花奥を突きあげられるたびに高圧電流のような快感が脳天まで突き抜けて、目の前が真っ白に染まる。

「ああっ、せっ、せんぱっ……いいっ。イッちゃううっ」
「有紀。……くっ」
マサルはきつく締めつけてくるヴァギナの奥へ白濁液を噴出した。ほんのり赤く染まった桃尻の上に覆い被さるようにして雄汁をすっかり出しきる。
「あっ。ああっ……ふううっ」
有紀は手すりにぐったりともたれこんで荒々しく息を弾ませた。
「もおっ、こんなトコでしちゃってぇ」
「よかったんだろ？」
「そりゃあ、もー最高っ！　えへへ。すごくドキドキしちゃった」
答える有紀の頬はいっそう赤く染まる。
「誰にも見られてなかったよね？」
「だいじょうぶだろ。偶然見られちゃったならともかく、こんなにスケベでエッチな有紀は、会社のやつらには見せられないな」
「会社の人には内緒よ。有紀がウエディングドレスを着るまでは絶対内緒にしてね」
マサルはうなずき、念のためにベランダの外を覗いた。すると、マンションの前にひとりの少女が立っているのが見えた。マサルはそれが理乃だと気づいて素早くきびすをかえ

した。
「あんっ。どこいくの？」
「理乃がきてるんだ。すぐ戻る」
マンションの玄関から飛びだすと、理乃はまだそこに立っていた。
「もうだいじょうぶなのか？」
「ええ。おじいさまの遺産を受け取らせてもらったわ。それだけ伝えにきたの」
「遺産だって？　そんなものはなかったはずだろ」
「ええ、そう。わたしは最初から存在しないものをさがしていたの」
マサルは理乃の言葉が理解できずに、はかなげな色をたたえた横顔をじっと見つめた。
「人間は誰でも名前や身分という鎧で自分自身を守っている。でも、それらを取り去ってしまえばみんな同じ、ただの生き物に戻るのよ。お金も権力も関係ないただの生き物に。おじいさまはそのことをわたしに伝えたかったんだと思うの。わたしとはまったくちがう生き方をしたあなたと出会わせることによって……」
理乃は白い頬に悲しげな微笑を浮かべてマサルを見あげた。
「わたし、義母の策略で計画的に誘拐されたの。でも、あなたがアメリカまでついてきてくださったのは義母の誤算で、おかげで『Ｍａｒｃｈ』の全貌が明らかになったのよ」

マサルは理乃の言葉を聞くと二の句がつげなくなった。
「梨田さん、おじいさまは『Ｍａｒｃｈ』が西音寺コンツェルンと関わり合いがあるということを知っていて、わたしに罪を暴かせようとしたらしいの。会社には今朝から役人が出入りして、帳簿をいろいろ調べているわ。もちろん屋敷にも。このままだと、わたしは住む場所も友達も、なにもかもすべて失って普通の女の子に戻ることになりそうよ。おじいさまがわたしに遺（のこ）してくださった遺産は、きっと『家柄も肩書きもない自由な生活』だったんだわ」
マサルは不安と心配で震えだす小さな肩を思わず胸に抱き寄せた。
「失う以上のものをこれから手に入れればいい。大事かどうか、わかりもしなかったもののかわりに価値あるものをひとつずつ見つけていけばいい」
マサルの脳裏にはふたりの女の顔が浮かんでいた。
目覚めた瞬間、夢が消えてしまうように、マサルの理想の女、弥生は彼の目前から姿を消した。かわりに命がけで守ってやりたいと思える女、有紀との出会いを残して……。

【おわり】

あとがき　愛しいあなたに♡♡♡

あのね、あのね。
くりすがいつも元気に気持ちよくお仕事できるのは、やっぱりあなたがいてくれるおかげだと思ってるのよ。本当に心からありがとう。
時々、仕事がいろいろ重なってパニクったり、うまく書けなくて泣きそうになったりもするけど、こうしてお仕事してるとあなたに会えるから、辛くても苦しくても頑張れるの。
くりすのこと、いつも暖かく見守っていてね。見守るだけじゃ我慢できなくなったら、その時は電話をくれるとか、伝書鳩飛ばすとか、飛脚にお手紙届けてもらうとかしてね。
どんな方法でもいいから「くりすに会いたい」って言って。無言電話じゃダメよ。
あなたに会えたらキスの雨を降らせて、ありったけの愛であなたを愛してあげる。

こんな小説書いてると、くりす自身すごくエッチなんじゃないかと思われるけど、実はとてもエッチです。あやや、そーじゃなくて、エッチなことをするのはちょっと苦手よ。ディープキスは得意じゃないし、おフェラだってうまくできるかどうか自信ないわ。だけど、あなたにはいろんなことをしてあげたい&ふたりでいろいろしてみたいな。
くちづけをわかち合ったら、次はわたしの服を脱がせて。
女の子の服ってホックやボタンが複雑で脱がせづらい？　でも、1枚ずつ殻を剥がされていくうちに心の鎧が解けていって、どんどん素直になっていけるのよ。
大好きな人には、身も心も飾らない素直なわたしを見て欲しい。愛して欲しいの。
あなたの分身に唇でそっと触れただけで、恥ずかしい場所が熱い液で潤んできちゃう。
やがて大好きなあなたと結ばれると身体中が燃えるように熱く火照って、細胞のひとつひとつが歓びに震えだす。あなたの硬くて太いものがわたしの中を出入りするたびに、目の前が白くかすむような快感がこみあげて、息ができなくなってくる。
「どうしてわたし、こんなにあなたが好きなのかしら？」
そう問いかける間もなく絶頂に達して、あなたとわたしはまるで元からひとつの生き物だったようにトロリと溶けて混じり合う。この瞬間が一番好き。あなたが大好き♡
あなたを好きな理由？　そんなの知らない。だって、気がついたら好きになってたの。

理由なんか関係なく大好きになっちゃってたの。
あのね、いつの間にかあなたに恋するようになってから、時々、夜寝る前にわけもなく幸せな気分になることがあるんだけど、それってきっとあなたのせいよ。
あなたが元気でいてくれると、わたしも元気。あなたが幸せでいてくれると、わたしも幸せ。たとえ離れた場所にいても、あなたの気持ちがわかることもあるのよ。
不思議だけど、本当のことなの。本当に不思議ね。
そういえば、誰かが「恋には抵抗できない」って歌ってたわ。
抵抗なんてする必要ないわよ。だって、人を好きになるのは、とっても素晴らしいことなんだもの。本当に人を好きになったことのある人だけが、恋をした時の幸福感や素晴らしさや不思議な魔力を知ってるんだもの。
あなたは誰かに「好きです」って言ったことがある？「好きです」って告白できる？わたしは言えるわ。大好きなあなたに、「好きです」って、何百回でも何千回でも……。
神様お願い！　大好きなあなたが、いつも至福の愛に包まれていますように。

紅　くりす

――謎とエッチの令嬢誘拐事件――

その夢はミステリー

著　者　紅くりす（くれない）

挿　画　美衣　暁（みい　あきら）

発行所　株式会社フランス書院

東京都文京区後楽2-23-7　〒112

電話　03-3818-2681(代表)

03-3818-3118(編集)

振替　00160-5-93873

印刷　誠宏印刷　　製本　宮田製本

定価・発行日はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本は当社にてお取替えいたします。

ISBN4-8296-2086-2 C0193

9784829620861

1920193005240

ISBN4-8296-2086-2

C0193 ¥524E

★定価 本体524円 +税

西音寺家の遺産を追って
アメリカに渡った理乃&マサル。
誘拐、レイプにカーチェイス…。
次々と起こる怪事件の末、
事態は意外な方向に！
紅くりす+美衣暁が贈る
とってもHなサイコミステリー！